

青少年健全育成啓発 詩・作文集

「か・が・や・き」

令和7年度



越谷市 越谷市教育委員会 青少年育成越谷市民会議

こしがやしこ けんしょう 越谷市子ども憲章

(平成10年11月3日制定)

みず みどり たいよう めぐ こしがやし みらい にな
水と緑と太陽に恵まれた越谷市の未来に担うわたしたちは、
ゆめ ほこ も なか よ たす あ い ちか
夢と誇りを持ち、みんな仲良く助け合って生きていくことを誓い、
ここに「越谷市子ども憲章」を定めます。

じ りつ
自 立——わたしたちは、^{たが みと はげ あ}互いに認め励まし合い、
^{じぶん みち あゆ}自分の道を歩んでいきます。

せ き にん
責 任——わたしたちは、^{れいぎ ただ まも}礼儀正しく、きまりを守り、
^{せきにん も こうどう}責任を持って行動します。

けん こう
健 康——わたしたちは、^{いのち たいせつ}生命を大切にし、
^{あか い}明るく、たくましく生きていきます。

かん しゃ
感 謝——わたしたちは、^{おも こころ}思いやりの心と、
^{きも も つづ}“ありがとう”の気持ちを持ち続けます。

かん きょう
環 境——わたしたちは、^{しぜん ぶんか たいせつ}自然や文化を大切にし、
^{かんきょう}環境にやさしくします。



越谷市子ども憲章石碑：越谷市科学技術体験センター（ミラクル）

はじめに

越谷市長 福田 晃

青少年健全育成啓発詩・作文集「か・が・や・き」が、関係者の皆様のお力添えにより発行できますことに、心より感謝を申し上げます。

「か・が・や・き」は、青少年健全育成事業の一環として毎年発行しており、今年度は、市内公立小中学校全校から応募された五百三十七作品の中から、青少年育成越谷市民会議の役員・理事の皆様により選考された百八十七作品を掲載しています。

「将来の夢」や「学校生活での出来事」のほか、「家族」や「友人」について書かれた作品が多く、子どもたちが、日々、身近な人との関わりを通して、相手を思いやる気持ちや、人とのつながりの大切さを学んでいる様子を感じとることができました。「人とのつながり」や「夢を持つこと」は、時に喜びや支えとなり、自分を成長させる原動力にもなります。また、身近な人だけではなく、様々な立場の人の視点に立って考えることは、生活のあり方が多様化する現代において、子どもたちが社会の一員として成長していく上で、欠かすことのできないことであると考えております。

応募いただいた作品は、いずれも自分の気持ちや丁寧に表示されていました。これは、子どもたちが自分自身と真剣に向き合った証であり、未来を担う子どもたちにとって、こうした取り組みの積み重ねが、今後の成長の土台となることを願っております。

子どもたちの笑顔は、いわば社会の希望の源であり、子どもたちが夢や希望を抱き、健やかに成長することは、健全な社会を築くことにほかなりません。

この「か・が・や・き」を青少年健全育成に携わる皆様や多くの市民の皆様にご一読いただき、子どもたちの思いを受け止めることにより、今後の様々な取組みに活かされることを期待しております。

近年の情報化社会の進展は、青少年のインターネット接続機器の利用を急速に進めており、現代社会では多くの青少年がSNS等を利用し、手軽に情報収集やサービスを利用することができるようになっています。

しかし、一方で、青少年が被害者や加害者となる事件が増えるなど、子どもたちを取り巻く環境は依然厳しい状況が続いております。また、地域とのつながりが希薄化し、子どもたちが地域社会の中で成長することが難しくなっており、行政をはじめ、学校・家庭・地域が連携し、子どもたちが地域の中で夢と希望を持って、自ら成長できる環境を整備する必要があります。

このような中、次代を担う子どもたちが、夢や希望、目標をもって自己実現を果たすことができるよう、「生きる力」の基盤を育むことが教育行政の果たすべき責務だと考えております。

詩・作文集「か・が・や・き」には、「未来に向けて考えること（希望・提案・将来の夢・私のまちの未来について）、日常生活や学校生活の中でチャレンジしていることや感じていること、大人に訴えたいこと」などをテーマとして児童・生徒が日ごろ考えていることが綴られております。本年度は全ての公立小中学校から五百三十七作品の応募がありました。

児童・生徒が日々感じていることを自分の言葉で改めて文章にすることは、自分自身を見つめ直す良い機会になり、また、児童・生徒が自らの気持ちを表現し、多くの方々へ伝えることは、子どもたちに対する社会全体の意識の向上とともに、地域の教育力の推進につながります。

青少年健全育成に携わる関係者の皆様並びに、多くの市民の皆様におかれましては、この「か・が・や・き」を通じて、これからの時代を創っていく未来ある子どもたちの等身大の思いをお読みいただき、子どもたちへの理解を深める契機としていただければ幸いです。

青少年育成越谷市民会議会長 飯 島 孝 子

このたび、青少年健全育成啓発 詩・作文集「か・が・や・き」が、関係者の皆様の多大なるお力添えにより発行できますことに、心より感謝を申し上げます。

青少年育成越谷市民会議では、「あいさつは 心をつなぐ 愛ことば」を統一テーマに掲げ、越谷市・越谷市教育委員会をはじめ、青少年関係団体との連携はもとより、学校・家庭・地域が連携し、市民総ぐるみの青少年健全育成活動を展開しています。

この詩・作文集「か・が・や・き」の発行にあたり、市内公立小中学校の小学四年生から中学三年生までを対象に、「未来に向けて考えること(希望・提案・将来の夢・私のまちの未来について)、日常生活や学校生活の中でチャレンジしていることや感じていること、大人に訴えたいこと」をテーマとした作品を募集いたしました。

本年度は市内全ての公立小中学校から、詩部門で八十七作品、作文部門で四百五十作品、合わせて五百三十七作品の応募をいただき、選考の結果、百八十七作品を選作品として本書に掲載させていただきました。

応募いただいた作品には、夢に向けて取り組んでいることや家族の大切さなど、日々の生活や経験を通して感じたことが、詩や作文というかたちで素直に表現されています。子どもたちそれぞれの素直な思いや考え方からは、未来に向かってたくましく成長していく姿が伝わってきます。

また、子どもたちが自分の思いを詩や文章に表現することは、身近な出来事や社会の様々な側面に目を向け、自分自身の考えを深める貴重な機会であると感じております。

このすばらしい作品を、子どもたちをはじめ、保護者の皆様、地域の皆様など多くの方々に御一読いただきたいと思います。そして、詩・作文集「か・が・や・き」が今後の青少年健全育成の一助となり、未来ある子どもたちが夢や希望を持って成長し続けられるよう心から願います。

もくじ

《作文の部門》 ☆印は優秀作品

目次

☆言えない私のせい	高橋	帆香	千間台小四年	1
わたしのひいおばあちゃん	片山	朱莉	大袋北小四年	2
公園で見つけたバリアフリー	寺西	結香	桜井小四年	4
かつこいいお母さん	関根	楓華	大沢北小四年	5
「弟の未来」	金子	昌眞	千間台小四年	6
みんな平等に	櫛田	空菜	千間台小四年	7
みんなちがってあたりまえ	尾崎	琉楓	新方小四年	8
ひいおばあちゃん、おめでとう	金田	琉希	大袋東小四年	9
人にやさしく	生方	慶士郎	宮本小四年	10
人々への思いやりの街へ	大熊	葵晴	宮本小四年	11
「自分の将来の夢」	森田	奏	城ノ上小四年	12
人々を助けるけいさつ官になるために	藤田	詩	蒲生小四年	13
ことだま	松下	栞子	桜井南小四年	14
「じんけん」ってなあに？	齋藤	晴仁	桜井小四年	15
いっしょにささえあつて	樺沢	結菜	大袋東小四年	17
「言葉の大切さ」	関口	春真	千間台小四年	18
「お母さんに感しゃ」	松尾	悠司	花田小四年	20
お年寄りは大変	青柳	ひなの	大沢小四年	21
「絵で役にたちたい」	河野	紗彩	南越谷小四年	22
想像してみるだけで	櫻井	絢	大袋北小四年	24
戦争をしている国の人たち	種子島	杏梨	宮本小四年	25

えがおであいさつ・	ゆずり合いはまほうの行動・	登校班の班長になって・	災害にあった人のために・	東京の桜はきれい・	やさしさのバトン・	戦争をなくすために・	新しい学校になって・	えがおをケーキでつくる・	思いやりについて・	だれでもなかよく・	やさしい気持ち・	俺の野球・	わからはじまる平和・	☆「こんにちは」のプレゼント	言葉の使い方・	みんなの良さ・	親友のはげますパワー・	好きなことを好きなままに・	最高の大家族・	「日本文化について」	僕のザップ・	私の将来の夢・	センターへの道・	私の妹・	
齋藤	松本	菊池	志田	池田	須賀	中村	木立	江口	高口	梶原	馬場	大塚	古海	細井	遠藤	小川	小川	厚川	宇田川	漆山	茅野	水村	篠原	安原	石原
華	彩	あすか	渚紗	志織	あかり	明日香	宗助	咲良	朔人	董	彩妃	棕仁	結愛	ちとせ	千鶴	夏芽	穂紫	季里	月姫	美悠	楓玖	董礼	琉桜	奈月	
千間台小四年	桜井南小四年	桜井南小四年	大沢小四年	桜井小四年	荻島小四年	南越谷小四年	大袋北小四年	平方小四年	宮本小四年	西方小四年	花田小四年	蒲生小四年	蒲生小四年	平方小五年	大袋東小五年	大袋北小五年	大袋東小五年	平方小五年	平方小五年	平方小五年	蒲生小五年	平方小五年	蒲生小五年	南越谷小五年	大袋北小五年
26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	40	42	43	44	46	47	48	49	50	51	53	54	

小さな勇気をふりしぼって	人権を失うことの苦しさ	なんで決めているの	「大切な人」	おばあちゃんの塩むすび	私のはだ	「みんなが輝ける場所」	光を探して	「将来の夢」	一步前へ	将来の夢	将来の自分	心のかべと盲導犬とぼく	命の薬で人を元気に	「私達の住むきれいな街」	双子の奇跡	しょう来のゆめ	しょうがい者にやさしくしよう	私のおじいちゃん	弟とけんか	今がんばっていること	ゆめに向かつて	しょうがいのある人と未来	ぼ金の大切さ	わたしとあいぼうの夢
宮田	六川	高	齋藤	錦	竹	浪	池	大	森	市	伊	速	齋	飯	富	松	久	坂	北	岩	里	中	星	平
こ	心	ゆ	実	玲	梅	麻	優	俊	真	環	心	暁	初	心	遥	子	絆	晴	一	七	紗	玲	由	絢
ね	結	な	玖	奈	衣	央	花	仁	優	奈	春	暁	依	遥	子	子	夏	香	蔵	望	愛	美	羽	萌
明	千	千	蒲	大	大	南	西	鷺	荻	川	川	大	蒲	蒲	千	蒲	荻	大	大	平	平	鷺	千	花
正	間	間	生	沢	相	越	方	後	島	柳	柳	袋	生	生	間	生	島	袋	袋	方	方	後	間	田
小	台	台	小	小	模	谷	小	小	小	小	小	北	南	南	台	小	小	北	北	小	小	小	小	小
五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五
年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	55

家族のかたちはいっぱいある！	齋藤朱里	城ノ上小五年	81
☆限りある命を大切に	坂庭好桜	弥栄小六年	82
「私の家族」	國安麗永	蒲生小六年	83
男女関係なく生きるために	尾崎茉優	平方小六年	84
『いつも通りの生活』に感謝	早川まい	大間野小六年	86
得意なこと苦手なこと	高橋ひかり	千間台小六年	88
「同じ一つの命」	藤原知佑	蒲生小六年	89
体の不自由な人のためにできること	山口瑚々那	平方小六年	91
差別のない平和な世界	宮嶋心和	平方小六年	92
夢をもっていることに自信をもつて	西城夏々美	宮本小六年	93
ルールを当たり前に守る大人に	青嶋隼叶	宮本小六年	94
自分の個性を大切に	土井心愛	千間台小六年	95
あたりまえの生活	倉淵葉月	千間台小六年	97
私の将来の夢	穴戸なな	花田小六年	98
イメージなんて関係ない。	齋藤あずさ	大袋東小六年	100
気づいて、その気持ち	奥村咲心	大袋東小六年	101
いじめといじり	平井衣衣	弥栄小六年	102
私たちがつくる「平和」	沖野彩	宮本小六年	103
「画面のおくの人」	栗原梨花	西方小六年	104
私の小さいころからの大きな夢	板垣美織	蒲生小六年	105
将来の夢に向かって	間中涼太	蒲生小六年	107
ふつうの形	阿部柚葉	大相模小六年	108
車いすの私の叔母	長谷川結月	平方小六年	109
私のできること	宮ノ内咲希	平方小六年	110
ヘルプマークについて	斉藤瑞季	大間野小六年	111

チームプレーは社会と同じ	越谷とエコ	ぼくと色弱と未来	「障がい者への接し方」	高れい者の人達だけでなく	ごみの少ないきれいな町	自分がやられていやなことはしない	私と君達の一本線	それぞれの「ふつう」	「将来の夢」	目標に向かつて	夢の舞台に立ったあの日	未来の地球に向けて	友達を大切に	☆将来の夢と覚悟	将来の夢	「夢」への小さくて大きな一歩	平和で幸せがあふれる世界を目指す	いつもの道・いつもの声	憧れを超えて	将来について	私の将来	S D G sと未来の資源消費	頑張って取り組み	夢を叶えること
笹野大翔	桜井柚輝	金子拓真	幅崎聖夏	広川晴香	岩本悠斗	森口佳穂	中屋穂風	小田優希	福本托久心	大塚菜央	洞口花	小山珠希	小高実芭菜	栗本莉愛	小椋梨央	飯尾彩香	大山佑奈	山田光希	篠田小陽	井上結釉	川琴羽	堀越怜奈	塩原悠夢	千葉彩寧
宮本小六年	宮本小六年	宮本小六年	西方小六年	鷺後小六年	鷺後小六年	明正小六年	千間台小六年	千間台小六年	桜井南小六年	花田小六年	蒲生小六年	蒲生小六年	蒲生小六年	大相模中一年	大相模中一年	北中一年	光陽中一年	東中一年	光陽中一年	大相模中一年	東中一年	富士中一年	栄進中一年	光陽中一年
112	113	114	116	117	118	119	120	121	122	123	124	126	127	129	130	132	133	135	136	138	139	140	141	143

☆夢を叶えられる場所	福田美結	光陽中二年	144
大切な匂い	渡部希実	武蔵野中二年	146
地球の果て	国井ひより	光陽中二年	147
悔しい涙	金間珠紀	光陽中二年	148
挑戦の本質	甲斐颯介	光陽中二年	150
私が頑張っていること	金森穂真	平方中二年	151
思い出の由来	新原くるみ	武蔵野中二年	153
「かけがえのない時間」	永堀杏実	北中二年	154
思いやりと言葉の重み	松永璃空	栄進中二年	156
仲間の大切さ	眞島暉学	光陽中二年	157
冒険	上妻柚太	武蔵野中二年	159
雪景色	小船なつみ	武蔵野中二年	160
努力	神田琴音	武蔵野中二年	161
個性を見つめて	金子紗垂来	新栄中二年	162
バスケ部新体制への抱負	藤田和軌	大相模中二年	163
今の自分が考えていること	野中玲奈	大相模中二年	164
「音」のない言語	蕪木心咲	西中二年	165
未来に向けて考えていること	田中希帆	西中二年	166
自分に自信を持つために	勝呂萌夏	西中二年	166
ペアとの絆	岡田ひなた	光陽中二年	167
私ができること	原結菜	新栄中二年	169
少しでも多くの命を	新地真帆	大相模中二年	170
☆デジタル時代の「温もり」	川野明花莉	大相模中三年	171
苦手だからこそ	山野那唯太	光陽中三年	173
三人のヒーロー	山根優月	光陽中三年	175

《詩の部門》

自分の手で・・・・・・・・・・植
世界平和達成のために・・・・・・・・藤
言葉の力の大きさ・・・・・・・・口
誹謗中傷・いじめは何があっても・・夢
私だけの青春・・・・・・・・大袋中三年
言葉について・・・・・・・・大袋中三年
食育・・・・・・・・大袋中三年
私の家族・・・・・・・・光陽中三年
今を大切に・・・・・・・・平方中三年
自分に「ある」ものを数える・・北中三年
尾又鈴夏・北中三年

☆まほうのじゅもん

命は一つだけ・・・・・・・・・・増林小四年
かた手とりよう手・・・・・・・・・・新方小四年
色々な心がある・・・・・・・・・・蒲生南小四年
☆「たった一つのサッカーボール」
学校・・・・・・・・・・弥栄小五年
「命は大切」・・・・・・・・・・弥栄小五年
笑顔の輪・・・・・・・・・・弥栄小五年
地球の笑顔・・・・・・・・・・南越谷小五年
たった一つの命・・・・・・・・・・弥栄小五年

☆優しい

日本の未来・・・・・・・・・・桜井小六年
過去と未来と現在と・・・・・・・・川柳小六年
わたしの知らないこと・・・・・・・・蒲生南小六年
福岡沙笑・199
澤花英・198
大沼悠悟・198
井場來花・197
奥山結彩・196
岡野紗英・196
松田穂花・195
倉持美花・195
深澤朋佳・194
渡邊日陽汰・194
大山あかり・193
吉田幸秀・193
原悠人・192
百村帆夏・192

縁の下の力持ちつて誰？	田口	凜梨花	川柳小六年	200
自分	田口	詩織	新方小六年	201
「あなた」だし「私」	小谷	はなめ	弥栄小六年	202
「考えてみて」	清水	紗文	弥栄小六年	203
☆さくらの色彩	島岡	史花	光陽中一年	204
明日の色	橋本	伊織	新栄中一年	205
夢への道のり	柴田	風都	新栄中一年	206
物価高	高橋	直大	新栄中一年	207
☆日常	藪井	駿太	新栄中二年	207
現代短歌	濱田	成美	北陽中二年	208
現代短歌	上神谷	杏夢	北陽中二年	208
現代短歌	浅子	真澄	北陽中二年	209
無題	平良	果凜	栄進中二年	209
☆「生きているとこう」と	小林	ひかり	平方中三年	210
将来の夢	吉積	怜南	平方中三年	211
上り坂と下り坂	松本	栞奈	平方中三年	212
自然といつまでも一緒に	松下	夏葵	平方中三年	212

《佳作一覧》

作文の部門（小学生）	213
詩の部門（小学生）	217
作文の部門（中学生）	219
詩の部門（中学生）	221
作品選考役員・理事紹介	223
青少年・保護者の悩みごと相談（各種相談窓口案内）	224

言えない私のせい

優秀作品

千間台小四年 高橋 帆 香

わたしは気が弱くて、友達から強く言われたりしても言い返したり、ことわったりすることが苦手で、あまり上手にできません。そのせいでいやなことをしなければいけなくなってしまうたり、悲しい思いをすることが何度もありました。

例えば、お母さんに買ってもらったばかりの新しい自由帳や、お気に入りのえん筆を見た友達が、「切りはなせる自由帳いいなあ！一まいちようだい！」と言って、結局自由帳のページを何まいも取られてしまったり、「かわいいえん筆だね！かして！」と言われて、まだ返事もしていないのに持って行かれてしまったり。

大事な物だから本当はあげたりかしりたくはないのに、なんと言ったことわればいいのか分からないし、ことわったらきらわれそうだからこわくて言えないという気持ちのほうが大きくて、いやだと言ったことができませんでした。

他にも、下校中に友達にランドセルをふざけて何度も引っぱられたり、わざとだったら歩く友達が「待ってよー！」

と言ってランドセルにのしかかってくるたり。

歩きにくいし、気分が悪いからとてもいやだったのに、もっとやられたりつまらないと言われるのがこわくて、結局ヘラヘラわらいながら「やめてよお。」と言うことしかできませんでした。車が通る道であぶないし、他の人も通る道で遊ぶのはめいわくだからいけないことだというのは当たり前に分かっているのに、注意することもできませんでした。

でもそれは、わたしがまんしたり、おこったり言い返したりしてはいけないことなのでしょいか。言われた人、やられた人が何とかしなくてはいけないことなのでしょいか。わたしはそうではなくて、そもそもそういうことを言ったりやったりしてくる人がいなくなったら、言い返す必要もなく、気が弱い人でもいやな思いをしないですむのではないかと考えています。ではどうしたらそんなふうに変わっていくのでしょうか。

それは、一人一人が「もし自分がその人だったら」というふうに、相手の立場になって気持ちを考えるようにするところから始まると思います。相手の立場になって考えることは、みんなが気持ちよくすごすためにはとても大事だし、必要なことだと思います。

でも、どんなに相手の立場になって考えても分からない

いことはあると思うので、自分の気持ちを言ってみることも大切なのかもしれないと思うことができました。

この作文を書くことになり、友達に言われたことでもやもやしていることがあったので、ゆう気を出していやだったと伝えてみることにしました。直せつはむ理だったので手紙に書いてわたしたのですが、返ってきた返事にびっくり。「いやがっていたとは思わなくてごめんね、気付かないかもしれないからどんどん言ってね!」と書いてあったのです。もうきらいとかめんどくさいと言われると思っていたので本当におどろきました。

このことから、わたしは相手に意識を変えてもらうのを待つだけではなくて、自分の気持ちを伝えることも実は大事なのではないかと思うようになりました。全部はむ理でも、言いたいことをできるだけ言い合える平等な関係や、言われたことを受け止めようとするど力がわたがいになければならぬと思います。

一人一人にそれぞれの気持ちがあつて、みんなが自分の思い通りにすることはむずかしいけれど、みんながわたがいを思い合つてすてきな世界になっていくといいなと思います。

わたしのひいおばあちゃん

大袋北小四年 片山 朱 莉

私のひいおばあちゃんは去年九十五さいで亡くなりました。おばあちゃんからひいおばあちゃんが亡くなったと聞いたとき、私はとても悲しかったです。私は生まれてから大阪府に住んでいたもので、東京都に住んでいるひいおばあちゃん達に会うのは年に一、二回でした。会いに行くといひいおばあちゃんは、
「大きくなったね。」

と、いつもよろこんでくれました。

二年前に埼玉県に引っ越してきたとき、ひいおばあちゃんはまだ歩いて、新しく建てた私達の家を見にきてくれました。

その少し前からひいおばあちゃんは耳が遠くなり、目もよく見えなくなってきたて、よくおばあちゃんと口げんかをしていました。おばあちゃんが疲れている様子だったので、私が遊びに行つた時は、代わりにホワイトボードに大きく文字を書いて、ひいおばあちゃんと会話をしました。ひいおばあちゃんは、

「字が上手だね。」

と、ほめてくれました。

しばらくしてひいおばあちゃんは足が弱くなってしまい、大好きなお風呂に入れなくなってしまいました。デイスーツでお風呂に入れてもらったり、リハビリをしてもらっていましたが、体調をくずしてねつを出してからは、ほとんどねたきりになってしまいました。ねたきりのじょうたいでは固形物が食べられなくなり、大好きな白米も食べられなくなってしまいました。固形物が食べられなくなっても大好きな甘夏を食べたいという、ひいおばあちゃんのねがいをかなえるために、私はお母さんといっしょに甘夏を探してとどけました。ひいおばあちゃんは、

「美味しい、美味しい。」

と言って食べてくれたので、がんばって探したかいがあったなと思いました。夏になって甘夏が買えなくなったときは甘夏ゼリーを買いました。他にも私に出来ることがないかと思い、ひいおばあちゃんの部屋までご飯を持って行ったり、家のそうじをしたりお皿あらいをして手伝いました。おばあちゃんが、

「どうもありがとう。朱莉ちゃんはえらいね。」とほめてくれるのがうれしくて、

「また来たらやるね。」

と言って、行きたびにお手伝いをしていました。

としをとると、どんなことができるかがへっていくけれども、自分の家にいたいというひいおばあちゃんのきぼうをかなえて、ひいおばあちゃんの回ふくをねがって、おばあちゃんやほう問かんこの人達やケアマネージャーさん達が、毎日一生けん命お世話しているのを見て、とてもすごいなと思いました。

ひいおばあちゃんがいなくなってしまつて、そのときは信じられないくらい悲しかったけれど、ひいおばあちゃんがさい後まで自分の家で自分らしくすごせてよかったなと思います。そして、今度はおばあちゃんがひいおばあちゃんのようにさい後まで自分らしくすごせるように私が助けたいと思います。

公園で見つけたバリアフリー

桜井小四年 寺 西 結 香

ゴールデンウィークにひたち海浜公園に行きました。ネモフィラを見るために見はらしの丘を登りました。長くて急な坂道を登るのはとてもたいへんでした。わたしはそこで、車いすの人を見かけました。足が不自由だったり車いすののったりしている人は、どうやってこの丘を登っているんだろうと思いました。そこで、調べてみることにしました。

ひたち海浜公園には、バリアフリーマップがありました。みはらしの丘には、シーサイドトレインといって、公園内を一周できる乗り物があります。それに乗って、丘の近くまで行けるそうです。バリアフリーマップには、ゆるやかな坂道の場所が書かれていました。足が不自由な人も楽しめるように考えられていてすごいなと思いました。

そのほかにも、バリアフリートイレが全部のトイレにせっちされていたり、スロープが車いす用の通路としてあったりしました。また、かんしょうデッキといって、車いすの方も楽に出入りでき、自由に活動にさんかでき

る場所がありました。わたしが登ったときには気がつかなかったけれど、多くの人のためにいろいろな工夫がされていて、おどろきました。みんなが楽しめる公園ですてきだなと思いました。

わたしたちが住む街にもたくさんのバリアフリーがあります。駅のエレベーター、点字ブロック、自動ドア、音になる信号、スロープなどにある車いす用駐車場などを見たことがあります。これからも意識してバリアフリーを見つけないと思いました。また、あったらいいなと思うバリアフリーを考えたいなと思いました。いろいろな人がえがおで生活できるよう、わたしにもできることを考えつづけていきたいです。



かっこいいお母さん

大沢北小四年 関根楓華

わたしのお母さんの仕事は、しょうがい者の人や車イスの人を手つだい仕事です。わたしはお母さんの仕事のイベントなどで、お母さんの仕事を手つだうことがあります。わたしが車イスをおしてみると、とても重くてうまくおせずにこまってしまいました。でも、お母さんがおすと速くスムーズに動かすことができました。

わたしは、お母さんがなぜ速くスムーズに車イスを動かせるのか気になりました。お母さんに聞くことはできなかったけれど、きっと毎日車イスをおしたり、利用者さんのお手つだいをしているからだと思いました。仕事をしているお母さんはとてもなじんでいてかっこよかったです。お母さんに

「ふだんどんな仕事をしているの。」
としつ問したら、

「しょうがい者さんのお手つだいやバザーの用意だよ。」と、教えてくれました。わたしもバザーの手つだいをしたことがありますがとても大変だったので、かんとんな手つだいに変わってもらいました。

バザーでしょうがい者の人たちと関わった後、お母さんに

「大変だったけれどしょうがい者さんやさしいね。」
と言うと、お母さんが

「しょうがい者だから、車イスだからとさべつを受けた人もいるんだよ。」

と教えてくれました。車イスやしょうがいがあるのは変えられないのに、バスや電車に乗せてもらえないこともあるそうです。わたしは、それを聞いておかしいと思いました。しょうがい者の人たちは、やさしい人や思いやりの気持ちをもった人たちがいるのに、見ためやしうがいマークを見ただけでさべつを受けたりするのは悲しいです。

わたしは、さべつをする人にしょうがい者の人たちはやさしいし、助けてくれる人だと教えてあげたいと思いました。お母さんのようにだれにでもやさしくてかっこいい人になりたいです。

「弟の未来」

千間台小四年 金子昌眞

ぼくの家族は、お母さん、お父さん、ぼく、弟、その下にも弟がいます。その中の二人目の弟は、生まれたときに耳にしょうがいを持ち、右耳からの声や音が聞こえにくいじょうきょうになっっています。今、弟は二才。まだ小さい年ごろです。ふだんは、後ろから「こっちにおいで。」

と話しかけると、来ることもあります。来ないときもあります。これも、耳から声が聞こえないからだと思います。

ぼくは、そんな弟が、ようち園や小学校に上がると、友達にからかわれたり、仲間外れにされたりしているような様子が思いうかび、しばらく、色々なことを考えていました。

お母さんが、

「あの子も、まだ小さいけれど、これから先いろいろな言葉をおぼえて、いろいろなことを知っていくと思うよ。」と言いました。その声は、まるで教科書のように、ずっとぼくの頭の中にのこりつづけています。また一つ、母

が言いました。

「十才くらいになれば、耳のちりょうができるみたいだよ。」

この言葉を聞いて、少し安心しました。それから、時間がたつと、お母さんから、

「さっきの話。聞こえる耳が一つしかないけれど、少しずつ言葉を教えていけばだんだん分かってくるよ。」

と聞いて、自分にできることをさがしました。まずは、言葉をゆっくり言い、聞こえやすくして、言葉をおぼえられるようにしようと思います。もう一つは、できるだけ言葉を多く言って、おぼえやすくしていきたいと思います。

ぼくの家族は、しょうがいを持つ子どもが一人います。世の中にも、体にしょうがいを持つ人はたくさんいます。ぼくの弟も、その中の一人です。これから、弟のために、自分でできることをさがし、弟が安心してくらせるようにしたいと思います。

みんな平等に

千間台小四年 樋田 空 菜

わたしの妹は、消化管アレルギーです。生後九ヶ月ごろに、小麦、大豆アレルギーだとわかりました。消化管アレルギーとは、アレルギーの物を食べると、三時間後につらいしょうじょうが出来ます。妹にとっては、すぐくつらいと思います

三才になって、ようち園に通い始めて、妹も初めてのことがいっぱいだと思うけど、妹はすぐがんばっているけど一番妹の中で大へんなのは、給食が食べられないことです。いつも妹だけ、お母さんが作ったおべん当です。妹は、自分だけなんでみんなとちがうのを食べているんだろうと思っています。

でも妹は、それでもがんばってようち園に行っています。

わたしは、妹のためにしょう来えいようしになろうと勉強をがんばっています。

妹が、アレルギーだから、ぜんぜん外食も行けないし、外食に行ってもお母さんが作ったおべん当で、みんなといっしょの物が食べられません。スーパーに行ったとき

は、わたしは、いつもアレルギー表を見るのがしゅうかんになりました。

だから、家族みんなで妹のアレルギーがなおるようにがんばっています。がんばって早くなおして、いっしょに妹と外食や外出をしてごはんを食べたりしたいとみんながっています。

人はそれぞれいろいろなこせいがあって、みんな同じではないから、みんな平等な世の中になってほしいです。



みんなちがってあたりまえ

新方小四年 尾崎 楓

ぼくの学校には、いろいろな友達があります。泳ぎが得意な子、算数が苦手な子、身長が高い子、メガネをかけている子、やさしい子、ちょっとはずかしがりやな子、ちょっぴりいじわるな子もいます。でも、みんなちがうからこそ、いっしょにいるのが楽しいです。もしも、みんなが同じ顔やせいかくだったら、毎日がつまらなくなってしまうと思います。みんなちがうからこそ、ケンカもするけれど、わらったり、ないたり、うれしかったり、はずかしかったり、感動したりするのだと思います。

ぼくは友達と遊ぶのが大すきだけれど、みんな同じだったら遊ぶのもお話するのも、学校の生活もつまらなくなると思います。だから、人とちがうことは、悪いことじゃないと思います。ほかの人とちがうことを言ったり、ちがう行動をするとなかまはずれにならないかふあんになったりします。だけど、自分をほかの人とくらべて、勝ったとか負けたとか、正しいとかまちがっているとかではなく、自分と友達の考えをそんちようして、おたがいに理かいしていきたいです。ぼくは昔からアレルギーがひ

どくて、毎日くすりを飲まないといけないへんだったり、さいきん少し太ったと言われてかなしくなったりした日がありました。でも、おりがみやあやとりはとくいです。ちがいを知ること、ぼくには新しいことを学んだり、もっと楽しく生活できたりする気がします。

みんなが自分らしくいられるクラスをつくるために、おたがいの意見や、見た目のちがいが、すきなことや苦手なことを大切にするのが大事だと思います。ぼくは、これからも友達の良いところをたくさん見つけて、ちがいをみとめ合って、楽しみながら、みんなと助け合ってなかよくしていきたいです。ぼくにとって、一人一人がこせいのちがう大切な友達です。

ひいおばあちゃん、おめでとう

大袋東小四年 金田 琉 希

ぼくはこの間、ひいおばあちゃんをなくしました。悲しくてたまらなかったけれど、キリストのおそう式で、「ひいおばあちゃんは、天に帰った。父親、母親のもとに帰っただけ。今日は悲しむんじゃない。喜ぶのです。」と言われて、みんな思わず口から、

「おめでとう。おめでとう。」

と言っていたので、僕も、

「おめでとう。」

と言うことができました。そして、ひいおばあちゃんが一人で入っている棺の中に花をそえるとき、

「今までありがとう。」

と言えました。ひいおばあちゃんの肌は、とても冷たかったです。そして、火葬場でひいおばあちゃんを焼いて、みんな解散しました。

ひいおばあちゃんが息を引き取ったのは、四月二十一日で、誕生日は四月二十九日でした。ひいおばあちゃんの誕生日の日に、

「空の上でおめでとうしているかなあ。」

と、みんなで話しました。

大好きだったひいおばあちゃんがなくなったことは悲しいけれど、きっと天に行けたことに、「おめでとう！」



人にやさしく

宮本小四年 生 方 慶士郎

ぼくが、小学校三年生のときの話です。休みの日にお父さんと小学校の校庭に遊びに行ったことがありました。校庭では、友達が五人でサッカーをしていたので、ぼくも仲間に入れてもらいました。友達は一から四年生までいました。そのときに、一年生の友達が上手にできなくて、四年生の友達が怒ってしまいました。

「下手くそ。」

と、四年生の友達が一年生の友達に詰めよってきました。ぼくはとっさに、

「やめろ。」

とさげました。ほかの友達も、

「良くないよ。」

と注意し、四年生の友達を落ちつかせました。そのあとは、みんなで仲良くサッカーをして遊ぶことができました。

その日の帰り道で、お父さんから、

「すぐに友達を守ってあげることができて、えらかったね。」

とほめられました。

年上の友達に注意するのは、勇気がいりましたが、年下の友達を守ってあげることができたこと、トラブルにならずにそのあと遊ぶことができたことが良かったと思いました。

学年がちがう友達と遊ぶときに力に差があるのは当ぜんのことなので、それで年下の子をおこるのはまちがっていると思います。ぼくも中学のお兄さんたちとサッカーで遊んだときに全然ついていけなくて、くやしい思いをしたことがあります。でもその時、中学校のお兄さんたちは、やさしく教えてくれました。ぼくはとてもうれしかったです。これからも、年下の友達と遊ぶときには、ついていくことができないからといって、いやがったりせず、仲良く遊んでいきたいです。困っている人がいるときには、

「どうしたの。」

と、すぐに声をかけて話を聞くことが大切だと思います。そして、弱い立場の人の味方になって行動し、みんなが安心して生活できる社会にしていきたいです。

人々への思いやりの街へ

宮本小四年 大熊 葵 晴

私には、祖父がいます。祖父は数年前に足を痛めてしまい、うまく歩くことができません。

私は祖父とたくさんお出かけをします。この前出かけたところは、とても急な階段がありました。祖父はとても大変そうでした。このようなことから私は、小さな段差や階段をもっと少なくして、エスカレーターや平らな場所を今よりも多くしていったらいいと思いました。

その他に気になっていることは、車の乗り降りです。車から降りるときにも段差が大きくて大変そうです。そんな様子を見ることが多くあるので、どんな人でも簡単に乗り降りができる車が多くなるといいと思いました。

社会の学習で高齢者は、どんどん増えているということを学びました。また、最近、ニュースでも今以上に高齢化社会になっていくということをよく聞きます。そのためにも高齢者にとって住みやすい街になるといいと思います。

私は祖父みたいな人達のためにも、段差や階段を今よりも少なくし、足の不自由な人々にも暮らしやすい世の

中にしていけたらいいと思います。



「自分の将来の夢」

城ノ上小四年 森田 奏

わたしの将来の夢は、色々あってまよっています。

一つ目は、まん画家です。なりたい理由は、絵を描くことが好きで、まん画を読むのも好きだからです。まん画家になるためには、お話を考えることをがんばりたいです。今は話の流れを考えるのが苦手なので、これから練習していきたいと思います。まん画家になったら、読んでいる人が楽しめる作品を作りたいです。

二つ目は、イラストレーターです。なりたい理由は、一つ目のまん画家に似ていて、絵を描くことが好きだからです。イラストレーターになるために、物をじっくり観察して絵を描く練習をすること、人や物のりんかくをきれいに描くことをがんばりたいです。もしイラストレーターになれたら、多くの人に人気な作品を作りたいです。

三つ目は、習字の先生です。習字の先生になりたい理由は、習字が得意だからです。三年生のときには書きぞめで、県の展覧会に出品されました。出品されてとてもうれしかったのと、自分の自信になりました。習字の先

生になるために、たくさん練習をして、書き終わったものをよく観察し、どこがよかったのか、どこを直した方がいいのか自分で確認したいと思います。そしてそれを何度もくり返し、努力を重ねていきたいと思います。もし、習字の先生になれたら、教えている人の作品も自分の作品のように大切にしていって、さらに上手な作品になるように、よく見てあげたいです。

この三つの将来の夢がなかったら、うれしいです。わたしは、将来の夢の一つにしなければいけないと思っていましたが、この文章を書いているうちに、たくさん夢があってもいいなと思い始めました。これからも自分の好きなことにがんばって取り組んで、将来の夢をかなえたいです。

人々を助けるけいさつ官になるために

蒲生小四年 藤田 詩

わたしのしょう来のゆめは、けいさつ官になることです。

なぜかという、わたしは、小さいころにたまたまつけていたテレビにけいさつ官がうつり悪い人から人々を守り、悪い人をつかまえているのが、とてもかっこいいなと思自分も少しでも、多くの人を助けたいと思ったからです。また、ニュースなどで、飲酒運転をしていた人の車にひかれてなくなった人の家族の悲しむ声がわたしの心にささり、飲酒運転などの事故が起こる前に、やめさせて、少しでも多く悲しむ人や事故にあってけがをしたり、おなくなりになる人をへらしたいと思ったからです。また、知らない人でなく、いっしょに住んでいる家族や学校の友だちなどの、自分の身のまわりの大切な人が、あぶないめにあったりするのをなくしたいと思いました。また、小さいころになくなる子もいて、自分より小さい子だと、

「まだまだ先の未来がたくさんまっているのに、かわいそう。」と思ったからです。

そして、今はから手をやっています。わたしは、お母さんとお父さんから、「から手をやっていると、将来けいさつ官になった時にやくにたつ。」と聞いて、悪い人から人々を守るりっぱなけいさつ官になるためにも、一生けん命、から手に取り組んでいます。なので、なにかあっておちこんで、から手に行きたくなくなっても、将来けいさつ官になった時の自分を思いうかべるとやる気がでます。でも、もしけいさつ官になれなかったらどうしようと思うこともあります。なので、わたしも、少しあきらめそうになります。だから、わたしはお母さんとお父さんに自分は本当にけいさつ官になれるのかと、相談したら、

「うたちゃんは、きつとりっぱなけいさつ官になれる。

あきらめずにがんばって。おうえんしているよ。」と言われて、わたしは、自分にもきたいしてくれる人がいることを知り、とてもうれしくなりました。そして、わたしは、未来や過去よりも、今が大切だということに気づきました。だから、わたしはこれから、りっぱなけいさつ官になるというゆめをあきらめずに、自分のめあてとして、がんばっていいこうと思います。また、わたしのように、自分のゆめや目標をあきらめかけている人に、けいさつ官になったら、未来や過去よりも、今が大切に、

ゆめや目標をあきらめずにがんばったら、いつかかなう時が来ると、自分がそうしてきた事を知ってもらいたいです。また、あきらめそうになったわたしをばげましてくれた家族には、かんしゃをしたいなと思います。

このように、わたしはこれからもずっとがんばっていくし、ゆめをあきらめないというじしんがあるので、今はまだ未来の自分はどんな人で、どんな生活をおくっていくのかは、あまり自分では予想できないけど、きっと未来の自分は、たくさんの人を助ける、一人前のりっぱなけいさつ官になっていることをしんじます。また、一人前のけいさつ官になったら次は、どんな人にもやさしくする。それもかなったら、こんどは、道にまよってしまった人や荷物が多くおもたくてこまってしまった人などを助けるという一つ目標がかなったら、またつぎの目標をもちつけ、みんなから、しんらいされるけいさつ官になりたいです。

ことだま

桜井南小四年 松下 梨子

みなさんは、人がかげ口を言っていると気になりませんか？わたしは、とても気になります。それはかげ口を言っている人たちを見ると、自分のことを言われているのではないか、言われた人が悲しくなるのではないかと、いろいろ考えてしまうからです。わたしたち四年生は人が気になり、かげ口を言いはじめてしまう時期なんだそうです。ですが、かげ口の反対の言葉があります。それは、ひなた言葉です。ひなた言葉は、「ナイストライ」など、人をばげましたり、ほめる言葉です。人をばげましたりすると、それはかならずかえってくるのです。わたしは去年(三年生)の時、クラス全員で、ドッジボールをして遊びました。わたしが、ボールをちがうところにながてしまった時、同じチームの人、そして相手チームの人までが「ナイストライ」「ドンマイ」など声をかけてくれました。その時わたしは、しげんと心が熱くなるのを感じました。わたしがまちがえた時、さいしょに声をかけてくれた人がまちがえてしまうと、クラス全員が「ドンマイ」「ナイストライ」と言いその子をはげま

「じんけん」ってなあに？

桜井小四年 齋藤 晴 仁

しました。その時、わたしはなぜか、また心が熱くなるのを感じました。心にはその時だけに感じる熱さがあるのだなと思いました。

このように、ひなた言葉を言った人には、かならずひなた言葉でかえってくるのです。つまり、かげ口を言った人にも、いつか、かげ口でかえってくるのです。前さんにんの先生が「悪口を言っていると自分のかがみみたいに悪口を言っている人と友達になってしまいます。ほめ言葉を使っていると、ほめている友達ができます。」それは、自分の言っている言葉はかがみになって、はねかえってくるということです。

わたしは、これからほめ言葉を使ってみんなをはげましたと思いますが、じっさいにほめるのはむずかしい事です。なので、少しずつやっていきたいと思います。また、かげ口ではないほめ言葉が世界中の人につたわれれば良いと思います。

ぼくが二年生の時の事です。お母さんがにんしんしました。ねるのも、すわるのも、あるくのも、さらに食事までつらそうでした。

そして、お母さんは、円形の、赤ちゃんをだいた絵がかいてあり、まわりは、かわいいピンク色のなにかをつけていました。ネットで調べてみると、「マタニティマーク」という、まわりに妊娠中であることを知らせ、配慮をうながすためのものだということがわかりました。ぼくは、「世の中にこんなものがあるんだ」と思いました。

そして、お母さんに、「マタニティマークをつけていて、何かいいことあった？」と聞いてみると、「ぼくがおなかの中にいる時、マタニティマークをつけて、電車の中央に立っていると、電車のはじから人が来て、席をゆずってくれたよ。」と、言ってくれました。

これを聞いてぼくは、「世の中には、ほかにマタニティマークのようなマークはあるのかな」と思いました。そこでおばあちゃんに聞いてみました。すると、おばあちゃん

んは「四角い中が白いハートと十字でまわりが赤いヘルプマーク、だいたい白と緑のゆう先席、白い車いすのつた人がかいてあって、まわりが青の国際シンボルマークなど、たくさんマークがあるよ。」と教えてくれました。

そしてぼくは「世の中には、こんなにたくさんマークがあるんだ」と思いました。

ぼくは、「これらのマークがある事で良い事は、気づきにくい病気でも、まわりにしらせる事ができる」という事を学びました。

一方で、国際シンボルマークなど、意味が分からないマークがあります。意味が分からないマークがあると、しょうがいのある人が、まわりの人と同じたいおうをされ、困ったり、けがをしたりしてしまいます。

そのような事が起きないように、どうしたらだれでも伝わるのか考えました。

分かりやすい形や絵は、だれでも伝わるけど、文字は、外国人に伝わりません。

なので、ぼくは、「文字＋わかりやすい形や絵」をすると、だれでも伝わり、いいと思いました。

また、わかりにくい形や絵などはTVのCMやニュース、小・中学校の授業でやる、色々な人に分かるかチェッ

クしてもらおうといいと思いました。そう思った理由は、マークをみんなにしまってもらおうとみんなマークをしまっているの、しょうがい者にやさしく、その人にあったたいしょうができるからです。

このことをしたり、考えたりして、ぼくは、貼り紙を教室に貼ることで、一人でも多くの人にしまってもらい、しょうがいしゃにやさしく、楽しくすごせる世の中にしたいです。



いっしょにささえあつて

大袋東小四年 樺 沢 結 菜

私はお父さんについて書きます。

お父さんは、とてもやさしいです。友達と、少し遠くの公園に行くときは、車でつれて行ってくれます。でも、おこると、とてもこわいです。でも、それは私のしょうらいのことをきちんと考えて、おこったり、やさしくしたりしてくれているのだと思います。

私がおこって話していても、しっかりさいごまで聞いてくれます。

何か欲しいものがある時には、買ってきてくれたりします。とてもうれしいです。

でも、さいきんのお父さんは、少し走ると「ちょっと、きゅうけい。」

とか、

「あと、ちょっとだけね。」

と、言います。

お父さんの帰ってくる時間が、八時半を過ぎることがあるので、つかれているのかと私は思いました。でも、休みの日には、自転車で運動をしていることもあるので、

むりをして体をこわさないでほしいです。

私は、お父さんにたくさんささえられています。私もお父さんをささえあげられたらいいと思います。これから私もがんばります。一緒にささえあっていきたいです。



「言葉の大切さ」

千間台小四年 関 口 春 真

みなさん、言葉の大切さについて考えたことはありますか。ぼくは、そのことについてよく考えます。

ぼくは野球に夢中で、練習をがんばっています。練習中はきびしく言われることもあるけれど、試合のときに父は必ず前向きな言葉をたくさんかけてくれます。その言葉がまほうのように効いて、よいプレーにつながり、楽しい気持ちや野球が好きな気持ちも強くなります。野球以外のことも家族はぼくの相談によくのってくれる。友達との出来事もその場にいなかったのに、一緒に考えてくれます。「その子はこのいう気持ちで言ったんじゃないの?」「こう言ってみたら何か変わるかもしれないよ。」といういろいろなアドバイスをしてくれます。そのときはぼくも相手の気持ちになって、言葉の意味を考えたり、自分の使う言葉の力をよく考えて、明日の計画を立てます。実際に相談をするだけで、気持ちを分かってくれたうれしさから、心のモヤモヤが減ったり、明日友達に話しかける勇気がわいてきます。また、友達との会話でも言葉の大切さを感じることがあります。低学年

の頃、転んでしまった友達をなぐさめたくて、ぼくも転んで「一緒だな。」と伝えたら、「元氣付けてくれて、サンキュー。」と返されました。ぼくの本当の気持ちを分かって言葉を返してくれて、気持ちがつながった気がしました。授業中も話し合いをする場面があります。ぼくは自分の考えを話すことも好きですが、友達の考えを聞くことも好きです。おたがいにながう意見をもっているのが新しい発見ができるし、おたがいのよいところを組み合わせるとよりよいアイデアになったりします。

逆に、言葉で傷つけられた経験もあります。相手はそこまでひどい気持ちで言ったのではなく、何気なく言ったのだと思います。でもぼくの心にはその言葉が時間が経った今でも残っています。見た目のことや男女のちがい、肌の色など自分ではどうにもできないことを言うて傷つけてしまう人がいます。言った人も、その後にかいして謝りますが、言ったことが消えるわけではありません。動画で、いやな言葉をたくさんかけられた紙がどんどんぐしゃぐしゃになっていく様子を見たことがあります。その紙に、今度はやさしい言葉をかけてしわを伸ばしていくのですが、どんなにきれいにしようとしても紙は元のようにもどれません。しわが残ってしまいました。それを見てぼくは、言葉は使う前によく考えて

ていきたいです。

から出さなければならぬと学びました。ぼくのクラスでは、四月に言葉のふういんをしました。ふだん言ってしまうひどい言葉や強すぎる言葉をみんなで紙に書きだしました。みんなが書いたその紙を一つの袋に入れて、黒板の上にふういんしてあります。ふういんしてからは、言葉を使う前に考える人が増えたとし、もしもだれかが言ってしまったときは、「ふういんしたのに出てきちゃってよ。」と笑顔で注意しあっています。

言葉は、よく使えばまほうのようなパワーをはっきするし、悪く使えば人を深く傷つけて元にもどせなくしてしまいます。これからもぼくは言葉の力をよい方にたくさん使える人になりたいし、悪い方の言葉で傷つけ合ったときは、話し合いたいのです。そして、よい方で言葉を使う練習のためにも、ぼくは今あいさつプラスワン運動をしています。それは、おはようやこんにちわなどのあいさつのときに、一言付け足すということです。「おはよう、今日のテストもがんばろうね。」「明日も一緒にドッジボールやろうね。」「じゃあね、また明日ね。」などを言うことで、相手からも言葉が返ってきて、これまでより仲がよくなった気がします。それを積み重ねたら、きっと言葉でたくさんの方が幸せになるし、安心して生活できます。まずはぼくがそれをがんばって、みんなに広め



「お母さんに感しゃ」

花田小四年 松尾 悠 司

ぼくは、毎日ぼくたちの面どうを見てくれているお母さんが、少しでもかいてきに生活してもらいたいと思っています。どうしてそう思ったかという、ぼくには、兄弟が五人いるからです。毎日、家の中は、運動会のようです。部屋の中を走り回ったり、大きな声を出したりして、にぎやかです。お母さんは毎日すごい大変だろうと思います。一番下の弟はまだ、一才になっていません。ミルクをあげたり、おふろに入れたり、大変です。お母さんたちは本当にすごいです。そんなお母さんたちにぼくは、少しでも休んでほしいと思いました。お母さんにいろいろ聞いてみました。

「何がいちばん大変？」

「せんたくとご飯を作ることかなあ。」

「もし時間があったら、何がしたい。」

「すきだけねたいかなあ。」

とお母さんは答えてくれました。そこで、お母さんたちがかいてきに子育てができるように、お母さんたちを助けてくれるヘルパーさんがたくさんいたらなあと思います。

した。ヘルパーさんが、ぼくたち子どものお世話をしてその間にお母さんはお休みをする、そんなことが当たり前になったら、子どもをうんで、育てることが楽しくてかいてきに感じると思います。そんな世の中になってほしいです。

今、ぼくができることを考えてみました。食器洗いやかんたんな料理はできます。できることを、積みよく的にお手伝いしていこうと思います。五年生になると、家庭科の授業も始まるので、できることが増えそうです。そして、毎日ぼくたちのためにがんばっているお母さんに、感しゃしたいと思います。

お年寄りは大変

大沢小四年 青柳 ひなの

わたしのひいおばあちゃんはお年寄りで、足が悪いので、買い物やお出かけなどあまり外に出たがりません。昼間はひいおばあちゃんが家で一人なので、さみしそうに外をながめています。

わたしがひいおばあちゃんの家に行くと、すぐうれしそうに、

「いらっしやい。」

と言ってくれます。わたしはそんなひいおばあちゃんの笑顔が大好きです。

ひいおばあちゃんが外に出かけるとき、いつもおじが車を出してくれます。ですが、いないときはバスを使わなければいけません。足が痛いのでバスに乗るのをいやがります。もっとお年寄りの人も乗り物が楽になったらいいのと思います。

今でも運転手さんに声をかければスロープを出してくれますが、言いくらい人もいると思います。ひいおばあちゃんもその一人で、「運転手さんがわざわざおりにきてもうしわけない。」

「ほかの人にもめいわくをかけちゃう。」

と言っていました。このことを聞いてわたしは、運転手さんに言うのではなく、エレベーターのようにボタンを押したらスロープが出てくるようになったらいいなと思います。そうすれば、わたしのひいおばあちゃんのようなお年寄りの人以外にも、車いすの人やベビーカーを使っているわたしのママのような人にも、もっとバスが使いやすいかなと思います。もっとひいおばあちゃんのような人たちにも、自由に楽しく幸せに過ごしてほしいです。年を取るとできないことがふえてしまいます。行動がゆっくりになったり、ものわすれがふえたりもします。そんな当たり前のことをほかの人がめいわくだと感じてしまうことに、わたしはかなしく思うときがあります。年を取っているからといって、そういうことを言われたりするのはいやだなと思いました。ひいおばあちゃんにも人権があります。それに、そういういじわるなことを言った人も、みんなひいおばあちゃんのように年をとっていきます。いつかはみんな同じになるのです。

わたしにできることは少ないかもしれないけど、重い荷物を持っていたら持ってあげる、席をゆずる、道案内などをたくさんしていきたいです。ほかの人たちもやさしい気持ちをもって協力し合っていけば、みんな幸せに

くらしていけると思います。これからも、大好きなひいおばあちゃんとの時間を大切にして過ごしたいです。お年寄りの人も大変だとみんなに知ってもらって、自分たちでできることを見つけていきたいです。



「絵で役にたちたい」

南越谷小四年 河野 紗 彩

わたしは昔から絵をかくのが好きで、いつか仕事にしたいと思っていました。そこでネットで見つけたのは、「絵師」という仕事です。

絵師は、アニメやキャラクターのイラストをかく仕事で、いろいろなところで役に立っています。例えば会社をせん伝するためのポスターに絵をていきょうしたり、情報うや気持ちを伝えることができます。また、言葉では表げんしきれないものも絵で伝えることができます。

わたしは絵をかいている時、たまに絵師さんのかくイラストにしようとすることがあります。なぜなら、キラキラしたイラストを見ていると自分の絵とくらべてしまうからです。なぜ絵師さんはこんなに上手にかけるのだろう、わたしも見人がある作品のせかいをすてきだなと感じるような絵をかきたい、そういう思いがわたしの心の中にわいてきます。しかし、自分の絵と他の人がかいた絵とくらべることは、よいことではないと思います。そうではなく絵師さんの絵から学んで自分の絵のいろいろなことに気づくきっかけにしたいです。例えば、自分

の絵の色味と絵師さんの色味をくらべると、大体、絵師さんの色味の方があまい色味に感じ、自分の色味は青味が多い気がします。わたしは青味が強いとすずしげな感じがして全体的にきれいだと思います。このような絵の青味のように、わたしの絵には、まだ見つけられていない、いろいろなよいところがあるかもしれません。もし、今の自分の絵が下手だと思っても、その絵には、わたしの絵だけにしかないよいところがたくさんあるのだと思います。

絵で大切なのは、上手かどうかではなく、自分でかいた絵に自信がもてるかどうかだと思います。もちろん、上手であることも大切です。しかし、もしみんなにうまいと言われても自分がなっとくいかなかったら、そこまですれしく感じません。でも自分がなっとくいく絵がうまいと言われると、とてもうれしく感じます。

わたしは、人に元氣やゆうきをあたえられるような絵をかきたいです。なぜなら、わたしも、ネットで絵を公開している人の作品を見て、そのキャラクターの表情や色合いがとてもきれいで、見ているだけで元氣をもらうことがあるからです。

絵師になると、たくさんの人に、「絵をかいて」とたのまれて毎日が太へんです。でも自分では太へんだとは

思わないと思います。理由は、自分が好きなことだからです。

いつか、せんものの学校に行って、たくさん絵の勉強をして、細かいたのみにごとに対応できるスキルを身につけたいです。だれにも負けない絵師になりたいです。そのため絵のぎじゅつがかいてある本を読んだり、ネットにでている絵師の動画をさんこうにしたり、自分でかいたものを家族にみせて意見をもらったりしたいです。

想像してみるだけで

大袋北小四年 櫻井 絢

ぼくは、せきがです。一回出始めると止まらないことがあります。かぜをひいている訳ではありません。アレルギーといきの通り道が弱いからです。そんなぼくがかぜをひいてしまったらもう大変です。普通は二、三日で治るはずなのに二週間ぐらいせきが残る事があります。花粉もそうです。目や鼻だけでなくせきも出てしまうのです。

ぼくの事をよく知ってくれている人は気にせずにくれてますが初めての人がいる場所や、電車などの中ではぼくが続けてせきをするとうろりと見られます。それだけならまだいいですが口をおさえながらせきをはなれる人もいます。かぜはみんなうつりたくないのです。その気持ちは分かります。だからぼくは「あっこれはかぜじゃないよ。アレルギーだから心配しないで。」と一人一人に説明したいぐらいです。もちろんぼくは言ったことがありません。うつむきながらせきを全力で止めます。そういう経験があるからなのかぼくは街中で人とはちょっとちがう人をじろじろ見たりはしません。ぼくが想像す

ると、じろじろ見られるのがいい気持ちではないと分かるからです。一人一人が、少し相手の気持ちを想像してみただけで、そこには温かい空気が流れて、みんなが生活しやすいようになると思っています。

戦争をしている国の人たち

宮本小四年 種子島 杏梨

わたしは家でよく新聞を読みます。その中で最近気になっていことがあります。それは、戦争をしている国の人たちのことです。その新聞には、ウクライナ戦争のことが書いてありました。

わたしはその新聞を読んで、とても悲しくかわいそうだと思いました。なぜなら、何も悪くないのに私と同じくらいの子どもたちが殺されてしまったり、戦争にまきこまれてしまったりしているからです。

わたしが住んでいる日本では、現在戦争が起きていません。そのことは、とても幸せなことだと思います。では、世の中からどうしたら、戦争をなくすことができるのでしょうか。

一つは、思いやりの心を持つことだと思います。なぜなら、相手の気持ちや立場を考えて行動することで、すれ違うことが少なくなるからです。

もう一つは、世の中に「戦争をなくそう」と世界の国の人たちに伝えていくことだと思います。戦争が人を傷つけるよくないものだということを、ちゃんと伝える必

要があると思います。

世の中から戦争をなくすことは簡単ではないと思いますが、わたしは、思いやりの心をもつことと、自分の考えをしっかり伝えることを心がけていきたいと思っています。みんなが安心して生活できる世界にしていきたいです。

えがおであいさつ

千間台小四年 齋 藤 華

「大きな声であいさつしなさい。えがおであいさつは大切。」とお母さんに言われます。

どうして大きな声であいさつをしないと、いけないのだろう。少しはすかしいなと思ってしまいます。

でも、朝、学校へ行って先生や友達にえがおで「おはよう。」と言うと、えがおで「おはよう。」と言ってくれます。とても心があたたかくなって、今日も一日、がんばろうと思います。

ごはんを食べる時や給食の時は、「いただきます。」
「ごちそうさまでした。」を言います。これは、給食を作ってくれた人達や、野菜やお米を作っている農家の人達や、お母さんに「作ってくれてありがとうございます。おいしかったです」と感しゃの気持ちをこめて言う言葉なんですよ。」とお母さんが教えてくれました。そうすると、作った人達も、「おいしく食べてくれてありがとうございます」という気持ちになるんだよ。」と言っていました。

「いただきます」「ごちそうさまでした」という言葉にこんなにすてきな気持ちがあるんだなと思う

ました。これからは、感しゃの気持ちをわすれずにおいしく食べたいと思います。

わたしは、ときどき外で遊んでいたり、体育のときに転んでしまうときがあります。そのとき、はすかしいし、すぐぐいたくて泣きそうになってしまいます。そんな時、友達が「大じょうぶ？」と声をかけてくれてほっとして泣くのをやめて、えがおになります。つらい時にやさしい言葉をかけてくれると、すぐく安心して元気になります。友達がいてくれてよかったなと思います。わたしも友達が不安になっていたたり、泣いていたたりしたら、「だいじょうぶ？」とやさしく声をかけて助けてあげたいと思います。

それから、友達と遊んでいて、けんかになってしまう時があります。わたしも友達も話をあまりしなくなつて、心がモヤモヤします。すぐくかなしい気持ちになります。でもやっぱり仲良くなりたいから二人とも、「ごめんね。」と言って、仲なおります。仲よくなったほうが、学校に行くのが楽しくなると思います。もし、「ごめんね。」を言わなかったら、けんかしたままずっと仲よく話したり遊んだりできなくて、友達じゃなくなるのがすごくかなしいです。だからゆう気を出して、ごめんねと言えばまた友達にもどれると思います。

はずかしくてなかなか大きな声であいさつできない友達もいるかもしれないけど、その時はみんなでその友達の声をゆっくり聞いてあげられたら、またそこでもえがおが広がるんじゃないかと思います。あいさつは、みんなと仲良くなれるまほうの言葉だと思います。

いろいろな言葉を伝えると、うれしくなったり元氣になったり、心がポカポカしたりします。わたしは、これからはずかしがらずに大きな声であいさつをしたいと思います。

みなさんも、えがおであいさつしてみてください。きっと心があたたまって、やさしい気持ちになって、友達、親友になれるかもしれませんよ。そうしたら学校に行くのも楽しくなりますよね。



ゆずり合いはまほうの行動

桜井南小四年 松本 彩

わたしは、前に、電車で動物園に行くとき、お姉さんに席をゆずってもらったことがありました。そのお姉さんは、わたしに、

「どうぞ。」

とやさしく声をかけてくれて、席にすわらせてくれました。わたしは、ゆずってくれたお姉さんに、小さな声で、

「ありがとうございます。」

と言いました。すると、お姉さんが、

「いいえ、とんでもないですよ。」

といってくれました。しばらくすると、お姉さんは電車からおおりていきました。

わたしは、お姉さんに席をゆずってもらったことがあまりにもうれしかったので、何かお礼や恩返しができなかなと考えました。そんなことを考えていたら、今度は別のお姉さんが急いでいそうな様子で電車に乗ってきました。わたしは、今度は自分がだれかにうれしかった気持ち返すチャンスだと思い、勇気を出して自分からそのお姉さんに、

「どうぞ。」

と席をゆずって声をかけました。すると、そのお姉さんは、

「ありがとうございます。」

と言ってくれました。

わたしは、「ありがとう」はまほうの言葉なんだと思いました。そして、その電車での出来事から、「ありがとう」を自分から言えるようになったし、たくさん「ありがとう」を言われてますますうれしくなりました。

これからは、みんながゆずり合える社会や、人のことを考える社会になってほしいです。そして、これからも、「ありがとう」というまほうの言葉を忘れず、大切にしていきたいです。そして、ゆずり合えるというのも、みんなのことを笑顔にするまほうの行動だということがわかったので、これからも心にきざんで大切にしていきたいです。

登校班の班長になつて

桜井南小四年 菊池 あすか

わたしは、四月から登校班の班長になってふあんで、本当は、「めんどくさいな、やれるのかな」と思っていたけど、なんとかがんばって四月をおえることができそうです。

そんな中でこのあいだ一年生のランドセルに水とうが、からまっついて一人でおすのが大変そうな時がありました。

わたしは、このまま登校班の集合場所を出発するのに、あぶないと感じたので、一年生のランドセルを持って、からまっっている水とうをほどく手伝いをしました。

わたしは、その時、「一年生は、まだ学校に、通い始めて間もないので、きつと朝のじゅんびやしたくが毎日大変なんだろうな」と、思いました。

わたしが一年生で学校に通い始めた時のことを思い出しました。登校班では、わたしの歩く速度にあわせてゆっくり歩いてくれたり、一斉下校の時は、他の登校班のメンバーが待っている教室へ連れていってくれました。

入学後一ヶ月は、給食の配ゼんのじゅんぴのやり方や、

お道具箱の整理のやり方など様々なことを教えてくれました。

今思うと「上級生に色々なことを教えてもらったりしたんだな。」と思いました。

わたしは、あの時の上級生よりも小さくて、たよりないかもしれないけれど六年生になるまでに、やさしくてたよれる六年生になりたいです。



災害にあった人のために

大沢小四年 志 田 渚 紗

三年生の時、道徳の時間に熊本県地震の学習をしました。その時、わたしは、「大変だったんだなあ」としか思えませんでした。ですが、四年生になってからは、自分が災害にあった人の立場だったら、どんなにつらいか考えられるようになりました。

きっかけは、春休み、道徳の教科書をもう一度読んで、地震の写真に写っていたぐちゃぐちゃにつぶれた家を見て、自分の家がこうなったらどう思うか考えたら、その地震のこわさを感じたことです。

そこで、地震は止められないけれど、自分たちに何ができるのか考えました。そして思いついたのは、募金箱を見つけたら、少しでもお金を入れたり、進んで募金をしたりすることです。募金をすれば、被害にあった場所に住んでいる人たちが、そのお金で服や食べ物を買うことや、町をなおすお金として使うことができるかなと思ったからです。また、洋服屋さんにある着られなくなった服を、被害にあった場所に寄付する箱に自分の服を入れるのもいいと思いました。ほかに、自分ができること

をたくさん見つけていきたいです。

もし地震が起きても大丈夫のように、自分の家でも備えをしておきたいです。今家では、たんすのストッパーや、水を多めにストックしたり、災害セットを用意したりしています。ですが、食べ物や防災セットは少ないので、家族全員分用意できると思います。

また、学校での避難訓練だけではなく、家にいるとき、友達と遊んでいるとき、家族全員がべつの場所にいるときなどで地震が起きたら、どこに避難するか考えたりする行動の備えも必要だと思いました。

地震のほかにも、山火事、たつまき、自分一人の力ではどうにもできません。たとえば、山火事がおきたら、火を消すための消防士。ケガ人を運ぶための救急隊、交通整理のために警察官が来ます。ですが、とても大きな災害だと、その人たちだけでは足りなくなってしまうます。だからこそ、災害が起きたときその人たちが少しでも大変にならないように、日ごろから家族や友達と避難する場所などを話しておきたいです。そして、少しでも災害で苦しむ人が減るように、自分の力で少しでも災害にあった人を救いたいです。

東京の桜はきれい

桜井小四年 池田 志 織

私は四月の頭くらいのときに桜を見に行きました。むかしお父さんがよくつれていってくれていた「上野公園」に行こうといい、上野公園の桜を見に家族全員で、行きました。

駅を出ると前に進めないくらい人であふれていました。お父さんとお母さんと妹と、はぐれないようにしながら進みました。その人ごみは駅から上野公園の桜なみ木までつづいていました。桜はものすごくきれいなピンク色と白色で、まん開でした。私は桜がきれいなので写真をとったりながめたりなどをしてものすごく楽しかったです。

けれど一ついわ感をもみました。それは、外国人が人であふれている中の二分の一ほどたくさんいたからです。どうして日本の桜なのにこんなにも外国人がいるのだろうかと感じたからです。お父さんに「どうして日本の桜なのに外国人がいるの」と聞いてみました。するとお父さんは、「すてきな桜を見るのに日本人も外国人もないでしょ」と言いました。それを聞いて私は「日本人と外

国人はちがう」と思っていたんだな、と初めて気がつき

ました。外国人の人達は見た目もちがうし話す言葉もちがうから日本人と外国人はちがうと思っていたけど、お父さんが言うように日本人も外国人も桜をきれいだと思う気持ちに、変わりは無いと思いました。桜だけでなく、食べ物や本、なんでもそうだな、と思いました。

私はこれがきっかけで外国人を見かけると言葉がわからなくて不安になることもあるけど、私はスマホのアプリや外国語のペンきょうなどをして色んな国の人達ともコミュニケーションなどをして仲良くなっていけるよう

にがんばって行きたいと思いました。
先ほども言ったように桜だけでなく色んな国の外国人の人達とも食べ物や本などいっしょに色んな物を楽しんでいるように、ムリせずがんばっていききたいと思います。

やさしさのバトン

荻島小四年 須賀 あかり

わたしはある日、クラスみんなの思いやりのある行動を見て、人の気持ちを大切にすることのすばらしさを感じました。

それは、ある日のきゅう食の時間のことでした。

きゅう食を食べているときにAさんがだいしょっかんのスープをこぼしてしまいました。スープがゆかにこぼれて、Aさんはあわてていました。けれども、そのとき近くにいた子たちがすぐにクラスに一本おいてあったトレットペーパーを取りにいき、スープをふきはじめました。なんと、席が遠くの子たちまで何人か来て、つぎとポケットティッシュを持って来て、わたしが見ると十人い上がいっしょにゆかをふいていたのです。

だれ一人Aさんをせめる人はいませんでした。むしろ、「だいじょうぶ?」「ドンマイ。」

などと声をかけたり、「ここふくよ。」

などと声をかけ合いながら、みんなで助け合いながらふいていたのです。

戦争をなくすために

南越谷小四年 中村 明日香

わたしは、そのようすを見てなんだか心がぼかぼかしてみんないい人だなと思いました。人がまちがえてしまったときや、こまっている人がいたときに、そっと手をさしのべられるってとてもすてきなことだなと思います。

「人の気持ちを大切にすること」「やさしさの行動」こそがじんけんを守ることにつながるのだと思いました。

わたしも、クラスのみんなのように、自分から人を思いやる行動ができる人になりたいです。そして、「ありがとう」と言ったり言われたりできる、やさしいクラスをつくっていききたいと思います。

私には、戦争をなくしたいというゆめがあります。今も、ウクライナとロシアで戦争をしています。国と国はどちらも平等になかよく、くらしたら良いのにと私は思います。

私は戦争のない世界の人々は、どのような暮らしになり、実さいになくすためにはどうすればいいのかを考えました。

戦争がなくなれば平和に、安心して自分の国や他の国の人と話せます。そして健康で大人も子どもも平等に生きていきます。

実さいになくすには人々をきずつけないようにすることが大切だと思います。また、それぞれの国で、もめあうとそれが広がって戦争につながってしまうと思います。ですから、みんなでなかよくすればいいということですが、それは言うことはかんたんですが実行することがとてもむずかしいのだと思います。だから、昔から戦争がくり返されているのだと思います。

ここで、自分の身近なことで考えてみようと思います。

私は、低学年のころ、ケンカが多かったのですが、その

原因は相手の気持ちを考えられていなかったからだと今は思います。最近では、意見を聞くことの大切さとむずかしさを知りました。友だちの意見を聞き、何が言いたいのか考えることで、ケンカが少なくなりました。

戦争というと、国と国との争いなので大きく感じますが、人と人とのケンカが大きくなった、つまり意見を言いつづけて、きずつけ合っているのだと思います。

戦争をなくすために今の私ができることは人の意見を聞き、おたがいにそんな重し合うことだと考えました。

新しい学校になって

大袋北小四年 木立 宗助

「今年の八月に引っこすことになったんだよ。」と、お母さんからある日とつぜん聞かれました。

ぼくは二年生の二期に転校することが分かりました。はじめはどんな学校なんだろうなどと楽しみにしていました。

そしてむかえた二期の初日。ぼくは、すごくきんちょうしました。友だちは、たくさんできるかなとふ安にもなりました。登校したらぼくは、しょく員室からマイクを使って全校のみんなに名前とどこからきたのか自己紹介しました。そしてぼくは二年一組になりました。教室に入ると先生や友だちがやさしくむかえてくれました。

次の日、休み時間にぼくがいすにすわっていると友だちが

「いっしょにバスケットボールをして遊ばない。」と言ってくれました。そのときは、すごくうれしかったです。

それから学校にもなれてきて友だちもたくさんできま

した。もう前の学校と同じように生活できるようになりました。

三年生の二学期ハワイから転校生がやってくるようになりました。ぼくは新しい学校にくるということは楽しみでもありふ安でもあるだろうと思い、その子が転校してきたときには声をかけてあげようと思いました。

四年生になり、学校になれてくると友だちとケンカをすることもふえてきました。けれども転校してきたときにやさしくむかえてくれたからこそ、今、楽しく学校生活を送ることができていると思います。

このあとと同じように転校してくる子にたいしては、声をかけてなかよくしていきたいと思っています。

えがおをケーキでつくる

平方小四年 江口 咲良

みなさんは、ケーキを食べるときどんな表情をしていますか。わたしは、えがおで食べています。わたしの家族も、えがおで食べています。わたしは、ケーキには人をえがおにする力があると思っています。人をえがおにすることができるとケーキをつくるパティシエになることが、わたしのゆめです。

ケーキ屋さんには、ショーケースがあります。そこにならんでいるケーキは、一つ一つが違ったデザインでつくられていて、どれもキラキラした宝石みたいです。クリームの色、たくさんのフルーツ、さまざまな形、チョコレートでできたかざりなど、一つ一つがきれいで、おかしというよりも作品みたいです。その中から、どれにしようかなやんでいるとき、えがおになります。また、ケーキを箱から出すしゅん間にも、えがおになります。もちろん、それを食べるときは、一番のえがおになります。

わたしは、これまで、クリスマスや母の日、父のたんじょう日などに、ケーキづくりをしてきました。でも、

ケーキをつくるのは、かんたんではありませんでした。

クリームを理想のかたさになるようにあわ立てることがとてもむずかしく、ぬるのも上手にできませんでした。

中に入れるくだものをカットするのもむずかしくて、パティシエのすごさを感じました。食べてもらったとき、「おいしい。」とえがおで言ってくれたのが、とてもうれしかったです。ほかに、クッキーやチョコなどのおかしをつかったことがあります。あまり上手にできなかったけれど、家族はいつも喜んでくれました。にこにこしながら食べてくれるすがたを見ると、とてもうれしい気持ちになりました。そして、もっともっといろいろなおかしを、上手につくることができるようになりたいと思いました。

ケーキには、人をえがおにする力があります。パティシエになって、たくさんの人をえがおにしたいと思います。

思いやりについて

宮本小四年 高口朔人

ぼくは、「思いやりのある人になりたい」と思っています。ぼくにとって思いやりとは、人にやさしくすることです。だから、

「やさしいね。」

といわれる人になりたいと思っています。そのために、泣いている人やこまっている人に、「だいじょうぶ？」と声をかけていました。

ところがある日、朝の登校中に、いもうとがころんできました。なのに、ぼくは気づかず学校に行ってしまった。ほかの人が保健室に連れて行って、いもうとのことを助けてあげていたのです。そして、

「次からは、ぼくが周りをしっかり見よう」と思いましたが、なかなか治りません。

「もうだめだな。ぼくには周りを見ることができないのかな。」

と、あきらめかけていました。毎日あきらめた気持ちでいるうちに、自分だけどんどん早く行ってしまいうようになってしまいました。

でも、今年からぼくは、通学はんのはん長です。自分がしっかり周りをよく見ないといけません。一年生やいもうとの具合が悪そうだったり、転んだりしていたら、先生にほう告したり、助けなければなりません。周りをよく見て通学はんのみんなが安全に登校することができるよう、頑張りたいと思いました。

ぼくは、思いやりについて、何かわかったような気がしました。思いやりとは、自分がしたいことではなく、相手のいやな気持ちを取りのぞいたり、治してあげたりすることが本当の思いやりだと思います。これからもん長として周りをよく見て行動しながら、本当の思いやりについて、みんなに伝えながら自分の心も育てていきたいです。

だれでもなかよく

西方小四年 梶原 董

わたしは、ケンカをしている所を見たことがあります。ちょっとしたことでもケンカになったのだと思います。例えば、「お前太ってるな。」とか、「先生におこられてざんねんだな。」とかそういうところからケンカになっていたたり、「ぼくのがあってるよ。いやいやわたしのほうがあってるよ。」というところからケンカになりやすいと思います。それでも、おたがいにあやまったりしうと思いました。ちょっとしたことではおこらずに、やさしい言葉をかければよいと思います。なので、わたしもそうできるようにになりたいです。そうできるようになるとやさしくできて、ケンカにもならずにすむのです。いいなと思いました。

わたしはそんなふうになれるようにしてみようと思います。

だれとでもなかよくできるようにできるといいです。みんないっしょうけん命人との思いやりをもてるといいと思います。できるようになりたいです。

やさしい気持ち

花田小四年 馬場彩妃

私が三年生のころ電車に乗って、お出かけをしていた時、近くの席から、

「こちらどうぞ。」

と言う若い女の人の声が聞こえてきました。その女の方は、お年よりでもなく、どこかがをしているわけでもないおじさんに、席をゆずっていました。目的地の駅に着いたので、電車をおりた時に、お母さんが私に向かって「あの女の人えらかったね。」

とお母さんは言いました。私は、お年よりでもなく、どこかがしているわけでもなさそうなおじさんに、席をゆずった女の人の気持ちが分からなかったのです、

「何であの女の方は、席をゆずったの。」

とお母さんに聞きました。

「あのおじさんの持っていたかばんに付いていたキーホルダー見た？」

と聞かれました。私は、

「赤くて白い十字かのマークのキーホルダーを付けていたよ。」

と言いました。するとお母さんは、そのキーホルダーについて教えてくれました。

「それは、ヘルプマークと言って、外見ではけんこうそうに見えても何か病気がある人で、こまっている時とかに、助けてあげる事がひつようなんだよ。」

という事でした。

今回の出来事で他にも色いろなマークがあるなと思いました。そのマークのことを理かいしていれば、あの席をゆずっていた女の人のように私も人を助ける事が出来ると思いいろんなマークを調べようと思いました。おなかに赤ちゃんがいる人の付けるマタニティマーク。車では初心者マーク、高れい車マーク、ちようかくしょうがい者マークなど様ざまなマークがありました。

今の私に出来る事。消しゴムをわすれたお友達がいたらかしてあげることや、ころんで血がでている子がいたらばんそうこうをあげるなど、こまっている人がいたら、「大丈夫？」

「これどうぞ。」

と言ってあげるやさしさやゆう気をもっていきたいと思いました。人にやさしくすると、やさしくされた人も、自分も気持ちがいいです。この世界に住んでいる人みんながこの様なやさしさを持っていれば、とても良い世界

になると思いました。これから、たくさんの人を助けられるようになりたいです。



俺の野球

蒲生小四年 大塚 椋 仁

僕は二年生のころから野球をやっていて、大きくなったら、プロ野球選手になりたいと思っています。

野球をやりたいと思ったきっかけは、N T T公園で、休日に友達二人と僕で、遊ぼうとしたのですが、雨がふりそうだったので二人は、来ませんでした。ちょっとうつむいていると、コーチが「野球やらない？」とさそってくれました。グラウンドに行ってみたら、校庭で野球をやっていたので、おどろきました。最初は、「ここでやっていいのかなぁ」と思っていました。最初は、「ここでいいことが分かりました。そして、自分がもっていたゴムボールで子ども達と遊んだり、黄色いあなあきボールでバッティングをしたりしました。家に帰った後、僕の頭は、野球のことでいっぱいでした。野球をやっていたらなぜかとても楽しくなったし、いつの間にかうつむいていた気持ちがふきとんでいたからです。ねる時も野球のことで頭がいっぱいだったので、次の週の休日に野球の体験に行ってみました。野球は先週と同じように、

とても楽しかったです。そして、さ来週に正式にメンバーに入部しました。入部したときの気持ちは、「こんなに楽しい野球を休日ずっとできるんだ」とよろこびにあふれていました。

そして、野球チームがかいさんしてもその後にお父さんと一しょに野球の練習をしていました。バッティングセンターで打げきを上げたり、キャッチボールでグローブをやわらかくして、取りやすくしたり、投げ方、ルールも教わりコツコツと努力して、メキメキとうまくなりました。そして、初試合を見てみました。高学年は自分ではむずかしく思うことを忘れずに一つ一つのプレーで使っていました。いつかこんな選手になれたらなあと思いい、もっともーっと練習して、ぐんぐんとうまくなっていきました。四年生になったら、試合では、レフトをしています。レフトは、サードカバーに入ったりしたり、特に、レフトは外野なのでぜっ対にそらしてはいけないのです。しかも、レフトは強打者が打ってきます。ですが、最近では強打者のフライをたくさん取れるようになったので、よく試合に出されます。試合に出されるとすごくうれしい気持ちになります。試合に出られなくても、ベンチでおうえんしてチームを盛り上げます。

そして、チームに入ってくれる子も多くなってきたの

でとてもうれしいです。

最後に、もし、プロ野球選手になれたら、ヒットやホームラン、好プレーをたくさんして、見ている人みんなを元気にしたいです。



蒲生小四年 古海結愛

そう思ったきっかけは、ニュースなどで食べ物が少ない、くいようもじゅうぶんにとれない子や、親が子どもを育てられない理由でまだ〇さいなどの赤ちゃんが死んでいっていることを知りました。まだおさない子どもたちが、食りようききや親のつごうで死んでいってしまうげんじつをまのあたりにして大きなショックをうけました。わたしが今、おいしいごはんを食べられたりあたたかいふとんでねむれるのは、ふつうのことにみえてすぐめぐまれていて、すぐくしあわせなことだとじっかんしました。また、せんそうなどで死んでしまった人たちも多くいます。わたしもこの国ではなくちがう国で生まれていたらおなじようになっていたかもしれないと思いい、こんなにたいへんでも一人一人がちからをあわせている人にくらべて自分はなにもその人たちのためにできていないと思いました。すこしちがえばわたしは死んでしまうかもしれないとおもい、なにかその人たちのため

今、学校では委員会でぼきん活動をやっています。わたしはぼきんはしていましたがだれになんのためにぼきんしているかはあまり考えませんでした。が、お金がたりない人や食料がたりない人のためにすこしずつ子どもでもがんばっている人がいるんだと思いました。わたしはまだ四年生で委員会に入っていないせんが五年生になつたら委員会に入ればきん活動をできたらいと思ひます。またすてられてしまふ赤ちゃんのために赤ちゃんボストなどもあり、それぞれの人たちが助け合つていてすごいと思いました。まいにちまいにちすこしでも生きようとおもっている子たちが、ささいなことでも生せとかんじてほえみあえる世界になつてほしいとおもひます。また未来にむけてぼきん活動でどうしたらぼきんしてもらえるか考えたり、きゅうしよくのほうそうでもぼきん活動でどのくらいのかんがくがあつたかななことをほうそうしたりしてくれていました。また、ぼきん活動にはみどりのはねぼきん・赤のはねぼきんをやった

りしていて、ぼきんをやってくれた人やクラスの人などにぼきんのきかんがおわったらくぼっています。ベルマークかいしゅうボックスなどもあり、ノートなどについているベルマークの紙をきりとしてベルマークかいしゅうボックスいれるぼきん活動のような活動で、つらい人たちのためになにかできることはないのかひっしでかつどうしている人たちを見て、すぐすてきであこがれました。まだ子どもの自分でもなにかできることがあるんだと分かりとてもうれしくおもい、また、その人たちのために全力をつくしたいとおもいました。その人たちのようにこの世界の一人でもすこしきょうりよくしたいとおもってたちあがってくれる人がいれば二人、三人とどんどんふえていき、それぞれがう国のものたちが手をさしのべあい糸のようにむすばれ心が一つになれば、おたがいがおたがいをにくしみあわずえがおでわらいあえると思います。たくさんの方がつらい人のためにあせみずたらしがんばっていることはきつとむくわれるはずだから、その人にもきつと思いがとき一人、二人とすくわれる人がすこしでもいるとしんじています。手をさしのべあえば、題名のようにあかの他人でもことばがわからなくても、手を取りあえば、わになりきょうりよくできるとわたしはこのさきもずっとずっとしんじていま

す。

しょうらい、わたしはつらくてもまけずに生きようとして
している人に手をさしのべて、ともにわらいあえる世界
になってほしいと思います。



「こんにちは」のプレゼント

優秀作品

平方小五年 細井 ちとせ

「こんにちは。」と大きな声で言うとき心がすっきりします。返してくれたらうれしいけれど、返してくれなくても、笑顔であいさつをすることが、私は大好きです。

私がいさつをすることが大好きになったのは、去年の夏のできごとがきっかけでした。妹と二人で遊んでいた私は、向こうから歩いてくるおばあさんに、なんとなく

「こんにちは！」

と言いました。妹は恥ずかしかったのか言えなかったの
で、

「ほら、こんにちはって言わなくちゃ。」

と教えてあげました。すると妹も小さな声で

「こんにちは。」

を言うことができました。おばあさんは、ニコニコして
いました。そして私たちに

「ありがとう。」

と言いました。突然言われた「ありがとう。」の言葉に
びっくりして、私は何も言えなくなりました。おばあさ

んは、私たちの気持ちに気づいてくれたのか、こう話してくれました。

「私は、あいさつをすることも好きだけど、されるのも
大好きだからうれしくなっちゃったんだよ。」

その言葉を聞いて、私もうれしくなりました。おばあ
さんは、

「ちょっと待っててね。」

と言って、家の中に入って行きました。そしてまた、家
から出てきました。おばあさんの手には、たくさん折り紙
の紙がありました。全部、おばあさんが作った折り紙で
した。

「好きなを取っていいよ。」

と言われ、私はかわいいねこ、妹は大好きな犬の折り紙
をもらいました。私と妹は、母といっしょに、「こんに
ちは。」のお返しのプレゼントを持って、家に帰りまし
た。

私の父と母もあいさつをたくさんします。父と母を見
ていると、私もあいさつをしたくなります。あいさつを
すると、心がつながっていく気がします。だから、あい
さつが大好きです。

あの日おばあさんにもらった折り紙は、今でも家に大
切にかざってあります。

言葉の使い方

大袋東小五年 遠藤 千鶴

言葉の使い方って、とても重要だと思う。感じ方は人それぞれだから、同じ言葉を使っても、言われて全然気にしない人もいれば、すぐぐく気にする人もいる。また、何を言われてもあまり気にしない人でも、これだけは言われたくないという言葉がある人もいる。よく、「自分が言われたらどう思う？」って考えてと言われる。人それぞれだから、「自分は気にしない」と思う人もいると思う。だからって、自分は気にしないから、周りの人に悪い言葉を使ってよいということではないと思う。気づいてほしい。使つてはいけない言葉はあるということ。音楽会の練習をしていた時のこと。パート練習でみんなに

「こうやっていこうよ。」

と声をかけていたら、

「良い子ぶっている。」

「かわいいアピール？」

と言われた。ものすごく嫌な気持ちになった。その子はじょうだんで言つたつもりかもしれないけれど、私はと

ても嫌だった。ただただ「すてきな合奏をしたい」という気持ちでみんなに声をかけていただけなのに、そんな言葉を言われるなんて、信じられなかった。また、仲の良かった友達とけんかをして、

「お前なんか友達じゃない。消えろ。」

と言われたこともある。すぐくショックだった。悲しかった。

でも、私も同じようなことを友達に言ってしまったことがある。けんかをしている時に、

「きしよい。」

「きもい。」

と言ったり、友達に嫌なことを言われた時に

「うざい。だまれ。」

と言ったりしてしまった。また、兄弟げんかをした時に、

「生きてる価値がない。」

と言ってしまった時もある。後から考えると本気でそんなことを思っていないし、「こんなひどい言葉言つてはいけなかった」と反省もする。でも、その時は頭にきていて、相手の気持ちなんか全然考えないで、ひどい言葉を発している。

一つの言葉で、亡くなる人もいる。最低な言葉、使つてはいけない言葉だとわかっていても、その言葉を使つ

ている。その時に腹が立っていたからとか、じょうだんの気持ちでとか、そんな理由で使った言葉のせいで、だれかがとても傷つき、亡くなってしまうたら、責任はとれない。一生後悔する。軽い気持ちで使った言葉が人の命をうばうことになる。後悔しても、後もどりはできない。一つの言葉が凶器になる。そんなことはわかっていても、心を傷つける言葉を使っている人がたくさんいる。絶対に使ってはいけない言葉がある。私はそれを絶対に忘れないようにしたい。

みんなの良さ

大袋北小五年 小川 夏芽

私は小学校で学んでいる教科の中で、国語が少し苦手です。テストの点数が他の教科に比べてあまりよくなかったり、教科書の音読でつまってしまったりすることがあるからです。みんなの前で発表するのも緊張してしまい、思うように話せないことがあります。

お母さんに「もっと本を読んでみたら？」とアドバイスをされて、読書を始めてみたこともあります。でも、なかなか長く続けることができませんでした。私は読むことも、書くことも少し苦手です。そんな自分に落ち込んでしまうこともありました。

でも、そんなとき、友達が「こういうふう to 考えるといいよ。」「この言葉はね、こういう意味なんだよ。」とやさしく教えてくれたことがあります。分からないところを説明してくれたり、作文の書き方のヒントをくれたりしたおかげで、私は「少しがんばってみようかな。」という気持ちになりました。国語が得意な友達に助けてもらいながら、自分の中で少しずつ自信がついてきたのを感じました。

逆に、私が得意な教科は算数と体育です。計算問題を解いたり、体を動かしたりすることが好きで、得意な方だと思っています。友達の中には、算数で苦手なところがある子もいて、「ここがよく分からないんだ。」と言われたときには、「こうやってやると分かりやすいよ。」と説明することがあります。最初は自分が教えるなんて思っていなかったけれど、「ありがとう、わかった!」と言ってもらえたときは、とてもうれしかったです。

このように、友達の中には国語が得意な人もいれば、算数が得意な人、体を動かすのが好きな人、絵を描くのが上手な人など、いろいろな良さがあります。私は、友達の良さを見つけたときに「すごいな。」「まねしてみたな。」と思うことがあります。そして、自分の得意なことが誰かの役に立ったとき、「自分にもいいところがあるんだ。」と思えるようになりました。

学校は、いろいろな人といっしょに過ごす場所です。だからこそ、みんなが得意なことを活かして、苦手なこととは助け合えるといいなと思います。「これが得意だよ。」「ここが分からないんだ。」と伝え合って、それぞれの力を合わせて学んでいけたら、学校はもっと楽しい場所になると思います。

私はこれからも、自分の苦手なことには少しずつチャ

レンジして、友達の良さを見つけないが、自分の得意なことも大切にしていきたいです。そして誰かが困っていたら、声をかけられるような人になりたいと思います。そんなふうに、みんなの良さが輝くクラスにしていきたいです。



親友のはげますパワー

大袋東小五年 厚川 穂 紫

ぼくには、気軽に相談できる親友がいる。学校が終わって、下校の時間になり、自分のコースがよばれた。そして、親友と今日あった事やおもしろい話をして帰っている。でも、ぼくがいやな気持ちになったり、いやな事があったりするとすぐに気付いてくれて、「大丈夫？何かいやな事があったの？」と声をかけてくれる。その事はしんらいできるその親友にしか相談しない。ほかにも仲のいい友達はあるけど、他の人に言うかもしれないのでその親友にしか相談してない。その親友はたくさんはげましてくれる。その親友がいることで今も悩んでいることはない。でも、その親友がいなかったらどうだろう。ぼくは悩みを抱えたまま不登校になって家に引きこもってしまうかもしれない。ぼくにとってその親友はとてかけがえのない人である。でも、この世界にはいじめや差別でたくさんの悩みを抱えているのに、だれにも相談できずに病んでしまう人も少なくはない。ぼくは改めて親友がいて良かったと安心した。けれど、差別などをされている人も自分たちと同じ人間。まったく関係ないと

いうわけではない。ぼくは、親友みたいに思いやりを持って行動したいと思う。

でも、一つすごいと思う事がある。例えば、ぼくがいじめられたとして、仲の良い友達からはげまされると、もちろん気持ちは楽になるけど、まだ心のモヤモヤが残っていてなんだか複雑な気持ちになる。でも親友にはげまされると、心のモヤモヤも消えて安心する。親友は、人をはげます特別なパワーを持っているようだった。ぼくは、はげまされると悲しい気持ちや苦しい気持ちが和らいで嬉しい気持ちや頑張ろうという気持ちになる。ぼくは親友からはげまされてとても嬉しくなって、気持ちがとても楽になった。これからは、ぼくも親友みたいに、困っていたり悩んでいる人がいたらすぐ気付いて、その人が嬉しくなったり、頑張ろうという気持ちになれるように意識してはげまそうと思う。

好きなことを好きなままに

平方小五年 宇田川 季 里

星、宇宙、元素、素粒子が好きだ。インターネットで調べたり、本を読んだりするとわくわくが止まらなくなる。新しい発見や新しい知識は、新たな不思議を生み出し、もっと知りたい、もっと勉強したいと思わせてくれる。いつしか、私は「宇宙飛行士になりたい」という夢を持つようになった。

三年生のとき、科学展で金賞を取った。特選賞ももらった。両方をもらった私は気持ちが高ぶって、最高に幸せな気持ちになった。研究したことは「カビ」についてだった。はじめたところに、音もたてずにじわじわと増えていくカビに興味を持った。調べていくと、いろいろなカビの種類があり、その性質はさまざまだった。新しく知ったことが多く、楽しかった。でも、カビを研究した私を友達はからかった。「なんでカビを調べたの?」と。その言葉はまるで、心にナイフが刺さったようだった。好きなことを：面白いと思ったことを調べただけなのに。

他の友達も、ファッションや好きな音楽などに興味があ

るらしい。アニメやゲームが好きな人もいる。好きなものは人それぞれだ。だから私は、自分の好きなことは好きなままでもいいと思う。

私の興味があることは、科学のことや宇宙のことだ。科学や宇宙は、奥が深くて、まだまだ知らないことがたくさんある。不思議なことだらけで、とにかくすごいのだ。私が好きな「元素」は、百十八種類ある。実は人工的に作られた「元素」もある。日本で作られた元素「ニホニウム」は私のお気に入りだ。素粒子は、物の最小で、性質はほとんど不明だ。わからないことほど知りたくなる。そして一番興味があるのは、宇宙だ。宇宙は、力と重力と電気が司っていると図かんを読んで知った。力と重力と電気：この組み合わせが不思議だ。宇宙の外は「無」だという。物質も空間も時間も無い。限らない「無」だ。なぜそこに宇宙があるのか、宇宙がどうしてできたのか、私は知りたい。元素、素粒子、空間、時、宇宙：目に見えないものが、私をわくわくさせるのだ。「宇宙に行ってみよう。宇宙飛行士になりたい。」私の思いはだんだん大きくなる。だから、私はたくさん勉強する。好きなことを好きなだけ勉強する。もっともっと知りたい。私の思いは、きっと宇宙に届くはずだ。

最高の大家族

平方小五年 漆山 月 姫

私の家族は十五人。家族が多くて毎日私は幸せです。習い事が終わって、少し遅く家に帰ると、いつも笑い声がたくさん聞こえてきます。その声はとっても楽しそうで、私もみんなのところへ早く行きたくなります。みんなが話をして、みんなが聞いてくれます。

でも、大家族だと大変なこともあります。食事をするときは、いつもきつきつです。でも家族で食べるご飯は最高です。「おいしいね。」がたくさん聞こえるからです。そうすると、ただの「おいしいね。」が「すごくおいしいね。」に変わります。

洗濯も大変です。十五人分の洗濯は、父と母がやってくれます。洗濯機を何回も回して、何回も干して、やっと終わります。仕事も一生懸命頑張っている両親を、少しでも助けてあげたいと兄や姉も手伝います。私もできることはやりたいと思っています。

父と母は旅行も大好きです。でも、大家族だと旅行の移動もお金も大変です。大変なはずなのに、父と母はいつも笑顔で、私たちをいろいろなところへ連れていって

くれます。

学校へ行くときの髪形は、母がきれいに結ってくれます。美容師だから、ささっとてぎわよくきれいにしてくれます。でも学校の支度は私だけではありません。弟達の支度もあります。朝、母は大忙しです。

両親は、授業参観や発表会にも必ず見に来てくれます。やっぱり父と母が来てくれると、私はとってもうれしいです。時々、大きい兄や姉も見に来てくれます。家族みんなが応援してくれると、すごいパワーがでます。

私の大家族が、笑い声が絶えなくて、幸せなのは、やっぱり優しい母と優しい父のおかげです。誰よりたくさんいる兄弟は、私の強い味方です。最強です。

わたしを生んでくれた父と母。たくさん兄弟を生んでくれた父と母。いつも一生けん命で忙しくて、それでもいつも笑顔の父と母。私の大家族は、最高です。「ありがとう。」となかなか言えないけれど、いつも心の中で言っています。

「お父さん、お母さんありがとう。いつまでも元気できてね。たくさんお手伝いするからね。」

「日本文化について」

蒲生小五年 茅野 美 悠

私は日本文化が好きです。日本文化には、他の国にはないすてきだと思うところや残していきたいと思うところがたくさんあります。

私があるように思うものの中に「四季」と「ていねいさ」があります。

日本といえば着物ですが、着物は秋らしいもみじのからだったり春らしい花がらがあったり、夏は涼しげなゆかたのが多々、四季の良さをうまく表しています。私は、祖母が着物を作っていたので着せてもらうことがあります、着るときにも着付の一つ一つをていねいに進めていくことで仕上がりがとてもきれいになります。

また、祖母も母も茶道が好きなので、私も茶道を習う機会に恵まれました。そこで出会ったのが和菓子です。

茶道も一つ一つの所作に意味があり、お軸や飾るお花を拝見してお部屋に入り、四季を感じることが出来ます。なかでも和菓子は、小さくてかわいらしいものに四季を表しています。また、和菓子の職人さんの細かい作業を大切にしていると日本らしいと思います。例えば、

梅雨の和菓子はあじさいと雨をイメージした練りものなどがありました。雨を寒天で表していたようです。あじさいは、寒天ではなく練りものでピンク、水色、むらさきのグラデーションで表現され、花の上に雨つぶがのっている様子を練りものと寒天で上手に表していました。このように、和菓子からも日本のていねいさがよく伝わり、目でも楽しみながら食べる事ができます。

時代は変わっても、現代の人も昔の人もそれぞれに四季をモチーフにしたものを作ったり、身にまったり、食べたりしながら、四季を感じ大切に行っていることは変わらないと思います。

しかし最近では、地球温暖化などで四季が感じられなくなってきています。例えば、桜やもみじなど植物の移り変わりが遅くなってきています。その代わり、夏になるのがとてもはやいです。そのため、桜やもみじなどの自然を楽しむ時間も短くなってしまっています。このままでは四季が無くなってしまわないかと私は心配しています。四季を守るために環境問題について勉強し、自分でもできることから取り組んでいきたいと思っています。

四季を守ることで日本文化を守ることにもつながると思います。日本文化について少しでも多くの人に知ってもらえるように、また日本文化をつないでいくために、

四季を守るということは環境問題に向きあうことだとい
うことをまずは身近な人から伝えていきたいと思います。



僕のザップ

平方小五年 水村 楓 玖

ザップは、僕の友達でした。いちごが大好きで、何でも食べる元気な犬でした。

ザップがねる前は、必ず小屋から出してあげます。元気に走ってトイレに行くのですが、その時は、様子がちがいました。ザップは息が荒くなり、寝そべっていました。いつもと違うその様子に、僕はこわくなりました。見ていた家族と一緒に、思わず泣いてしまいました。

その夜、元気がでるように、いつもおいしく食べているいちごをあげました。そのいちごに、「明日は元気になってね」と願いをかけました。僕はザップが元気になることを信じて寝ました。

次の日の朝、僕は心配で、一番早く起きてザップの様子を見に行きました。ザップはまだ寝ているのかと思って、いつものようにやさしくなであげました。でも反応しません。いつもなら僕がなでると、クンクン鼻を鳴らすのに：僕のザップじゃありませんでした。僕はあせてみんなを呼びました。僕は、ザップが家族の中で一番最初に、虹の橋を渡ったんだと思いました。お父さん、

私の将来の夢

蒲生小五年 篠原董礼

お母さん、兄弟みんなが何も言わず、ただただ静まり返って、泣きくずれました。触ってみると、ザップは、まだ少し温かく感じました。今さっき亡くなったのだと思いました。

その日のサッカーは、休むことにしました。そして、ザップを骨にしてくれるところに行きました。

十四さいでなくなったザップ。僕は最後に「十年間ありがとう。」とザップに言いました。

ザップの遺骨は、家で大切に保管しています。僕は時々「元氣？」とザップに声を掛けます。生きているザップには、もう会えません。いっしょに遊ぶことも、走ることも、大好きないちごも食べさせてあげることができません。それを思うとつらくて、悲しくて涙があふれてきます。ザップは本当に苦しかっただろう。でも、ザップが大好きだった僕たち家族の心がこんなにつらくて苦しいのだとは想像できませんでした。

かわいかったザップ。僕が生まれる前から家族だったザップ。ザップとすごした十年間は、僕の心の中に生きています。これからも僕はザップに「元氣？」って声をかけます。いちごはザップと一緒に食べます。だからザップに「バイバイ。」は言いません。

私の将来の夢は水泳の指どころになること。

幼稚園の頃から続けてきた水泳は、今年で八年目になった。二年生になる前、通っていたスイミングクラブのコーチから選手コースに誘われたことがきっかけで、水泳のめり込むようになった。

「私が選手コースに入れるんだ」

そのことがとてもうれしかった。けれど、入った頃は、先ばい達と同じメニューは泳ぐことができず、悔しい気持ちよりも、体の疲れで、翌日もまたきつい練習をしなければいけないんだとゆううつな気持ちになっていた。そんな時、たまたまテレビでやっていた水泳のオリンピックを見た。きれいに、ものすごくはやく泳ぐ選手が沢山いた。もちろん、その選手達の泳ぎや実力にもあこがれた。でも、一番かっこいいと思ったのは、その選手を支え、アドバイスなどをするコーチだった。

「私もあんなふうに素晴らしい選手を支えられるようになりたい」

そんなふうに思った。そのためには、一生けん命練習を

して、もっと自分のベストタイムをはやくしていかなければならないと思った。

練習以外でも、筋トレや、はやく泳げるキックの仕方、け伸びのしせい、飛び込み方、コーチからのアドバイスなどをもとに、実せんしたり、ノートなどにまとめていった。その他にも、ビート板を使って、気になっていたうでの弱さをきたえる練習や、ゴムを使っうでに負荷をかけるトレーニングなどをコツコツ続けた結果、水をかく力が上がって、全体的に泳ぐのがはやくなった。沢山の努力を重ねたおかげで、やっと四年生で県大会に出ることができた。一生けん命にやって、やっと出られた大会でいいタイムを残せるようにがんばろうと思ったけれど、思いの外、まわりの人たちがはやかたり、きんちゅうしていたり柔なんはしたはずなのに体が固かったりしたせいとか、いつも練習でやってきた泳ぎができず、自分できりたかったタイムが出せなかった。結果は二十六位ですごくがっかりした。何日か落ちこんでいたけれど、初めての県大会だったから仕方ないとしっかりと切りかえられた。今回の大会での失敗や、次の目標を考えて、この悔しさを忘れずに、前よりもっとはやくなれるよう、練習がいくらくきつても全力でがんばり、体や、メンタルをきたえて、きんちゅうに打ち勝って、もっといいタ

イムを出せるようにしていきたいと思う。

沢山辛いことや、悔しいこと、悲しいこともあったけれど、自分の叶えたい夢に向かって、歩みを止めないでいきたいと思う強い気持ちがあったから、きついことがあっても一生けん命がんばれるのだと思う。これからも、水泳の指どう者になるという夢に向かってがんばってきたい。



センターへの道

南越谷小五年 安原 琉 桜

わたしは去年から阿波踊りを始めました。去年、小さい時からやっている人たちが抜かして子ども踊りのセンターになりました。わたしは同じ学年の同じクラスのほいく園も同じだった人を阿波踊りにさそいました。その人も一緒にセンターになったけど実力はわたしの方が高くてうれしかったです。

「今年もセンターになるぞ」と思い練習をしました。だけどその後少し抜かれてしまって悔しくて家に帰って泣きました。そして、家で去年一緒に入った人のことを聞くと、その人もわたしに抜かされて家で泣いていたことを知りました。わたしは去年、昔からやっている人のことをなんとも思わなかったけど一緒に入った人の話を聞いてから、去年、抜かした人たちも悔しかったんだなと思いました。でも、その人たちはわたしに抜かされてもなんとも言わずに生活してすごいと思いました。これが去年のことだったことでした。

二つ目は今年、新しい人が子ども踊りに来たことです。その人は、踊りが上手くて先生にもたくさんほめられて

いました。それを見てわたしは、さらにがんばろうと思いました。

練習が終わって家に帰ってわたしは思いました。「どうして入ったばかりなのにあんなに上手なんだろう」そして次の練習のときその人のことを観察してみました。すると、その人も上手い人のことを見ながら踊っていました。

三年生の時、学校でいきいき先生の阿波踊り教室という学校行事で初めて阿波踊りを踊りました。そこで踊った時、わたしの友達が上手くて、わたしも上手くなりましたと思うようになりました。だけど、きほんのしせいなど、わたしにはできないなと思い、あきらめかけていました。

わたしは四年生になってからお母さんに、「阿波踊りがやりたい。」と言い、阿波踊りの見学に行くことになりました。そこでは、小さい子、高校生、大学生もいました。ここで阿波踊りをやれば上手くなるかもしれないと思い阿波踊りを始めました。そして練習にもたくさん参加しました。この「たくさん」がわたしの力になったからセンターになることができたんだなと思いました。

これから練習をつんで、阿波踊りのセンターになりたいです。そして、もしくじけそうになっても去年のこ

とを思いだして、全力を出したいです。



私の妹

大袋北小五年 石原 奈月

私の妹は一学年下の四年生です。年も近いので小さいころからいつも一緒です。遊ぶときも習い事の時きもいつも一緒です。

妹はすぐに私と同じものをほしがり、同じ色を選び、私のまねをするので、けんかになることもよくあります。私がクラスの友達と遊ぶときも必ずついてくるので、時々うっとろしく感じます。

しかし、私が父や母、兄とけんかをしたときには、いつもかばってくれます。学校でいやなことがあるとはげましてくれ、おもしろいことを言ったら、暗い雰囲気を作るくしてくれます。

そんな妹は、私とミニバスを習っています。妹の学年はよく言い合いをして、けんかのようになっています。

「ちゃんとパス受け取ってよ。」

「ちゃんとディフェンスついてよ。」

など、きつい言葉が飛び交います。妹は、その度にすねたり、泣いたりします。しかし、妹は、一通り泣いた後に気持ちを切り替え、仲直りをします。そして、遊ぶ約

束をし、夕方まで仲良く遊びます。その切り替えの早さがすごいなと思います。私は気持ちの切り替えが苦手なので、妹のその部分は良いところだと感じ、見習いたいなと思っています。

私と妹はこれからも色々なことを一緒にしていくと思います。性格は全然違いますが、私は妹の良いところをまねしていきたいです。そして、私も妹のことを助け、見守ることのできるお姉ちゃんになりたいです。

身近な妹から学んだことは、兄妹だけでなく、自分の周りの人たちにも心配りをして、親切にしていきたいと思っています。その心配りや親切が世界中に広がっていき、やさしい世の中になっていくような気がします。

いつも近くに来てくれて、いつでもやさしく楽しませてくれる妹の存在が改めて私にとって大切だということに気がつきました。私は妹のことが大好きです。

小さな勇気をふりしぼって

明正小五年 宮田 ここね

わたしが四駅先の塾に行くために、電車に乗っていたときのことです。席は空いていなかったのですが、ドアの近くの手すりのところに立っていました。はじめの駅から二つ目の駅までは、開くドアの方向が同じですが、三つ目の駅は逆のドアが開きます。わたしはその方向のドアの近くにいたので、その駅では少しドアからはなれないと人の迷惑になってしまいます。それはいつものことです。その日は、つえを使って歩かれています。老人がいっぱいいました。安定しない足取りだったので、手すりを使った方が良いと思います、わたしはドアの近くからはなれました。するとそのご老人は安心したように笑ってください、わたしも安心しました。その時、とってから「どうぞ、お座りください。」

と声がしたのでふり返ると、女の人が優しく席をゆずっていました。わたしはこの時、女の人のことを、

「なんて勇気のある人だ」

と思いました。よく、電車やバスで席をゆずるという行為は思いやりの例として挙げられますが、それには少な

からずも必ず勇気が必要なので、わたしはできたことがあります。しかし、その時のご老人の笑顔は、その小さな勇気でも作れたということだと考えることもできます。それに、席をゆずるとまではいかなくても、わたしがそうしたように手すりからはなれるくらいならできると思います。

これは、四年のころ学んだ「福祉」とつながりました。福祉はとくべつな人に対することではなく、みんなの幸せを考えることです。それなら、福祉は、みんなのために、みんなができることという意味の言葉になります。

もちろん、これは福祉にかぎったことではないはずですよ。

学校でも困ったときは助け合うという場面がたくさんあります。家庭でも、そして地域でもです。どんなに小さな勇気でも、それが必ず誰かの力になり、笑顔になると考えたら、もっとたくさん助け合って、一つにまとまって笑い合える社会をつくりたいと思えました。

わたしはこの経験から、勇気を大きくしていくほど笑顔も大きくなるものだと気が付きました。たとえば先ほどのように、手すりからはなれるよりも席をゆずる方が大きな勇気がいり、大きな笑顔になります。でもだからといって、勇気が小さい思いやりは役立たないという

わけではありません。大切なのは、

「どんな大きさの勇気でも良いから、世のため人のため思いやりを持つとう」

と考えることです。自分にできる思いやりをじょじょにふやし、大きくしていくことを心がけられたら良いと思います。

わたしはこれから、自分に出せる限界まで勇気を持って、みんなが笑顔になるくらい思いやりを続けていくことを目指し、本当の親切を知っている人になりたいです。



人権を失うことの苦しさ

千間台小五年 六川 心 結

世の中には今も続いている「戦争」があります。戦争とは本来領土の問題で起きているものですが、その問題のせいで「ご飯」や「洋服」「幸せ」を求めることさえできなくなってしまっています。ニュースで見たウクライナとロシアの戦争はまさにその通りで人々は苦しんでいます。また、戦争には「女は力が弱いからつれていかない」という差別、「男は力が強いからつれていく」という、本当は力が弱い男がいるのにも関わらず、そういう差別をするのは本当の人権問題なのではないでしょうか。また、ほんの小さな発言でも、世界には苦しむ人や、中にはもうたえられなくて自殺してしまう人だっています。そして、相手がこたわっているのにSNSで勝手に写真をあげたり、今問題の「パワハラ」や「セクハラ」をされて、いやな気持ちに感じる人や自分をせめたりしてなん病の「うつ病」になってしまいかもしれません。人権はどういうものなのでしょうか。人権とはそれぞれの人が幸せに生きることの権利を指します。その、女だから、人種がちがうから、しょう害があるからとの理

由で差別されることだってあります。そうになってしまうことで世界の人々は人権を失っていつてしまうのです。また、人権があるからという理由でいじめるのは自分もいい気持ちにならないし、相手も良い気持ちになりません。私は今、どうしていじめ、差別、戦争をしているのかがとても不思議に思います。いじめをして何か得することは果たして本当にあるのでしょうか。自分はこれしたい。自分はこれがほしい。という願いが強まり、よく望になり、さらにそれがエスカレートすると戦争という大きな事になったりいじめにつながってしまうのです。そしてそれを知らぬ間に相手に行動や発言をし、相手を困らせていつてしまします。それが、人権をだんだん失っていつてしまう原因の一つかもしれません。

世界には、人権を失っている人がたくさんいます。そのひ害をもっとかく大させるのが、本当に私たちの仕事なのでしょうか。私は絶対にちがうと言いつて切れます。ひ害をかく大させるということは、相手をきずつけることにつながって、自殺をさせてしまう大きな一つの原因にもなりかねないと思つたからです。

最後に、私の考えとしてまとめると、戦争とは領土のうばい合いで発せいつ、さらには願いつがよく望に変わり、それがエスカレートすると発せいつするとも考えます。そ

れから、いじめはちょっとしたふざけた発言でも相手が

きずつき、自殺にまでいたってしまうこともあるものです。さらには、人権を失うことの苦しさは、とても今の自分にはたえられない苦しさだと感じています。

私は相手をきずつけないように、小さな発言でも言葉を選んで使い、人権、自由に生きることの権利を失っている人がいたらまよわず助けたいと思います。今までは困っている人を助けてあげられなかったけれど、今度こそは絶対に困っている人、人権を失っている人がいたら助けられる、そんな人になりたい。そして、絶対に人権があるからといって相手をきずつけたり、いやな思いなどをさせないような人にもなっていきたい。

なんで決めているの

千間台小五年 高原 ゆりな

私は男はこう、女はこうではなくて、性別かんけいなく、自分がやりたいようにしたほうがいいと思います。

私はラグビーをやっています。男子の友達もラグビーをやっています。でもラグビーをやっているって伝えると、その男子の友達はびっくりされていなかったのに、なぜか私はびっくりされました。そのときに私は、なぜ男子はびっくりされないのに、私はびっくりされてしまったんだろうと思いました。また、四年生になって、伝えました。そしたらまたびっくりされてしまったって同じことを思いました。

ラグビーの習い事でも男子はたくさんいるのに、女子は自分もいれて四、五人しかいません。そのことを考えたらなんだかラグビーは、女子ではなくて、男子がやるものとみんなは、考えてしまっているんだなと、思いました。

もう一つは、絵本を読んでいるときに思ったことです。主人公のお父さんは、会社などお金をかせぐ仕事ではなく、家の仕事、せんたく、りょう理、ゴミをすてる、しょっ

「大切な人」

蒲生小五年 齋藤実玖

きをあらう、家のそうじなどをしています。一方、主人公のお母さんは、家事をする仕事ではなく、お金をかせぐ仕事をしています。そのことにたいして、主人公の友達は、「あの子の家の家族って、なんか変だよね。」と言っていました。そのことにたいして私は、家事をする人とお金をかせぐ仕事の人が、決まっていけないほうがいいのではないのかと、思いました。また、これは男子がやらないものか、思いました。これは女子がやらなくてはならないものが決まっているみたいに世界はなっているのだなど、思いました。

この二つのことを知って、インターネットなどで日本のジェンダー・ギャップ指数を調べてみたら、百四十六か国中日本は百十八位となっていました。このことから日本は男女の差別が、多くおきていることが分かりました。

男女の差別をなくすために男子はこう、女子はこうをやめさせたいです。また、女子でも習い事のラグビーをさそってみたいです。

わたしには大切な人がたくさんいます。その中でも一番大切な家族と友達についてまとめてみました。最初は家族からです。

わたしにはお母さん、お父さん、お姉ちゃんのわたしをふくんで四人の家族がいます。この家族は、わたしを支えてくれている存在です。お母さんは、いつも美味しいご飯を作ってくれてわたしの話を聞いてくれます。お母さんは心配性でわたしが出かける時は、「気をつけてね!」「忘れ物はない?」と言ってくれます。すぐく優しくてわたしが辛い時は受け止めてくれて、不安で押しつぶされそうな時や、悲しくてなみだが止まらない時はハグしてくれて、「あなたは一人じゃないからね。」と言ってくれます。自分はなにも言っていないのに「最近なんかあった?」と気づかれます。これはお母さんの持っている不思議な力です。お父さんは、いつも仕事で帰ってきてても一緒にしゃべったり遊んだりしてくれます。休日では、美味しいご飯を作ってくれます。あと一緒にえい画館に行ったり、わたしが行きたいと言ったところには

行かせてくれました。わたしがひまそうにしている時は、

「どこか行こうよ！」とさそってくれます。お姉ちゃんは中学生で部活も忙しいけど、一緒に遊んでくれて、いつもケンカするけど、たよりになるたのしいお姉ちゃんです。「あんたをいじめたやつは許さないからね？」と、言ってくれる優しくてかっこいいお姉ちゃんです。

いつもケンカしてるけど、わたしがねてるときにしん室に来て頭をなでてくれていることを知っています。ケンカしても大切な世界で一人だけの姉です。

次は友達です。わたしには、いつも一緒に帰っている親友がいて、ある日わたしは下校中に色々つらくて泣いていたときに、その友達が、「大丈夫？わたしはみくの味方だからね。」と言ってくれて、いやなことを言いました。そしたら気持ちが軽くなりました。その友達とは、小さなことでケンカするけど、気付かないうちに仲直りしている。そんな関係だからこそはき出せるものがあるのかな、と思いました。

今、わたしが楽しく生きられているのも、全部家族や友達のおかげだと思います。大切な、世界で一人だけのわたしをすくってくれた人に感謝してこれからも生きていこうと思います。なぜなら、大切な人たちが、わたしの希望だから。

おばあちゃんの塩むすび

大沢小五年 錦 織 玲 奈

みなさんはどんな食べ物が好きですか。わたしはおばあちゃんが作った塩むすびが大好きです。このおむすびは、お店や自分でも再現できないやさしい味がします。その味は何だろうと思いついてみました。

やさしい味は心を温かくして、家族も笑顔にします。おばあちゃんにしか作れない特別なおむすびは、いつも心をこめて握ってくれています。一口食べると、おばあちゃんの温かい手が目に浮かび、まるで魔法がかかったみたいに元気が出てきます。学校から帰ってきて食べるおむすびがおいしいのは、単純におなかがいっぱいになっているだけではなく、家に帰ってきてほっとする気持ちがあるからだと思います。わたしの家族はなんでも話せるやさしい存在です。

おばあちゃんはわたしが赤ちゃんのときから一緒に話をしたり、遊んでくれたりする大切な存在です。家にはやさしい家族がいたり、学校の出来事を話したりすることが大好きです。家族みんなで食卓を囲む時間は、わたしにとって何よりも大切な宝物です。学校で嫌なことが

あったときも、家族に聞いてもらうと、少し気持ちが楽になります。

昨年の四年生の時、リレーの選手になりたくて走る練習をしていて、なかなかタイムが縮まらずあきらめかけていました。そこに友達がやってきて

「今まで練習してきたから大丈夫だよ。がんばってね。」と声をかけてくれました。結果、リレーの選手には選ばれなかったけれど、徒競走では自己新記録をだすことができました。また、持久走やとび箱の発表会で友達はみんな全力で応援をしてくれています。するとみんなも、わたしもこの応援を力にして全力を出し、演技をすることができます。

おばあちゃんの塩むすびもわたしのことを思って握ってくれているので、応援されていると感じます。わたしも友達や家族を笑顔にできるやさしい人になりたいと思いました。おばあちゃんからもらった温かさや、友達からもらった勇気を忘れずに、これから周りの人を大切にしていきたいです。

私のはだ

大相模小五年 竹澤 梅衣

私ははだの弱い人の外見についていろいろと考えたりなやむことがあります。

私の親はお父さんお母さんどちらもはだが弱くてそれが遺伝して、私もはだが弱くて少しだけアトピーのようなはだになってしまいます。

そのためか、昨年の十一月に口のまわりが赤くなりブツブツしたので病院に行って薬をもらったけど治らず、二けん目もまた治らず、病院は三けんほど行って四種類以上の薬を試してもまたまた治りませんでした。「今度も治らないだろうな」そう思いながら四けん目の病院に行ったらなんと口囲皮膚炎という、はだの病気でした。口囲皮膚炎は薬などでは治らず、日焼けによく注意しながら二ヶ月ほど待たないと治らないと言われました。このとき、私は「治るのに時間がかかるんだ。」とショックな気持ちになりました。そのときボツボツした口をまわりの人に見られるのがとてもいやだったのでマスクをしていただけ、水とうを飲んだりするときなどマスクを外すので、そういうとき外したらいやな目で通りかかっ

た人、近くにいる人にもものすごいいきおいでジロジロずつ

と見られ、「悲しい」より「怒り」の気持ちが強くて変なかんじがしました。他にも「変なかんじ」「いやな気持ち」になることがあって、毎日のように友達と遊んでいたら知り合いで六年生の子が私が高またまマスクを外していたときにその子が私のはだを見て、「えっ気持ち悪い。」とかなりひいているような目で言いました。私はたしかその子は黄だんというはだの病気があったと言っているのに、なんで私の病気を共感してくれないんだろう、そう思っすごくいやな気持ちになりました。私は日焼けも気にしないといけなくて、外に出るときぼうしをかぶるのは絶対で、日焼けしたらすぐ病状は悪化してしまいます。

なので、私は人のはだや外見のことで偏見したり、いじめるのは絶対してはいけないと思います。なぜなら、なりたくてそのようなはだや外見になってるわけじゃないし、自分がいつそういうふうになってしまうかは分からないからです。だから、私は外見で人をはんだんしたり、体の不自由な人を特別な目で見ないようにしたいと思っています。人権とは人の気持ちを守ることだと思います。

「みんなが輝ける場所」

南越谷小五年 浪井麻央

学校とは、友達をつくりその友達と学び、友情を築き、一人一人が発表し、その一人の居場所がある。そんな場所である。

だが本当にそうなのだろうか。一人ぼっちの人は居ないのだろうか。自分の居場所がない人がいるかもしれない。また発表できない人がいるかもしれない。例えば、アンケートで「今学期に自分の物をこわされたり、捨てられたりしましたか。」「いじめにあっている人は見ましたか。」などという質問が多く見られる。これは、昔、学校でこのような事があったからこその質問なのではないか。もしそうだったら、今になっても仲間はずれやいじめが絶えないということになるであろう。なら、悲しみに暮れ、不登校になる人もいいるだろう。しかし、それは自分のせいではない。そのいじめの対処をしない学校にも責任はあるのではないだろうか。なら、いじめを見た人は、それを止めれば良いのではないか。でも、立ち向かうのが怖い人がきつと多くいるだろう。それはそうだ。だって、好きで立ち向かう人なんて絶対いないと

光を探して。

西方小五年 池 見 優 花

思うし、自分だって勇気を出すのはとても難しい。勇気を出そうともしないかもしれない。だから、友達に相談してもむだかもしれない。なら、だれに言えば良いのだろう。……そうだ。先生だ！そう、先生に話せばきっとかい決してくれる。

だからみんな、先生をたよってみよう。児童がだめなら、先生に相談すればいいのだ。そう、これも工夫。はじめをへらす工夫だ。こんな風に一つ一つ考えていけば、変えられるのだ。この小さな工夫が大きな事につながっていく。小さな一歩でも、十歩あれば、きっと大きな一歩よりも強いものとなるだろう。ぼくたちは一つずつ進んで行く。いつか居場所がなくなる一人のために、理想のために、進んで行くこととなるだろう。

去年私は、総合の授業で福祉について学びました。そこで生まれつき目の不自由な人、事故や、病気などで目が見えなくなった人について色々学習しました。

目の見えない人は、暗やみの中で、音や手でふれる物をたよりに生活しなければなりません。私は点字を体験してみ、点字には消しゴムが無いから消せなくて、一番最初からやりなおさないといけないのがすごく大変でした。

また、目かくしをして白杖体験をしてみて、横に付きそいの人がいなかったら手すりがどこまであるのかも分からず、段の最後の段も分からず、すごく怖かったです。そして、白杖を上に掲げるサイン。これは目が見えない人の「SOS」のサインです。私は学校の総合の発表の時に他の子達がSOSサインのことを発表していて、初めて知りました。総合の授業を通して色々なことを学習して、たくさんのかことを学びました。

目が見えないということは、ずっと真っ暗な世界の中で生きていくということです。それはきれいなけしきや、

「将来の夢」

鷺後小五年 大橋 俊 仁

たくさんの色を感じることが出きないということで、私達があたり前に見ているさまざまな「きれい」や「すごい」など色から感じる感動を分かち合えないということです。私は考えただけで、とてもさびしく悲しい気持ちでいっぱいになりました。

また、色だけでなく、相手の表情も分からないので、声だけで相手がどう思っているのか判だんしなければなりません。表情が分からない分、耳に神経を集中して、声だけで相手の気持ちを判だんするのはとてもむずかしいと思います。

私は目が良い方ではありませんが「見える」ということをあたり前だと思わずに、見えていることに感謝して、総合で学んだたくさんのことを生かして行きたいと思いました。

目の見えない人、目の不自由な人のほんのひとつじの光になれるように、自分の出来ることはどんな小さなことでも精一杯おこなっていききたいと思いました。

ぼくの将来の夢は、医者になることです。その夢に向かって、今、勉強をがんばっています。

ぼくが医者になろうと思った理由は、二つあります。一つ目は、ぼくのおじいちゃんが病気で死んでしまったときのことです。ぼくがおじいちゃんといっしょにすごした思い出は、そんなにたくさんあるわけではありませんが、おじいちゃんは、家族のことをいつも考えてくれるやさしい人でした。ぼくにとっても家族にとっても、とても大切な人でした。そんなおじいちゃんが病気で死んでしまったとき、ぼくは

「大切な人が死んでしまった。これからは、そんな大切な人たちを、自分でも助けてあげられるようになりたい」と、思うようになりました。そして、医者になれば、人の命を助けることができる、ということを知り、医者になりたいと、強く思うようになりました。

医者になりたいと思った二つ目の理由は、「野口英世」というお医者さんを知ったからです。野口英世さんは、生まれてまもない一才半のときに、いろりに落ちてしま

一歩前へ

荻島小五年 森谷真優

い、左手に大やけどを負ってしまいました。それによって、不自由な生活をしたり、友達からかわれたり、とても苦しい少年時代をすごします。しかし、たくさんの人たちの協力で、左手の手術を受けることができ、医者や病原菌の研究者として大活やくすることになります。野口英世さんは、きつと小さいころに手に大けがをして不自由な生活をしたからこそ、人の苦しみがわかり、たくさんの人のためになることをがんばろうと思ったのではないかと思います。そんな苦しい時期を乗りこえて、医者になろうと思った野口英世さんに共感して、ぼくもよりいっそう、医者になりたいという思いが強くなりました。

医者になるために、最近は病気のことを知る本を買いました。また、理科や算数の勉強を、特にがんばっています。むずかしいと思うときもありますが、自分の夢に向かって、これからたくさんすることに挑戦してがんばっていきたいと思います。

「きつと成功できる。」そうやって自分に言い聞かせたままいつものに勉強机に手を置き、えんぴつを持つ。毎日、毎日えんぴつを持ってもう手がいたいくらい。それでもがんばれる理由はたった一つ。私には、歯医者になるという夢があるからだ。

私が五、六さいのときに虫歯になり、歯医者に行くことになった。初め歯医者に行くのがこわくてどきどきした。でも歯医者の先生はすぐに虫歯を治してくれた。その日から私は歯医者にあこがれて自ら茨の道へ進むことを決意した。もちろん並大抵の努力では叶わない、前に進めない、そんなこともう分かりきってる。だからこそ今、ここからがんばらなきゃいけない。がんばっても、がんばっても、もしかしたらこの先はもっと茨で高い高いかべにぶつかって、くだけて目からあふれ出るなみだを何度も何度も手ですくい取って「もう一回。」って言うてまた、かべにあたってくだける。それを何度もくり返す。そこまでするのはチャンスは必ず来るって信じているからだと思う。チャンスが来たら絶対につかむ。そし

将来の夢

てチャンスをきせきに変える。それで私は言う「きせきは起こるものではなく、起こすもの。」って。このことをいつか必ず証明する。

川柳小五年 市村環奈

私の将来の夢は、イラストレーターや、画家などの絵を描く仕事です。○才の時から絵を描いていて、本格的に何時間もたくさん時間をかけて描き始めたのは六才のころです。このころから絵の仕事をしたいと思い始めました。ですが、周りの人から、「○○ちゃんの方が上手だよ。」「下手。」「もっと練習したら。」と言われる時が多々あり、ストレスにもなり、絵の仕事は私には才能がないから向いていないと思ってしまいました。

そして、私の心が折れかけていた時、ある動画で、「絵は才能や生まれつきの特技なんかじゃない、努力の積みかさねで上手くなるもの。」と書いていました。それから、毎日たくさん絵を描き続け、前より上手く描けたと思えるようになり、絵へのストレスが少なくなりました。前より楽になって、それに私を認めてくれる人やほめてくれる人もいました。それで、毎日毎日描き続けると、描いた数だけ一歩進んだように思えてきました。

この経験で、絵は生まれつきの才能ではないと分かりました。それに、他にも、スポーツなども、がんばれる

ものなら全て才能ではなく努力が必要だと私は思いま
した。これから、才能も、もちろん関係しているものはあ
るかもしれないけれど、努力で成長するのを一番に大切
にし、絵だけでなく他のことも努力していきたいです。

将来の自分

川柳小五年 伊藤 心 春

私は絵をかくことが好きです。特に人物や動物などの
生き物をかくことが好きです。それらを上手にきれいに
どれだけ本物のようにかけるかいろいろな方法を使って
工夫してかいています。絵やイラストをかくことが好き
なので将来はなにかをみてかいたり設計したりする仕事
をしたいなと思っています。いろいろなもののイラスト
をかくて練習してきれいに上手にかけるようになったら、
学校の絵画展などで賞をとれるようになります。そ
の次に一般応募のイラストコンテストのようなものに参
加してみたいです。そして結果が出れば、自分がかいた
絵、イラストの苦手なところがわかります。また、自分
の自信につながることもあると思います。学校や一般応
募など、夢に向かって今の自分にできることをさがし、
ちようせんしていきたいと思います。そしていろいろな
ことで身につけた実力で美術系の大学に入り、具体的に
どのような仕事をしたいのかしっかりと考え、夢に向け
て努力していきたいです。デザイナー、設計士、画家、
イラストレーターなどいろいろとあるなかで一番自分に

合った仕事をさがしたいと思います。いろいろな人達がいるなかで絵のことを話すよりも、自分と似ている友達の方が絵について共感でき、アドバイスをしたりされたりできると思います。

私が絵やイラストをかくことが好きになったきっかけは、ある本のイラストを見て、私もこんなイラストをかきたい、そしてそのイラストを見た人が元気になるようなイラストをかきたい、と思ったからです。これからも、そのようなイラストをかくためには、どうすればできるだろうと考えていきたいと思っています。



心のかべと盲導犬とぼく

大袋北小五年 速水 暁

ぼくの家には、盲導犬だった犬がいます。引退犬飼育ボランティアをしています。お母さんが盲導犬についてきょう味があり、日本盲導犬協会のボランティアに登録していました。五年前に家に来た時、ぼくは五才だったので、盲導犬という犬がいることは知りませんでした。

盲導犬は、目の見えない人が外を歩く時、目的地まで引っぱって連れていってくれる犬だと思っていただけで、それはちがいました。目的地までの道はユーズーさんが決めて、盲導犬は、だん差や障害物をよける役わりがあると分かりました。

「みんなで考えよう！人権」のパンフレットにある「障がい者の人権」を読んで、二つの大きなかべを知りました。一つは、道路のだん差や階だんなどの建物や道具によるかべです。もう一つは、周りの人々の心のかべです。ぼくは、白じょうを持っている人が道で困っている時、声をかける勇気が出ないかもしれないと考えました。それは、声をかけた時にどんな反応をされるのかがこわいからです。これが心のかべだと思いました。この

心のかべをこわさないと、もう一つのかべのお手伝いができないことに気がつきました。

盲導犬には、二つのかべがなくて、ぼくができないお手伝いをしてすごいなと思いました。

引退犬は、その役わりが終わった老犬です。ふつうのペットと同じように、家族と楽しくのんびりくらす。そのためのボランティアをぼくたち家族はしています。家に居る時はお利口なふつうの老犬だけど、かっこいいと思います。

これからは、勇気を出して、困っている人に声をかけられる人になりたいです。小さな声だと聞こえないかもしれないので、大きな声で声をかけられるようになりたいです。



命の薬で人を元気に

蒲生南小五年 齋野 初依花

私の将来の夢は薬剤師になることです。私はたくさんのアレルギーを持っていて、小さい頃から薬を服用しています。けれど八年たった今でも治らず、症状がつかいときもあります。世の中には薬を飲んでも治らず苦しい思いをしている人がたくさんいます。ですが、結核という病気は昔「不治の病」と呼ばれるほど治りようが難しいと言われていましたが、医学の発展により開発された薬を飲むことで治すことができるようになりました。

そんな憧れの薬剤師になるために、どんなことをすればいいのか図書館で調べてみました。すると、とても難しい理科の勉強をしないといけないことや、私の苦手な算数も必要とされてくるということが分かりました。そんなことを知り、私は一度「自分にはできそうにないな」と諦めかけたこともありました。けれど、自分はまだ小学生。諦めるのにはまだ早いということに気づきました。今では前向きに考え、苦手な算数を克服するために朝早く起きて勉強したり理科の勉強を早めに予習したりと、何か夢に役立つと思うことを考えて実践しています。将

「私達の住むきれいな街」

蒲生南小五年 飯村 心 遥

来は理系の大学に進学し、今努力していることを生かし、自分のように「つらい」「苦しい」と思っている人たちを自分の薬ですくい、明るい世界をつくりていきたいと思いません。

私は、街を歩いているときに道ばたにポイ捨てされたゴミを見てとても悲しい気持ちになります。なぜなら自分の住む街はいつも清潔にきれいな街でいてほしいからです。街に住んでいる人達もきつときれいな方がうれしくうきうきした気持ちになると思います。

私は以前、ボランティアで街の清そう活動に取りくんだことがあります。そのときにたくさんゴミが見つかりました。私はそのゴミを見てそんなに道ばたにゴミを捨てる人がいるんだと知りました。とくに人から見えない所や田んぼ、しげみに捨てられていました。それはゴミを最初に捨ててあるのを見て、

「他の人が捨てているからいっか。」と捨てているのではないかと思っています。

前に、父から「ディズニールランドはゴミが一つも落ちていない。」という話を聞きました。それは、そうじゃないがゴミを捨てる人がゴミ一つなくそうじて、みんながゴミを捨てづらくなるからだそうです。確かに、ゴミを拾ってくれている人の側でゴミを捨てようとは思わ

ないのかなと思いました。

もしそれが私の街でもできたらもっときれいな街になると思います。そうするためには一人一人がポイ捨てをしないということだけでなく、ポイ捨てをためらうような街にしなければなりません。また、清そう活動の際に校長先生から、

「ゴミを拾うことは、人の命を救うことにもつながる。」という話を伺いました。だから私は学校や街に落ちている目についたゴミを拾いたいと思います。私と同じ気持ちの人達がふえれば、きっとこの街もディズニールランドのようになるのではないのでしょうか。

双子の奇跡

千間台小五年 富塚 笙

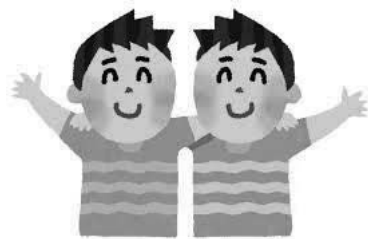
ぼくは双子です。弟は一分後に生まれました。双子は楽しいことがたくさんあります。でも、双子ならではの悩みもあります。

それは、みんなに「似ているね。」と言われるときです。ぼくたちは一卵性でお母さんのおなかに二人で一つの部屋に入っていました。性格、学力、運動神経などが似ているところもたくさんありますが、ちがうところもたくさんあります。「片方ができているから、あなたもできるでしょ。」と言われることがあります。でも、そうではありません。いくら双子で顔が似ていてもまったく同じではないことを知ってほしいと思います。

双子でよかったこともたくさんあります。毎日、友達と一緒に居るようにゲームや外遊びをしたり、家で勉強が分らないときに教えあったりする事ができます。そういう時は、双子でよかったと思えるしゅん間です。

ぼくたちが生まれたとき、家族は、「びっくりした。」「うれしかった。」と話してくれました。けんかもたくさんしますが、大事な大事な双子の弟がいることは、ぼく

にとって奇跡です。



しょう来のゆめ

蒲生小五年 松本采子

わたしのしょう来のゆめは、医者になることです。なぜ医者になりたいのかというと、わたしにはわすれられない出来事があるからです。

それは、おじいちゃんが病気になってしまった時のことでした。おじいちゃんは「がん」という病気にかかってしまい、体がとてもつらそうでした。ご飯もあまり食べられず、毎日苦しそうにしていました。

そんな時、医者さんがおじいちゃんをしん察しているすがたを見ました。お医者さんはおじいちゃんの病気をくわしく調べて、薬を出したり、やさしく声をかけたりしていました。お医者さんの、治りようのおかげで、おじいちゃんの顔に笑顔がもどっていくのを見て、「わたしもいつか、医者になって、病気で苦しんでいる人を助けたい」と強く思うようになりました。

お医者さんになるためには、大学の医学部というとてもむずかしい学校に入らなければなりません。医学部に合格するには、小学校、中学校、高校と、ずっと良い成績を取らないといけないと聞きました。特に、算数と理

科が大切だそうです。今はまだ小学五年生ですが、毎日学校の授業をしっかり聞いて、宿題もきちんとやって、テストで良い点が取れるように、一生けん命勉強をがんばりたいと思っています。

そして、もし医学部に入ることができて、お医者さんになれたら、わたしは特に「子どもの病気を治すお医者さん」になりたいです。小さな子どもたちが病気でつらい思いをしているのを見るのは、本当に悲しいです。わたしもこれまで何度か熱を出したり、おなかがいなくなったりしたことがあります。病気の時はとても心細く、さびしい気持ちになります。だからこそ、子どもたちが安心して治りようを受けられるように、やさしく接することのできるお医者さんになりたいです。

病氣の子どもたちとその家族を、笑顔にできるお医者さんになるのがわたしの目標です。そのためには、これからたくさんのお話を学ばなければならぬけれど、おじいちゃんを助けてくれたお医者さんのように、わたしもだれかの役に立てる人間になりたいと強く思っています。大変なこともあると思いますが、このゆめに向かって、これからも毎日努力を続けていきたいです。

しょうがい者にやさしくしよう

荻島小五年 久野 絆 夏

私は、お店ごはんを食べおわり、いとこたちと楽しく歩いた。その後、家へ帰っていると、うしろからふしぎな声が聞こえてきた。

「何だろう」

と思い、うしろをふりかえってみると、リュックサックを背負ってふにゃふにゃ歩いているおじさんがいた。いとこたちみんなで心配しながら、ふたたび歩き始めた。その時、その人がとっぜん私たちを追いかけるかのように走り出してきた。正直、こわかった。

「不審者かな」

と思いあわてて逃げた。少しすると、いとこがリュックサックにヘルプマークのキーホルダーがついていることに気がついた。

「もしかしたら私たちに助けを求めているかも知れない。」そう思ったが、なかなか勇気を出せず、そのまま家に帰ってしまった。そのような出来事があってから、ずっと私は後悔している。あの時、勇気を出して、声をかければあの人を助けてあげられたかもしれない。何か力に

私のおじいちゃん

大袋北小五年 坂本 晴香

なれたかもしれないと思うからだ。あの時の事、後悔してしまったことを成こうへとつなげていきたいと心から思っている。そのために大切なことは、しょうがいがあるからってさべつをしたり、

「変だよ」

ときめつけたりしないでその人のよさを見つけてあげることが大切だと思う。また、こわがったり、にげたりするのはちがうと思う。一人一人がこのように意識することで世の中はもっともっと平和になると思う。優しい人であふれると思う。次、しょうがい者を見つけたら勇気を出して声をかけてみよう。

「次はぜったい助けるぞ!」

私のおじいちゃんには、障がいがあります。それは、足が動かない事です。おじいちゃんは毎日車いすを使って生活しています。

生活をしている中でおじいちゃんが大変そうにしている事がたくさんあります。例えば、おふろに入ることや、ねる時にベッドに移ること、料理をすることなどです。

そんなおじいちゃんのために、私のお父さんは、いろいろなサポートをしています。例えば坂道で車いすをおしたり、高い所にある物を取ってあげたりしています。

料理を作り、皿洗いやかたづけもしています。また、外にでかける時は、階段はつかえないので、エレベーターがある場所を選んだり、電車に乗る時には駅員さんにスロープをかけてもらったりしています。おじいちゃんと歩いていると、世の中にはさまざまな障がいをもっている人がいて、それぞれにこまったことがあるのだと感じます。

エレベーターや、バリアフリートイレがもっと増えたり、小さな段差がなくなったり、街の中に誰もが便利に

過ごせる工夫があると、おじいちゃんはお出かけが楽しくなるのと思います。

しかし、おじいちゃんにもできることがあります。それは、ゆかのそうじをしたり、おふろの準備をしたりすることです。ゆかのそうじをするときには、柄の長いフロリングモップを使っています。おふろの準備は、ボタン一つでお湯を張ることができるので、便利になったそうです。

買い物をすることもできます。買い物をするときには、手が届くところの商品を取っています。必要なものがたなの上の方にあるときには、周りの人や店員さんにお願いをしています。

ところが、そういうときに限ってお願いをできる人がいないと、おじいちゃんは困ってしまいます。親切な人がいてくれると、安心して出かけることができます。

私が今できることは何かについて考えてみました。それは、おじいちゃんと話をして、楽しませることです。困っている人がいたら、自分から進んで声をかけて、お手伝いができる人になりたいです。

弟とけんか

大袋北小五年 北原 一 蔵

ぼくは、弟とけんかをしたことがたくさんあります。小さいころは、別に何も考えずに弟とけんかをしていましたが、最近は弟も二年生になり、けんかをするのは少なくなりました。しかし、たまにけんかをするときってきたり、なぐってきたりします。今までは、何も思っていないんですけど、今、考えてみるとそれは、とてもだめなことだと思います。

ぼくも二、三年生の時にイライラすると物に当たって、お母さんに、

「物に当たってはいけないよ。」

と言われたのを今でも覚えています。なので、物に当たっている弟を見ると、昔の自分みたいだと思っています。

弟は二年生になっていろいろな言葉を覚え始めています。「バカ」「アホ」などの悪い言葉も覚えていて、それはしかたがないことだと思いますが、それを他人に言うのはよくないと思います。弟が悪い言葉を言ったり、使ったりしたらできるだけ、弟に

「だめだよ。」

と伝えていきます。その結果、最近は言わなくなってきています。ぼくは弟が言わなくなって本当に良かったなと思います。

そんな中、また弟とけんかをしてしまいました。その時、弟は悪口を言ってきました。ぼくはイライラしてけつたり、なぐったりしてしまいました。そのことを考えると、弟にもうしわけないことをしたなと思っています。人にはいろいろな権利があります。たとえば、子どもの人権、外国人の人権など他にもたくさんありますが、ぼくは人を傷つける権利は絶対がない、あってはならない権利だと思います。今、世界では戦争が起きてしまっています。それは、相手を傷つけるということなので、してはいけないと思います。たとえ、小さなけんかでも同じです。どんなに小さなけんかでも、人を傷つけてしまう時があるので、ぼくはこれからできるだけ人を傷つけないようにしたいです。相手の権利をぼう害することになるのでしたくないです。それがだれであっても。

今がんばっていること

平方小五年 岩崎 七望

わたしは、今がんばっているのが二つあります。一つ目は、勉強です。

わたしは、勉強がすごくにがてでくもんを習い始めました。最初は、くり上がりの計算などに苦戦していましたが半年もたらずになれていき、いまでは、算数と英語をやっています。英語は、算数よりにながてでいまでも苦戦していますが、たくさん練習して海外でたくさん英語を使いたいです。今後もしっかり勉強をがんばります。

二つ目は、ダンスです。昔からおどるのが大好きでダンスを習いはじめました。自分の想像よりも楽しくてそれからたくさん練習しました。その時は、KPOPを習っていて、三年生のときにHIPHOPもならいはじめました。それから今は、自分のレベルをもっとあげるために、今年KPOPをやめHIPHOPに集中しました。いまでは、ダンスの人たちがみんなうまいけど自分もあきらめずにがんばっています。

これからも、たくさん勉強とダンスをがんばりたいと思います。

ゆめに向かって

平方小五年 里村 紗 愛

私は、しょう来バスケット選手になりたいというゆめを持っています。そのため私は今バスケの練習をしんけんに取りこんでいます。一つ目はふつうの練習です。バスケの練習は木、金、土、日曜日、祝日にあります。体調不良の日以外はかかさず練習に参加しています。しっかりと練習に取りこんで、コーチの話を良く聞いて、毎週上達できるように努力しています。二つ目は練習以外の自主練習です。私は家にバスケットゴールがあります。なので家でシュートを打って練習したり家の前の道路でドリブルの練習をしたり、家族に手伝ってもらいパスを練習したりと、バスケのき本を練習したり、バスケで大切な体かんをきたえたり、パスが飛ぶようになるようにうでの力をきたえたりと、き本以外のことも練習しています。このようなことをする理由はしょう来バスケット選手になるということもありますが、試合などの遠い場所につれていってくれる家族や妹のめんどうをみてくれていたりするおばあちゃんたちに、しょう来ゆめをつかんでかんしゃを伝えたいということもあります。私はい

ろんな思いを大切にこれからもバスケと真けんむきあつて、がんばっていききたいです。



しょうがいのある人と未来

鷺後小五年 中 家 玲美奈

わたしは目の不自由な人や体の不自由な人のつらさや大変さを知っています。しょうがいをもっていている人は、いろいろなきょうふがたくさんあるのです。

四年生のころ、わたしは白杖と車いすを体験したことがあります。この間わたしより少し大きいくらいの子が白杖を持ってお母さんと歩いていました。その時見ていたわたしはなにか手伝えることはないかなと思いました。なぜなら、わたしが体験したときはペアの子がしっかりゆうどうしてくれているのにとってもこわくて不安だったからです。それを毎日当たり前のようになっている大人や、子どもはともかっこよくてすてきだなと思います。けれど、みんなと少しちかくてもきつとその方なりに一生けん命がんばっています。だからしょうがい者差別などは絶対にだめだなとあらためて思いました。また、目の不自由な方のための点字ブロックなどに荷物を置いたり、道をふさぐなどそのようなことは何があってもしないようにします。

また、わたしは車いすも体験したことがあります。車

いすには足や、体の不自由な人がのっています。また、それには小さい子どもからおじいちゃん、おばあちゃんまでののっています。そして、わたしが体験してペアの子がおしてくれていると、ほんの少しのなん差でもたおれないかなととてもドキドキする気持ちと、不安な気持ちでいっぱいでした。この気持ちを体験してからわたしは、毎日車いすのって生活している人が安心安全にすごせるように、自分で一歩ふみ出して何か手伝ってあげたりなん差があることを教えてあげたりしたいです。

しょうがい者の方はその方しか分からない大変な思いや、こわさがあります。その気持ちを少しでも理解してあげようとする心も大切とわたしは思います。また、街には色々なしょうがい者が安心安全ですごせるような工夫がたくさんあります。だから、それがなぜあるのかを考えてみてほしいと思います。そして、このようなことからわたしは、しょう来差別などがなくなるよう願っています。これからわたしは車いすの方や目の不自由な方を見つけたら、ゆう先的に道を通らせてあげたりするよう心がけていきます。

ぼ金の大切さ

千間台小五年 星野 由 羽

私が、大切だと思ったのは、ぼ金です。

よくお店、市役所などの建物にあります。そしてぼ金は、とても大切で、世の中に絶対必要だと思います。世界には、お金、食料がなく、こまっている人たちがたくさんいることをテレビ、ぼ金箱にはってあるはり紙で、私は知りました。最初は、自分のお金もったいないからあんまりぼ金はしたくないと思っていました。でも、後々考えると一円、五円、十円、でもいいからほんの少しぼ金はした方がいいと分かりました。その理由はもし、こまっている人、たすけを求めている人が自分だったら、みんなにぼ金してほしいな、悲しいな、となってしまうと思い、ぼ金するようになりました。あげるお金が少なくても、コンビニやスーパーで見るかぎり、たくさんのお金がありました。日本ってやさしいなと思いました。そして他にも、地しん、火さいなどのさい害でも、ぼ金してそのお金で、水を買ったりこまっている人たちのために日用品をとどけていました。さらに私が、すごいなと思ったのは、有名人なんかは、何千万円、何億円も

きふしたニュースをみて、すごいなと思いました。だから、これからもぼ金を続けてこまっている人が少しでもへればいいなと思いました。

わたしとあいぼうの夢

花田小五年 平下 絢 萌

わたしは、ピアノがあいぼうでしよう来はピアノの調りつしになりたくて、今、努力しています。けど、つらくてやめたい気持ちにもなります。でも、そんなわたしをささえてくれるのはあいぼうのピアノです。ピアノはけんばんをおすと音のなる楽器だけど、その音はわたしは声だと思っています。なぜかというと、ピアノで同じ音をひいたとしてもひき方で変わります。たとえばやさしくひいたりこわくひいたり、強くひいたり、弱くひいたり数え切れないくらいあります。わたしは、この音色がこの夢をささえてくれています。でも、この夢はがんばって努力したとしても耳もよくなければできないものなのです。なので今は耳もきたえています。たとえば、ピアノを使ってやっています。やり方はお母さんがピアノのどれかの音をひき、わたしがその音をあてるというルールです。最初はむずかしくて大変だったけど、どんどん毎日やっていくうちになれてきて、最きんは全音あてることができてともうれしかったです。でも勉強も大事でこれからはもう少し勉強やピアノの練習をふ

やしていきたいし、もっともっと努力をしてわたしは、しよう来の自分に向かってがんばって調りつしになりたいです。今もお母さんやお父さん、弟、友達などみんなからもおうえんをもらってこの夢をめざそうと思えるのでとてもうれしいです。わたしはみんなのきたいに応えるために、もっと努力しようと思いました。

家族のかたちはいっぱいある！

城ノ上小五年 齋藤 朱里

私は、家族の形は愛情があればかんけいがないと思います。理由は、お母さんがいなくても、お父さんがいなくても、両親がいなくて祖父母に育ててもらっていても、親せきに育ててもらっても、しせつで育ててもらっても、両親に育ててもらってる子と何も変わらないし、同じ「家族」だと思います。

私が思う家族というのは、愛情を注いでもらって、支えてもらってれば、どんな形でも家族になれると思うからです。

これをふまえて、お母さん、お父さんがいないから、びんぼうだから、といっていじめている人にききたいことがあります。「どうしていじめているのか。」です。きっと「お父さん、お母さんがいないから。」とか、「びんぼうだから。」とか、しょうもないことで、いじめている人が大半でしょう。ただ、家庭かんきょうがちがうから、という理由だけで、何にも悪いことはしていないのに本当にはずかしいと思います。お父さん、お母さんがいなかったって、びんぼうだって、愛情をもらってれば、お

金もちだっかんけいなく、絶対にいい家族です。いじめてもだれもうれしくないし、だれもとくをしません。それより、みんな仲よくして、遊んでいたほうが何十倍も何百倍も何千倍も、とくをして、みんな楽しいです。だから、どうか家族のことでいじめるのをやめてください。

家庭で支えてもらって、愛情を注がれていれば、しあわせな家庭です。たしかに、ゲームがかえなかったりすると、びんぼうだとなります。でもそのかわりに愛情はもらえるはずです。「愛情」これが今後の財産になります。だから、親に感しゃしましょう。父の日、母の日の時などに、苦つうを感じます。父、母がいらない人も、自分のことをみてる人が一人でもいることに感しゃしましょう。家族の形は、人それぞれだから大丈夫ですよ。

限りある命を大切に

優秀作品

弥栄小六年 坂庭 好 桜

私は、今年の一月に命についてとても考えさせられた出来事があった。それは、同じ習い事をしているチームメイトのお母さんが、亡くなったことだ。その子のお母さんは、練習試合や大会などに来てくれて、たくさん応援してくれていつも明るくとてもやさしくしてくれたお母さんだった。私は、その子のお母さんがガンでとう病しているとは知らなかった。なぜなら、その子もお母さんもうも笑顔でいたし、お母さんがしばらくこなかったときもいつも通りふざけ合っていたからだ。

そして今年の一月、亡くなったことを知りチームメイトのみんなと、母と妹で最後のお別れをしにいった。会場に着くと、みんなが泣いていた。だけど、その子とその子の弟はなみだを見せなかった。そして、お世話になったお母さんの顔を最後に見た。とても、体が小さくなっていたけど、とてもきれいだった。私は、席にすわり、かざられてある写真を見て現実だと思わなかった。とても辛くて本当に悲しかった。けどその子の前では、泣かないと決めた。なぜなら、いつも通りの自分であること

がその子のためになるかもしれないと思ったからだ。

それから一週間後、その子はいつも通りに元気に、練習に来了。私もいつも通りに接した。笑顔がみれて、本当に安心した。

今回の出来事で、とても大切なことをたくさん学んだ。私たちが一番大切なことは、生きることだ。辛いことやいやなことだってたくさんある。だけど必死に生きて自分だけの命を大切にしてほしい。

「私の家族」

蒲生小六年 國 安 麗 永

家族とは何なのか。どういう存在なのだろうか。そう考えたことはあるだろうか。人それぞれ考えはちがうと思う。絶対になくってはならない存在。なんでも相談できる存在。いっしょに笑い合える存在。ずっといっしょにいたくなる、そんな存在。私の心には、たくさんの考えが次々と浮かぶ。すぐには答えがでてこない。だって私の中では、家族という存在が大きすぎるからだ。

私は、幼い頃に両親の離婚を経験している。だからこそ、家族というものの存在がどれだけ大切かがよくわかる。

私が小学二年生になろうとしていた時期。私は母に、話があるからと呼び出された。少しドキドキした。楽しい話だと思っていた。家を引っ越すとか、また新しい兄弟ができるとか。いよいよ報告のときだ。私はとにかくドキドキした。そんな中、母から出た言葉におどろきをおくせず思わず言葉を失った。「今から大切なお話をします。最後まで聞いてね。これからパパとあなたたちは離れて暮らしていくことになりました。だからあなたた

ちはパパとちがう遠いところにお引っ越しするようになりました。」

私の目からポロポロと涙があふれ出た。ふいてもふいても止まらなかった。私はそのとき、初めて深い悲しみというものを体験した。その後、私はトイレにこもり、二時間ほど泣いていた。母が「出ておいで。」と言っても出たくなかった。それほど悲しかった。何とか自分の気もちを幼いなりに整理し、トイレを出てすぐに母のところに駆け寄った。母が抱きしめて「ごめんね。」と口にした。とても重い一言だった。その後、父とはあまりそういう会話もせず、今までどおりの生活を送った。いよいよ引っ越しのときだ。何をしたらとか誰がこう言ったとか、そのときの記憶は定かではないがすごく悲しく寂しかったことだけは鮮明に覚えている。引っ越しが終わる二、三か月たった頃から少しずつ母の仕事の帰りが遅くなっていた生まれて初めてのお留守番。とにかく怖かった。だから自分でできることを見つけてした。たまった洗たく物をたたんでみたり、洗い物をしたり、できるだけ母が帰ってくるまで起きてみたり、とにかく自分ができることだった。

家族という一つの大きな存在。私は、両親の離婚を機に、一人の家族がどれだけ大きな存在なのかを再確認す

男女関係なく生きるために

平方小六年 尾崎 茉 優

ることができた。母の今までの努力や苦勞にも気がつきた。悲しいこともあったが、その分他に大きな物を得られたような気がする。まだまだ私が大人になるまでも、なっってからもきつとたくさんの迷わくをかけてしまうと思う。しかしいつかそれをこえられるような母親への恩返しをしたいと思っている。家族とは何なのか。もちろん人によってちがうが同じところだってきつとある。これからも感謝の気持ちを忘れず家族というすばらしいものを大切にしていきたい。

私は、「男女平等」という言葉を聞いたことがあります。「男女平等」とは、性別に関わらず、平等に責任や権利、機会を分かち合い、あらゆることを、一緒に決めていくことを意味します。最近、よく耳にする「男女平等」という言葉ですが、まだまだ、平等になっているとは思えません。なぜ、「男だから」「女だから」という考えがあるのでしょうか。それは、「これでふつうだ。」という考えが今でも変わらず残っているからだと思います。私は、「本当にこれで平等なのか。」と思ったことがあります。

現代は、好きなものや、好きな色に対して、「何が好きでもいい。」と思っている人が、昔に比べて増えてきました。しかし、「男の子はこうだ。」とか、「女の子はこうするべき。」という、固定概念を持っていたり、「男性らしさ」「女性らしさ」を求めたりする人がいます。私自身は女性らしさを求められたことはありませんが、知り合いにこんな男の子がいました。学校の持ち物の色がピンクがいいと言ったところ、周りの人に「本当にそ

れでいいの？」と聞かれたそうです。私は、「自分らしくていいのでは。」と思います。私は、「自分らしさ」とは「自分はこれが好き。」と堂々と言えて、ありのままの自分でいられることだと思います。だから私は、好きなものや好きな色が何であってでもいいと思います。そのためには、お互いに尊重し、認め合うことが大切だと思います。

仕事でも、「男女平等」について疑問があります。最近では、女性の消防士や警察官もいるし、男性の保育士や看護師もたくさんいます。この方たちは珍しいのでしょうか。「女性だから、男性だから。」というイメージだけで、仕事や役割を決め付けられ、「男女差別」が生まれてしまいます。しかし、「差別」ではなく、「区別」をするべきだと考えます。例えば、重い荷物を何回も運ぶ仕事があるとき、「男女平等」の視点で考えると、女性も男性もまったく同じ仕事をするようになります。「平等」だからといって、それをするのは大変なことだと思いません。「平等」であるかもしれないけれど、「公平」ではありません。なぜなら、男性と女性では、体つきが違うからです。体力テストの目標値が、男子と女子で違うのもこれが理由です。男性は、「女性だけずるい。」と思うかもしれません。しかし、男性と女性とは別です。男性と女

性では性別が違うので、様々な違いが出ることは当然な事です。お互いの得意なことや、苦手なことを理解し、みんなが働きやすいように配慮する必要があります。

では、いつ男女を差別するような考えを持つようになるのでしょうか。私は友達が、「男の子は泣かない。」と言われているところを見たことがあります。「どうして男の子だからって泣いたらだめなんだろう。」と疑問に思いました。私は、このようなとき、「男だから、女だから。」という男女を差別する考えをもつようになると思いました。つらいことがあっても、「男の子は泣いたらだめなんだ。」と思い、たくさんがまんすることになるかもしれません。自分の思いを表現することができなくなり、「自分らしさ」がなくなってしまうかもしれません。

「男女平等」がこんなにも話題になっているのに、未だに平等になっていないのは、「男女平等」は難しく限界があるからだと思います。これからは、性別関係なく、みんなが幸せに生きていくために「男女公平」を目指すいいと思います。また、性別だけでなく、その人に適した配慮も必要です。そうすると、みんなが明るく幸せな人生を送ることができると思います。男、女ではなく、「自分」を理解する人が増えていけば、「自分らしさ」を

大切に、生きられると思います。私は、「自分らしさ」を認められる人になります。

『いつも通りの生活』に感謝

大間野小六年 早川 まい

私の家では、いつも料理、洗濯、買い物、そうじなどの『家事』は全て母が一人でやってくれています。そのありがたさに気づいたのは、私が高学年になってからのある出来事です。

その時も母が『家事』をしてくれる『いつも通りの生活』をしていました。でも、母が目の病気にかかり入院をすることになってしまったのです。母が一人でやってくれていた『家事』は父と姉と私の三人で分担して頑張ろうと言っていたのですが、実際にやってみると、分担してもすごく大変でした。ご飯は最初の二日間くらいは母の作り置きものを食べたりして、それ以降は祖母が作ってくれた料理を食べたり、自分達でやったりしました。私は米を毎日炊く担当と、洗濯機を回す担当をしていました。一番大変だったのは洗濯物を干すことです。

三人分を三人で干してもすごく大変だったのに、いつも四人分を一人で干してくれている母にはすごいな、ありがたいなと思いました。それに、時々祖母が来てくれて料理の他に洗濯やアイロンがけ、そうじなどの私たちが

ら生活していこうと思います。

手に負えないこともやってくれたりしました。毎日、毎日自分のことは全て自分でやっているためんどくさくなくて何もかもがいやになる時もたびたびあったけれど母は文句一つ言わずに自分の分だけでなく家族全員の分もどんな時も一人でやってくれてたんだと思うと頑張っていることができました。毎日続けていくうちに時々忘れることもあるけれど、少しずつその私のやる『家事』が私のルーティーンの一部になっていく感じがありました。母とのメールで分からないことを聞いたり手紙の写真を送ったりするやり取りがたまっていくとさみしくなるときもありました。でも、祖母に手伝ってもらったり、父と姉と三人で分担して『家事』を協力していくうちに一週間ほど経ってとうとう母が退院して帰ってくるようになったときすごくうれしかったのを今でも覚えています。

『母の入院』という大きな出来事がきっかけで母の大変さと母のありがたさなどを知ることができました。これからは、母に負担をかけないように『家事』を手伝ったりしたいです。そして、『いつも通りの生活』というものは決して当たり前のことではなく、永遠に続くことでもないから母と、家族と一緒にいれるその一日、一日を大切に『いつも通りの生活』というものに感謝しながら

得意なこと苦手なこと

千間台小六年 高橋 ひかり

わたしは、小さいころから運動が苦手です。生まれたときにとても小さかったので病院に入院していたり、何年も薬を飲んでいたりしました。足首が固くて動かしにくくてリハビリもしました。幼稚園生になるころには薬を飲まなくてもよくなりリハビリも卒業できました。他の子と同じように遊んだり勉強もできるようになりました。

小学生になって体育やスポーツをすることが苦手だと感じるようになりました。あまり速く走れなかったりボールを遠くになげられなかったり鉄ぼうでは逆上がりもなかなかできるようになりませんでした。

三年生の運動会の練習のときに同じクラスの男の子に「高橋さん全然できてない。」とみんなの前で大きな声で言われたときとてもはざかしい気持ちになりました。みんなと同じようにできるようにちゃんと練習もしているし、家に帰ってから練習しました。その日からその男の子はわたしがちゃんとできているかずっと見てくるようになりました。できていないと、いらいらしたように

おこってまたみんなの前で大きな声で「なんでできないんだよ。」と言われました。わたしははずかしい気持ちと悲しい気持ちで泣くのを必死にこらえました。わたしはどんどん体育の授業も運動会の練習もいやになってしまいました。一生けんめい練習しているのにどうしてもはやく走れなかったりまちがえたりしてしまいます。その男の子は走るのも速くてスポーツが得意な子だったのでわたしは同じように練習してもその子と同じようにはできませんでした。いつも体育のときは泣くのをがまんしていました。あるとき、わたしがまた男の子にいいわるを言われて泣くのをがまんしていたとき、同じクラスの子が「高橋さんがかわいそうだよ。」と同じくらい大きな声で言ってくれました。すると他の子たちも「そうだよ。」「高橋さん一生けんめいやってるよ。」と言ってくれました。そのときわたしは、一生けんめいやっていることを他の子たちが気づいていてくれていたことが分かってうれしかったです。それからはその男の子はわたしができないことにいじわるを言わなくなりました。運動会の練習も進みクラスみんなのおかげで本番も上手にできました。

わたしは運動は苦手ですが、本を読むのが得意です。姉は本を読むのは得意ではないけど絵をかくのがとても

「同じ一つの命」

蒲生小六年 藤原知 佑

上手です。みんなそれぞれ得意なことも苦手なこともあります。なんでもできる人は少ないと思います。できないからといっていじめられたり仲間はずれにされたりする人の気持ちかわたしには分かります。足の速い子と同じようには走れないけどそれはサボっているわけではないしいいかけんにやっているわけではないのです。わたしはあのとときクラスの子たちが高橋さんは一生けんめいやっていると言ってくれたことを今でもわすれません。もしもわたしと同じようにこまっている人がいたらあのとときの友だちのように声をかけてあげたいです。言葉は相手をきずつけてしまったります。わたしはこの経験をしてみんなにはそれぞれ個性があるどんな人も一人ひとりが生まれたときからもっている自分らしく生きる権利をもっていることを学びました。みんなが自分らしく生きていける世の中になってほしいと思います。

ぼくは、一匹の保護ネコを飼っています。

もともとネコが好きだったので飼えて、うれしいです。なぜ保護ネコを飼ったのかというと、ペットショップで値段をつけられて売られているのがいやだからです。命なのにそれが売られていることがおかしく感じます。

ぼくはネコのアレルギーを少し持っているけど毎日薬を飲んでいます。

保護ネコと言っても、譲渡されていないネコはたくさんいます。その理由は、高齢者やアレルギーの人、子どもがいる家など、応募条件がきびしいせいで、飼いたくても、飼えない人たちがたくさんいます。

ネコの殺処分は年間一万匹と、とても多いです。それをひきとって、人なれさせて、譲渡する保護団体というものがあります。保護団体とは、多頭飼育崩壊が起きた家などから、ネコを引き取って、避妊去勢手術をしたりする団体のことです。

避妊去勢手術とは、ネコが子どもを産まないようにする、手術です。

ネコがかわいそうと、思う人もいるかもしれませんが。だからといって、放置しているとんでもないことが起きます。ネコの繁殖のスピードは、八カ月で子どもが産めます。そして一匹だけではないです。最低でも四匹は産みます。三年で二千匹以上に増えます。それでもまだかわいそうと思いますか。

ネコをけったり、なぐったり、毒エサをまく、虐待をしている人たちもいます。ぼくは正直、意味がわかりません。どうして、けったりなぐったりするのでしょいか、きらいだとしても、何もしなければおそいません。ましてや毒エサなど、命をうばうことを、動物だからと、軽く見すぎていると思います。人もネコも犬も、みんな一つの同じ命です。それなのに、そのような行動をする人間がいるのがおどろきでしかない。なぐられたりされたから人間への警戒心が強くなり、慣れるのに時間がかかり、その間にネコが増えて減らないのくり返しになる。それを少しでも抑えるために、動物愛護団体が作られた。主に虐待の可能性がある、付近の家にチラシを入れたりネコを受け入れたりすることをしているそう。自分のしょうらいの夢は決まっていらないけど保護関連に関われたらいいなと考えている。ぼくがこの作文を通して、社会にうったえたいことは、命の差はないということだ。

ネコも犬も動物も全ては同じ命。野良ネコ、犬がいなくなるようにしてほしい。ネコがいたい思いやいやな思いをされるなら、ネコが野良でいい社会を作ればいいと思う。しかし、そのままでは当然いけない。少しでも減らすために、耳をカットされていないネコがいたら、保護団体に連絡してほしい。見て見ぬふりをしないでほしい。寄付などがあれば一円だけでも入れば、人と生き物が共存できる、いい社会に近づけるかもしれない。



体の不自由な人のためにできること

平方小六年 山口 瑚々那

私たちが暮らす世界には、「耳の聞こえない人」、「目が見えない人」、「手足が動かない人」など、様々な人がいます。その人たちのために私たち健常者にできることは何か、考えてみました。

私は、四年生のときに総合的な学習の時間で、「手話」について勉強しました。手話とは、耳や口の不自由な人が、手を用いて気持ちを表現する会話の手段のことをいいます。授業の中で、手話がなぜあるのかについて先生が話しているときに、耳や口の不自由な人のために、私にとってできることもかもしれないと感じました。少し練習を重ねると、「こんにちは」や「ありがとう」などの簡単なあいさつを表現できるようになりました。自分の名前を伝えることもできるようになりました。

手話が少しできるようになった私は、さらに知りたいと思い、図書室の本や持っているタブレットを使って調べました。調べていくほど、その難しさを実感し、同時に手話によって生活が支えられている人がたくさんいて、その大切さを学ぶことができました。

手話を学ぶ中で、目の不自由な人のために自分ができることは何だろうと、ふと考えるときがありました。道路や町の中で長い杖を持った目の不自由な人を見かけたことを思い出します。「迷っているのかな」「何て声をかければいいだろう」と思ったことがあります。そのときは思うだけで、行動に移すことができませんでした。しかし、これからは勇気をもって優しく声をかけられるような人になりたいと思います。

私たちの周囲には、健常者だけでなく、目や耳など、体に不自由な部位がある方がたくさんいます。そのような人たちのために、手話を覚えたり、優しく声をかけをしたりすることが、誰もが楽しく安全に生活できることにつながると考えます。そのような人を少しでも増やすために、その一人として、私は体に不自由がある人の助けができる人になりたいです。

差別のない平和な世界

平方小六年 宮嶋 心和

「差別のない平和な世界」私はこの言葉の実現を目指しています。でも、実際には難しいのかもしれない。やっではないけななと分かつていても、差別はついでこつてしまふ。なぜ、目の色や髪の色の違い文化の違いで差別するの。障がいの有無や性別の違いで差別が起るの。なぜなら人間は強いようで弱いからです。私は、社会の時間に戦争の話を聞いて、『それは差別じゃないの』と思いました。

まず、戦争では、目の色や文化の違いを差別する、人類差別があると思ひました。白い肌はえらいと思ひこんでいることで差別が生まれ、肌に色がある人は迫害され、暴力などの被害を受けています。さらには同じ国に住んでいても、思想の違いや宗教、文化の違いで戦争が起っています。どうして同じ国に生まれた仲間なのに、差別するのでしょうか。私は、別に目の色や髪の色が違つても、その人の個性だと思ひました。

さらに、戦争では男女差別もあるのではないかと感じました。戦争で男の人は戦に行きます。女性は工場で

働きます。男の人の、何人、何百人、何千人もの命が亡くなりまふ。戦争中、悲惨な性暴力の被害を受けるのは、女性が多いです。加害者の兵士は罪にならないにも関わらず、被害者の女性が社会から汚名を着せられることもありまふ。私は、そのようなことに、『どうしてだろう』と悲しい思ひをしまふ。理由は、男性の人が、たくさん亡くなり、女性の人は、その報告を聞いたら、とても悲しい気持ちで工場で働くことになるからです。

今、日本で戦争がないけれど、色々なことで他人をバカにしたり、差別したりしていると思ひます。その差別があるのとないのでは、大きな差があります。差別がある世界と、差別がない世界ではどちらが気持ちよく過ごせるのだろうか。差別がある方は、仲間はづれやいじめがあります。私はどうして仲間はづれやいじめが起るのか不思議に思ひました。どうしていじめが起るのか、どうして仲間はづれが起るのかずつと考へていました。差別がない世界は、文化や見た目の違いがあつても、皆と仲良く遊べたり、話したりすることができました。

それなのに、なぜ差別が起きまふのでしょうか。それは、やはり人間は強いようで弱いからだと思ひます。自分との違いを認める強さや優しさが足りないから、自分と違うものを攻撃してしまふ。自分がマイノリティに

なることへの恐怖があったりするので、差別がいけない
と思っけても、みんなが差別をしていると自分も差別
してしまふ。自分の思いを貫くと、自分が今度は傷つく
かもしれないという弱さがあるから、差別はなくならな
いと思ひます。

「差別のない平和な世界」この言葉を実現するために
は、みんなが互いを理解し、協力し合える世界にする必
要があります。色々な所でケンカがあるかもしれない。
それでも、差別せず、誰かをいじめなければ「差別のな
い平和な世界」の実現ができると思ひます。それは難し
い事かもしれないけど、一人一人がこの言葉を大切にす
れば、少しずつ近づけると思ひます。私は大人になつて
も忘れないようにし、家族や仲の良い友達だけでなく、
自分と何か違うものを持っている人も大切にできる人間
になりたいです。そのためには、たくさんの努力の積み
重ねが必要です。日本には戦争がありません。平和な国
で生きている私たちだからこそ、世界のためにできるこ
とは何でしょうか。一人一人が考え、行動することで、
「差別のない平和な世界」を実現することができます。

夢をもっていることに自信をもつて

宮本小六年 西城 夏々美

私のしょう来の夢は女優さんです。私は女優さんの演
技が大好きです。私が女優になりたいと思つたきっかけ
は、テレビドラマが小さいころから大好きでずっと見て
いたことがきっかけです。おこつた演技、なみだを流す
演技、幸せそうな演技、私がどんなにがんばってもでき
ない演技をできる女優さんはすてきだと思いますし
た。

もうひとつの理由は一年生の時の友達との事です。学
校以外でもよく遊んでいたとても仲のいい友達でした。
でも、急に遠い所に引っこしてしまいました。今、その
子がどこで何をしているのかも分かりません。でも、も
し私が女優さんになってテレビにでられたら、その友達
にとどくかもしれない、そんな理由で女優になりたいと
思つたのがもうひとつの理由です。

私はまだ、しょう来の夢をお父さんに話せていません。
お父さんは最近、毎日夜おそくまで家族のために働いて
くれています。それだけでなく、小学一年生の時から男
手一つで家事も育児もしてくれました。なので、いつも

つかれた顔をして帰ってくるお父さんに自分の夢を話すことができません。なので、この作文をきっかけに、お父さんに自分の夢を話せたらいいと思います。

友達に自分の夢を話したこともありました。ある友達は、「女優ってすてきな夢だね。きつとなれるよ。」と言ってくれました。でも、ある友達からは、「女優なんてなれるわけじゃないじゃん。テレビにでてこれる人はほんの一部の人だけだよ。」と言われました。その時は夢だからぜったいなれるわけじゃないし、転校してしまった友達にとどかないなら女優を夢見る理由もないよねと思っていました。でも、あるテレビ番組で、「どんなにひどいことを言われても私は私、あなたはあなた。自分の夢を否定するような人はしよせんそのくらいの事でしか相手を落とすことができない人だから、そういう人にとらわれないで、あなたはあなたらしく自分の夢を応えんしてくれる人にだけ耳を貸せばいい。」この言葉が、私の頭に深く残っています。「私は私らしく」、これが私のモットーです。自分の夢にしっかりと向きあってしよう来、女優という夢をかなえて夢を否定した人や応えんしてくれた人にすごいと思うてもらえるような女優さんになりたいです。

ルールを当たり前に守る大人に

宮本小六年 青嶋 隼 叶

僕は、この前学年全体で国会議事堂へ行きました。その国会議事堂は東京の駅や有名な建物が多い場所だったので、バスで安全に移動しました。見学場所へついて見学開始になると、びっくりする発見やふだん決まっている法律は、この流れで決まるんだ、と感じ、時間があっというまに過ぎていきました。見学後は、友達や先生と、どこがすごかったなど、感想を話しながらバスへ乗ろうと歩き始めました。しかし、悲惨なことを目撃しました。歩道に人が歩いているのにスマホを見ながら自転車に乗る若い男性が後ろから来ていました。あれが、ながら運転か。僕は、ながら運転をテレビでしか見たことがなく、初めて見ました。想像以上に危険で心配でした。そのまま男性は、スピードを上げて進んでいきました。そして、次のしゅんかん「あたる！」と思ったその時、男性が急ブレーキし、ぶつかるのをまぬがれました。男性は、

「あ、ごめん。」

と小声で言い、スマホをしまって急いで去っていきまし

自分の個性を大切に

千間台小六年 土井 心愛

た。ぼくは、「なんでながら運転するんだろう。自分も相手も危険なのに、全員マイナスでしょ。」と強く思いながらバスに乗りました。

家について、社会科見学とながら運転のことを話しました。するとお母さんは、

「こんな人になっちゃだめよ。でも、たまにながら運転をしている人がいるから気をつけなさい。」

と言いました。自分の中でもそう思っていましたがお母さんに改めて言われてもつとながら運転をしない、と心にちかいました。

今この世の中では、自転車を利用している人が沢山います。それは、どこでも楽に移動できるからです。でも、利用するならきちんとルールを守ることが最優先だと思えます。だから、僕は改めてながら運転をしないと決めました。もし、ぶつかってしまったらすぐに、「ごめんなさい」と言える、そんな正しい大人になりたいです。

わたしの弟には、発達障がいがあります。弟のことをいやだなと思うことがたまにありました。なぜなら、自分の思いを伝えられなかったり、伝わらなかったりすると、すぐにさわいだり泣いたりするからです。ですが、今はそれを弟の個性だと思っています。わたしが、弟の個性を受け入れられたのには、二つ理由があります。

一つ目は、弟が自分の意志でやっているのではないということが分かったからです。今までは弟のわがままだと思っていました。でも、調べたり、家族の話を聞くと、実際は、やりたくてやっているわけでもないし、だれのせいでもないのだということが分かりました。そしてなにより、障がいのことをもっと知ろうと思えたからだと思っています。

二つ目は、弟のいいところをたくさん見つけて、それだけでいいようになれたからです。もちろん、困ってしまふことや、大変だなって思うこともたくさんあります。でも、それ以上に、年下なのにわたしよりもできていてすごい、と思うことや、やる気が出ると最後までやり続

けるすがたを見て、とてもかっこいいと思いました。さらに、わたしは弟から毎日たくさんのエネルギーをもらっています。もちろん、だれにでも、いいところ、悪いところはあります。その両方を見つけられたから、弟の個性を受け入れられたのだと思います。

今はこうして、障がいのこと、弟のことも受け入れることができています。ですが、初めにも書いたとおり、最初は弟に発達障がいがあることを、あまりよくは思っていないませんでした。

弟に発達障がいがあると分かるまでは、わたしにとって「障がい」というものは、どこか遠い存在に感じていました。なぜなら、それまでは障がいがあるのは特別でめずらしいことだと思っていたし、障がいという言葉も自分には、あまりなじみが無かったからです。でも、改めて考えてみると、全く特別なことではないし、めずらしいことではないと思いました。

世界にも、同じような人がたくさんいます。障がいがあるというだけで、いじめを受けたり、周りからさけられたりして、とても苦しい思いをしている人がいます。もし、そのようなことをしているなら、悪気がなかったとしても、絶対にやらないでほしいし、やめてほしいです。なぜなら、それはその人の個性だし、みりよくでも

あるから、むしろすばらしいことだと思ってほしいです。また、見た目や、自分の性別のことで、思いなやんでいる人も大勢います。でも、人とは心で通じるもの。生まれてきてくれただけで、周りの人はとても幸せだと思うし、喜ばしいことだと思います。今生きているだけで、とてもすばらしいことだというのを知ってほしいです。そうすれば、ひどいことをする人も、苦しい思いをする人もいなくなると思います。

そして、みんなが広く、美しい考えと心をもてば、世界中の人が幸せに、仲良く暮らせると思います。わたしは、そんな世界を目指したいです。

あたりまえの生活

千間台小六年 倉淵 葉月

あたりまえの生活と言われたら、みなさんはどんな想像をしますか。朝おきて、学校や仕事に行って、帰ってきたら夜食を食べ、おふろに入ってる。大きく言うところ、こんな想像をするのではないでしょうか。私もこんなふうに考えます。「あたりまえ」の意味は、わかりきった、言うまでもないこと、です。いままでの私は、これが当然で、あたりまえの事だと思っていました。

この話について気になり始めたのは、五年生の三学期ごろです。その時に私は、総合でSDGsの学習をしていました。私は、環境について調べていて、他の人も、色々なものについて調べていました。そして、調べたものを発表する会があり、そこで人権チームが発表した後、私はなんとなく気になって、外国の人について調べてみました。そこで見たものは、私にとってありえないものばかりでした。

まず、一番おどろいたのは、「家がない人」がいる、ということ。家がいない、ということは、私にはとうてい考えられませんでした。私のまわりには家をもって

いない人なんていないし、見たこともないからです。それでも、家がない人が世界に一億人以上もいるということは、私が知らないだけで、そういう中で生活している人がたくさんいるということなんだなと思いました。

そして、もう一つおどろいたことは、「学校に行けない人」がいるということです。学校というと、みなさんどんな想像をしますか。楽しいところと想像する人もいれば、めんどくさいところと想像する人もいます。そういう人にとっては、学校に行けないことは楽だと思うかもしれません。しかし、学校に行けないということは、私たちがいつも自然としゃべっている言葉が言えなかったり、書けなかったり：その他にも、生活で困ることがたくさんあると思います。また、そういう人たちは、六才から十二才の中で世界に約二億五千万人もいます。これは、日本人口の約二倍もの人数です。

私はこれらのことを調べて、分かったことと、考えたことがあります。まず、分かったことは、私の思っていたあたりまえの生活は、あたりまえじゃないということです。私が調べたこと以外にも、満ぞくに食事が取れなかったり、きれいな水が使えなかったりと、私があたりまえだと思っていたことは、あたりまえじゃないという事が分かりました。

私の将来の夢

花田小六年 穴戸 な な

そして、考えたことは、こんな環境でくらす人が山ほどいる中で、私はどうしてこんなに満ぞくにくらせているのだろうかということです。日本に生まれたから、それもあると思います。でも、一番は「たくさんの人が支えてくれているから」だと思います。勉強を教えてください先生、お金をかせいでくれるお父さん、野菜や米をつくってくれる農家さん、それを調理して料理をつくってくれるお母さん、他にもいろいろな人に支えられて、私の生活はできているのだと思います。だからこれからはこの生活を「あたりまえ」と思うのではなく、いろいろな人に支えられていることを自覚し、「ありがたみ」を持って生活していきたいです。

私の将来の夢は英語の先生になることです。私は親せきが海外に住んでいたこともあり、小さいころから英語に触れる機会が多くありました。そのせいか、よくアルファベットの歌などを歌ったり、英語の絵本を読んだりしていたので、自然と英語が好きになりました。自分で英語を学習することも好きですが、友達に問題の解き方などを教えることも好きなので先生になりたいなと思いました。

自分の夢を叶えるために、私は今英語を習っています。その英語の先生はとてもやさしく、間違えても怒ったりせず、ていねいに分かりやすく教えてくれます。そして、英語を習い始めて単語を覚えられなかったときに、「覚えることも大切だけど、今は楽しむのが一番。」

と言ってくれました。そう言葉をかけてくれたことで、さらに英語が好きになり、こんな先生になりたいな、こんなふうに教えられるようにになりたいなと思うようになりました。私が目指す英語の先生は、やさしいだけでなく、英語の楽しさを教え、分かりやすく教えたりするこ

とができる先生です。そんな先生になるには、まずは教えられるくらい英語を話せるようにならないといけません。そのために私は今、英語を習い、英語の本を読んだりして話せるようになるためにがんばっています。最近には特に外国人と関わることが増えています。英語を話せるようになれば先生だけでなく、日本に観光に来た外国人の通訳やガイドをしたり、接客業でも英語でコミュニケーションがとれます。

私は英語を話せるようになったら、いろいろな国へ行って、その国の人と会話したりその国のことを知って、日本以外の国のことを学びたいです。そして私は、海外に行って学んだことを先生として生徒に教えたいです。日本では学べないこともたくさんあると思うので、海外の良さや考え方を伝えて、英語が話せることの楽しさを生徒に教えたいです。英語はむずかしいし、単なる教科だと思って苦手な人も多いと思います。でも私は、単なる教科ではなく、世界中の人々とコミュニケーションを取るための道具だと思っています。

今、日本では、環境問題、貧困、少子高齢化などの解決していない問題がたくさんあります。また、海外では、紛争や教育格差、人種差別などの問題があります。これらの問題はその国だけで解決できるものではありません。

おたがいの国の考えを共有し、協力して全体で取り組む必要があります。また、オリンピックや万博など世界全体で楽しむイベントでも共通言語は英語です。まだ今は、そんな大きな問題の解決にはたずさわれないけど、身近なところから日本にいる外国人と英語でコミュニケーションをとることができるようになるのが今の目標です。

英語の先生を目指すのは簡単なことではないけれど、一步一步目標に向かって努力していききたいと思います。

イメージなんて関係ない。

大袋東小六年 齋 藤 あずさ

みなさんはSDGsという言葉を知っていますか。SDGsとは、二〇三〇年までに世界で達成することを目指す十七個の目標のことです。私は、最近SDGsの五番「ジェンダー平等を実現しよう」という目標を聞いて気になることがありました。ジェンダー平等とは、性別関係なく平等に責任や権利をもつことです。

私がジェンダーについて考える事があったのは、友達と中学校の制服の話をしたときです。私は友達に「中学校の制服ズボンとスカートどっちにする。」と聞かれて私が、「ズボンにするよ。」と答えると友達に「女の子なのにズボンなんだ。」と言われました。私はスカートよりズボンの方が好きです。女の子はスカートじゃないといけない、男の子はズボンじゃないといけないというきまりはありません。でも、世の中には、女の子はスカート、男の子はズボンという「イメージ」が広がっています。私はこのようなイメージをなくせばSDGsも達成できるのになと思いました。

しかし、最近ジェンダー平等を実現するための工夫

がたくさんあります。例えば、学校の校長先生は男の先生が多かったけど、今は女の校長先生の学校もたくさんあり、私の学校でも校長先生は女の先生です。

このようにジェンダー平等を実現させるために色々な取り組みがされています。

私は女の子でも、男の子でも関係なく、好きなものは何でも「好き」と言っていきたいと思います。好きなものを好きと言って、「女の子なのに○○が好きなんて変。」「男の子なのに○○が好きなのは変。」と人の好きなものを否定する方がおかしいと思います。好きなものを好きと言えるのは、しっかり自分をもっていて素敵だと思います。

男の子、女の子のイメージなんて関係なく世界の一人一人が互いの「好き」を尊重し合える世界にしていきたいと思っています。そのために私は、自分の中で「男女のイメージ」を少しづつ無くしていって、まずは身近な友達の「好き」を尊重し合います。そして、この考えを世界を広げていき、SDGsを達成していきたいです。

気づいて、その気持ち

大袋東小六年 奥村 心

気がつく、楽しそうに写真を撮っているあるグループをながめていた。外国人がいるグループだ。日本のいいところを知って、実際に訪れてくれたと思うと、嬉しくなった。でも、心のどこかで、不思議と日本人とちがうところが目についてしまう。「外国人だから」私と同じ理由で外国人を避けてしまった経験はないだろうか。

私は、英会話教室や旅行先、学校など、今までに、いろいろな国から来た人と出会ってきた。その人達との出会いを通して、その国の文化を知り、その国にもっと興味を持った。

今年度、大袋東小に、新しい外国語の先生がやってきた。その先生はフィリピン出身で、私が食べたことがない豚の丸焼きを食べた話をしてくれたり、きれいなビーチを紹介してくれたりした。その先生の話を聞いて、フィリピンのことをもっと知りたいと思ったし、先生自身のこと、もっと知りたいと思った。興味をもっと前よりも外国語の先生との会話が楽しくなった。

私自身が「外国人」になった経験もある。小学校四年

生の時に、旅行でグアムを訪れた。楽しみだけれど、初めてのことで不安な気持ちもあった。家族で行ったウォータースライダーで、困ったことが起きた。係の人の言葉が分からない。どうしよう。このままだと遊べない。そう思っていると、私が「外国人」だと気がついた係の人は、ゆっくり、はっきりと話してくれた。言葉が少しずつ理解できるようになった時、「外国人」の私にも、親切にしてくれたことにほっとした。この気遣いのおかげで、楽しく遊ぶことができた。

前までの私は、外国人に対して、ぱっと見ただけで「怖い」と思ってしまうことがあった。しかし、見た目だけでは分からない気持ちを考えることが大切だと、この経験を通して思った。

世界には、いろいろな国がある。どこの国でも、コミュニケーションを取ることは大切だ。たとえ、他の言語を話したり、意味を理解できたりしなくても、聞こうとする気持ちや相手に自分の気持ちを伝えたいという思いをもつことが大切だと思う。いつの日か、外国人と出会うことがあったら「力になりたい。話したい。日本のことをもっと知ってほしい。あなたの国のことをもっと知りたい」という思いを込めて、その人と向き合っていたい。その日のために、私が好きな英語も、もっともっ

勉強していきたい。

「外国人だから」ではなく、同じ一人の人間だという気持ち大切に、世界に住んでいる人全員が、違いをこえて力を合わせられる世の中になってほしい。



いじめといじり

弥栄小六年 平井咲衣

みなさんは、どこからいじめで、どこまでがいじりか、はつきりと正解を分かっていますか。私は分かりません。自分が嫌だと思ったらそれは、もう、りっぱないじめなのです。

こういう行動、言動をしたら、友達はずきずくなという最低限のことは知っています。ですが、完ぺきに友達一人一人のされたくない行動、言動は分かりません。なので、わたしは、最低限の行動、言動をまもることが友達をきずつけないために一番大切なことなのではないかと考えます。

わたしは、昔、友達に「○○君のこと好きなの？」と言われたことがあります。でも、実際は好きではありませんでした。なので、友達に「ちがうよ」と言いました。なのに、友達は、わたしとその○○君がいる前で、「咲衣ちゃんの好きな人は○○君でーす」と言いました。わたしは「ちゃんとちがうよと何度も言ったのに、どうしてこんなことをされたの」と思いました。友達の軽いいじりなんだと、すぐに分かりました。だけど、わたしは、

私たちがつくる「平和」

宮本小六年 沖野 彩

とても嫌でした。その友達は私を良く思っていないのかもしれない、とか、○○君とこれからも仲良しでいたかったのに、もう一緒に遊べないかもしれない、とか色々考えこみました。でも、結局、わたしは、人がきずつく行動、言動をしてはいけないということを自分がされたことで気付くことができました。なので、わたしが他の人に八つ当たりする前に気付けたから、あの友達にも、ある意味感謝しています。

これからは、人のきずつくような最低限の行動、言動を想像し、それをしないような人になれるようにがんばりたいです。

第二次世界大戦の終戦から八十年が経ちます。そこで私は、「平和」について考えてみました。私にとって「平和」とは、人種や見た目などの違いによる差別がなく、みんなが安心、安全にくらせることだと思います。しかし、今もなお戦争が起きている国もあります。そして、疑問に感じたことがあります。それは、「何のために戦争をするのか」ということです。その疑問を解決するために私は、第二次世界大戦が起こった経緯を調べ、これからも平和にくらすためにはどうするべきなのかを考えました。

まず、第二次世界大戦はドイツやイタリアを中心とする枢軸国と、イギリスやフランスなどの連合国の二つの派閥が対立した戦争でした。なぜ戦争が起こってしまったかという点、ドイツがポーランドに侵攻したことがきっかけでした。その後、世界各地を巻き込んだことで史上最多の死者数となってしまったのです。ではなぜ、ドイツはポーランドに侵攻したのでしょうか。それは、ドイツの領地を拡大するためです。そのような欲望がたくさ

んの命をうばう戦争の引き金となってしまったのです。

そこでおどろいたことが二つあります。それは、この戦争に日本も参戦していたということ、そしてその戦争に広島と長崎に原爆が落とされているということ です。

今までは、なぜ原爆が落とされたのかは知りませんでした。が、この戦争の中で落とされたことや、二つの原爆による死者数がおよそ二十一人にも上ったということを知り、とてもおどろきました。

このような悲惨な戦争をくり返さないために私は、一つ一つの国がその国の私利私欲のために行動に移さず、お互いに尊重し合うことが大切だと考えました。そして、戦争は国の私利私欲のためと自国を守ろうとするために起きてしまうのだと思いました。

私は、今ある平和とは程遠いこの戦争をとおして、今の平和のありがたさと命の大切さを感じました。そして、日本に今は当たり前にある「平和」。平和な日本だからこそ、私たちの手で平和を守っていくべきだと思います。みなさんも自分にとっての「平和」が何かを考えてみてください。

「画面のおくの人」

西方小六年 栗原梨花

「きもい」「消えろ」この言葉は、いい言葉ではありません。けれど私は、この言葉を口にしたことがあります。

ある時、友達と話していると、

「梨花ってさ、自分のこと全然話してくれないから私がずっと喋っちゃってて、あんまり一緒にいても楽しくないんだよね。」

と言われてしまいました。私自身、そのようなことをしていた自覚はなく、友達に言われて気づきました。ですが、友達は、続けてこう言ったのです。

「でも、梨花って喋るとずっと自分のことばかり自慢みたいな主張みたいな言ってるってちょっとうざいんだよね。」

と言われてしまいました。その時、ついカッとなって、私も同じ言葉で言い返してしまいました。その時は、イライラがおさまらず、興奮して言い返してしまいました。次の日学校に行くと、その子と少し気まずくなっています。学校が楽しくなくなっていました。たった一言

のやりとりで何もかもが崩れていきました。

このような出来事が今、インターネット上で多く起きています。見ず知らずの人たちがたくさんいる中で、たった一人が誰かの悪口を言う回数時間後には一気に広がってしまします。その数は、数百人程度ではとどまりません。何万人もの名前も知らない人たちに好き勝手言われている本人(被害者側)は、耐えられない状況になります。面白がって言う人たちにとって重要なのは、事実かどうかではなく、面白がったり変な正義感をかざしたりすることなのです。

インターネットやSNSについてどのような目的で使うのかを確認し、未成年のうちは保護者の徹底的な管理が必要です。一人一人の認識の違いを正しくし、善悪のつく人にならなくてはいけません。より良い日本の未来のためにはこういう小さなことに気づき、改善していかなければなりません。

私自身、カッとなったからと言って、簡単に傷つける言葉を使ってしまったことを反省し、改めていこうと思います。そして正しい人間になります。

私の小さいころからの大きな夢

蒲生小六年 板垣美織

わたしの目指しているしよ來の夢は、子どもと関わる仕事です。この夢は、三さいの時からずっと変わらないう大きな夢です。その夢をなぜ目指しているのか。きっかけは二つあります。一つ目は保育所に通っていた時、わたしはいつも、先生の近くについて、話したり、遊んでもらったりしていました。その時に、いつもすてきな優しい笑顔で対応してくれた先生のことがとても大好きでした。いつしか、こんな先生になりたい、一緒に保育所で働きたいとあこがれの気持ちをもつようになりました。二つ目は、お母さんの働いている職場「放課後デイサービス」に遊びにいった時です。その時は、職員さんもととても優しく接してくれたり、いろんな個性をもっている子どもたちと過ごすのがとても楽しく、こんな仕事をしたいと思う気持ちがどんどん大きくなっていきました。そこで、お母さんの働いている職場にいる職員さんに保育士の経験のある人が一人いました。利用者さんがみんな帰ったあとに、一つとある質問をしました。「保育士など子どもと関わる仕事で大切なことは何です

か。」と。わたしは、ピアノなど技術的なことなのかと予想をしていました。すると、予想とはちがう意外な回答が返ってきました。

「観察力かな。」

わたしはこれを聞いて不思議に思いました。なぜ、観察力なのだろうと。そうすると、こう説明してくれました。「子ども達の表情からどう思っているのか、体調は大丈夫そうか、どこかがをしていないか、しっかり子ども達一人一人の様子を見極めるためだよ。」

わたしは、これを聞いておどろきました。ピアノなど技術的なことも大切だと思います。しかし、それよりも大切なのは、よく周りを観察することだということに。仮に、けがをしてしまった子がいるとします。まだ小さい子達だからこそ、泣いてうったえる子もいると思います。が、声をかけるのを忘れる、はずかしくて言えないなんて子も少なからずいると思います。けれども、けがなど異変がないか子ども一人一人見ること。それも何十人もの子ども達を。これは、まさに自分の「観察力」が試されると思います。子どもと関わるような仕事をしている人達は、ただ預かるだけでなく、子ども一人一人を見て、来た時と変わったことはないか探し、親と子に安心・安全な環境を届けるに加えて、観察力をあげていくこ

とが大切なんだと思いました。

今では、少子高齢化も進んでいます。だからこそ、一人でも多く子どもが、安全な環境でいられるよう、夢をあきらめずに、ひたむきにがんばっていきたいと思っています。それは、子どもたちが安心して暮らせるような街をつくっていききたいからです。わたしは、ピアノなどの技術的なものも、もちろんみがいていきたいです。ただそれ以上に、「観察力」をみがきたいです。三さいからの夢「子どもと関わる仕事」という大きな、大切な夢を叶えていくために。

将来の夢に向かって

蒲生小六年 間 中 涼 太

ぼくは、東京都北区でうまれた。北区には踏切がたくさんあり、ぼくの家のすぐ裏にもあった。保育園のころのぼくは、毎日踏切まで、電車を見にいった。多種多様な電車が走っていて、それでは電車が好きになった。

小学校に入學する前に越谷市に引っ越ししてきた。そこで初めて東武線に乗った。東武線にはいろいろな車両があり、とてもわくわくした。それだけでなく、実際に乗ったり、音を楽しんだりした。誕生日には、鉄道グッズをかってもらっていて、いつも家で遊ぶようになった。

小学生になって将来の夢を考えるようになったとき、「電車を自分で運転できたらさぞかし楽しいだろう」と考えるようになった。そんなぼくのために、去年の夏休みにＪＲ東日本が開さいしている運転士などのイベントに、お父さんがそれを申し込んでくれた。

そのイベントでは、まずはじめに電車がどんなしくみで動いているのかを勉強した。電車がたぐさんの部品と複雑な電気のシステムによって動いていることを現役の運転士の方から直接教えてもらった。電車が安全で正確

に運行しつづけるためには速度の管理が重要であることに気づき、普段、学校や塾で学んでいる算数と理科の勉強がとても大切だということにおどろきました。

その後、実際に運転士の体験をさせてもらった。シュミレーターという、現役の運転士の方が練習のために使う装置を使って東海道線の運転を体験した。一応、ゲームで同じようなことはやったことあるが、本物は画面がとても大きく、操作も難しかった。運転士さんに操作のコツをおしえてもらい、なんとか運転を終えることができた。運転の体験が終わって運転士の方にいろいろと質問させてもらった。

「ぼくは、耳が不自由なのですが、運転士になることができますか。どういうことを主に勉強すればいいですか。」と聞くと、

「ＪＲは障がい持ちの人が多いので安心して下さい！そして、勉強に関しては、特に算数と理科がとても大切だよ。しっかりと勉強してね。」とおっしゃっていた。

それを聞いて、ぼくと同じく障がいを持っている人もここまで努力してきていて働いているということに対して、とても心強いと思った。障がいがあるからあきらめるのではなく、電車の運転士に必ずなると決意し、努力していきたいと思った。

それから、ぼくは、学校の授業を真剣にきいたり、また、家でたくさん勉強し、塾で満点や賞状をとったりするようになった。

これから、中高大に行っても小学生のとき以上にとても努力して、自力で運転士までの道へ導いていきたいです。

障がい持ちでもあきらめていかないできちんとがんばりたいです。



ふつうの形

大相模小六年 阿部 柚葉

私のお父さんは、障がいのある人や心の病を抱えている人たちが仕事につけるように、未来を明るく照らせるようにするための仕事についています。そんなお父さんは、仕事から帰ってくると、その人たちの話をよくしてくれます。聞いてみると、

「今日利用者がアニメの話をしてくれてさあ。」

とても楽しそうに話しています。他にも、私の得意な絵をお父さんにプレゼントすると、

「今日利用者が、柚葉の絵をほめてくれたよ。」

とうれしそうに話していました。いつもその姿は、障がいのある人や心の病を抱えている人と話しているように見えないほど、明るく楽しそうです。私はこの経験を通して、障がいがあっても心の病を抱えていても、私と何も変わらないふつうの人なのだと思います。そんな人たちのふつうと、私のふつうはちがうかもしれせん。例えば目が見えない人たちは、見えないことが当たり前であるように。そして私は思いました。誰にでもふつうがあるけれど、それは全員ちがうふつうなのだと。

車いすの私の叔母

平方小六年 長谷川 結 月

私にとってのふつうが○だとしたら、友達のふつうは□かもしれない。だから、障がいのある人たちにも一人ひとりにちがうふつうがあるのです。自分とはちがうふつうをもつ人たちが、この世の中にはたくさんいます。それを一目見て、変だ、おかしいと決めつけてしまうのか、その違いに理解と興味をもつのか、その違いはとも大きくて大切だと思えます。これは、障がいがあるとか病気があるとか、そういう人たちだけの問題ではありません。私たち人間みんなの問題なのです。自分とそっくりな人もいれば、まったくちがう人も自分のすぐそばにいるはずです。そんな一人ひとりがうふつうを尊重する、そんな人たちがこの世界にあふれるといいなと私は思っています。

私の叔母は、生まれつき足の障がいを持っています。上手に歩くことができないので、車いすを使って生活しています。そんな叔母と生活する中で、気づかされることがこれまでたくさんありました。

足の障がいがあることによって、どのような場面でも自由となるのでしょうか。例えば、外出する際は車いすから降りて助手席にのる動きが必要となります。自分で体を持ち上げて動くことが難しいので、家族みんなで協力して車ののり降りをしています。また車をとめる際は、車いすマークの駐車場を探します。スムーズに見つけることができなかったり、数が足りなかったりするので、とても時間がかかってしまします。そのように、一つ一つの行動にとっても時間がかかってしまい、叔母は大変な思いをしています。

私の叔母は、生まれつきそのような障がいをもちたくて生まれてきたのでしょうか。そんなことはありません。それは誰もがわかるはずなのに、以前このような経験をしました。家族でショッピングモールに出かけたとき、

複数の人たちが私の叔母を見て、

「あの人小さいね。歩けないんだろぅね。」と言って笑っていました。幸い、叔母には聞こえていないようでしたが、叔母が日ごろから抱える苦勞、そしてもちたくてもったわけではないという思いを見たり感じたりしている私にとっては悲しくて仕方ありませんでした。

障がい、私の叔母のように足に抱える人もいれば、他の部位に抱える人もいます。その障がいによって、日常生活の様々な場面で生きづらさを感じる場面もあるかもしれません。もちたくてもったわけではないでしょう。そんな気持ちを少しでも和らげられるよう、まずは困っている人を見かけたら、優しい言葉かけができるような人間に私はなりたいです。



私のできること

平方小六年 宮ノ内 咲 希

私はみんなと何かがちがう。みんなは勉強が得意。でも私は勉強が得意ではない。勉強が苦手な私は料理とかし作りが得意。私は、勉強を自分のペースでやって、おかし作りも自分のペースでやっている。

勉強が苦手な私だけれど、学校では六年二組とのびのび学級で友だちと一緒に授業を受けている。体育では、お手本になることもある。委員会の活動では、保健委員会に二年続けて入って、五年生のお手本になれるようにがんばっている。クラブ活動は、三年続けてバトンドンスクラブに入って、今年は部長になった。まだ、技を知らない子にいろいろな技を教える。そして、発表会の時には見てくれる人に「はいってみたい!」と思ってもらえるようにいろいろなポイントを教える。たて割り活動のスマイルタイムでは副班長として一年生を迎えに行き、一年生から五年生までの席を教えてあげた。クラブやスマイルタイムでは、リーダーとしての自信はまだないけど活動の時には大きな声がでている。一年生にしたわれる六年生になりたい。

家では、休みの日にスコーンやシュークリーム、クッキーを作っている。料理では家族のために、やきそばや大根サラダを作った。料理やおかし作りができるのは私自身の得意なところだ。人の目を気にせずにみんなに

「おいしい！」

と言ってもらえるように、たくさん作っていく。これから、作る種類もたくさん挑戦して増やしていく。もし、失敗しても失敗した原因を見つけてやり直していく。何度も何度も繰り返して、努力の結果成功したとき

「あっ、やってよかったな。」

と思えるだろう。家族や友だちがうれしい気持ちや、悲しい気持ちになっているときに、私の料理やお菓子を食べてもらって幸せな気持ちにできたらすごくうれしい。

もうすぐ中学生になる。自分のペースで勉強して、部活などの学校のこともがんばる。お菓子作りは作るだけでなく教えられるようにする。料理やお菓子作りを通してこれからいろいろな人を幸せにする。

ヘルプマークについて

大間野小六年 斉藤 瑞季

私が五年生のころ、家族で山に出かけた日のことです。電車に乗り合わせた女性がヘルプマークをつけているのことに気づきました。その女性がなぜヘルプマークをつけていたのかすぐにはわかりませんでした。父が席をゆずろうと言い、母と私は席をゆずることにしました。そのときに、その女性が手話を使っていたため、耳が聞こえない人なんだなと思いました。

皆さんはヘルプマークを知っていますか。ヘルプマークは助けを必要としていることが外見からは分からない方々が、周囲の方に配りよを求めることを知らせるためのマークです。ヘルプマークはだれでもかんたんに手に入れることができるため、にんしん初期の方や、ガンなどの大きい病気の人、発達障がいがある人もつけていることがあるそうです。

しかし、ヘルプマークをつけたくないと思う人もいます。そうです。それは、自分に障がいがあったり、病気があることを周りの人に知られたくないからだそうです。確かに自分に障がいや病気があることを周りの人に知られ

ることはとても不安なことだと思います。私が同じ立場だったら、やはりヘルプマークをつけるのをためらうと思います。なぜなら、いろんな考え方の人がいる中で、ヘルプマークをつけている人を見て、配りよしいとやさしい気持ちになれる人はどのくらいいるのだろうと思うたからです。でも、もし自分がヘルプマークをつけたときに、「大丈夫。」という声かけや、「良かったらすわって下さい。」などのやさしい気持ちでむかえ入れてくれる人がたくさんいる世の中だとしたら、安心してヘルプマークをつけられると思いました。

私たちにできることは、ヘルプマークをつけている人を見かけたら、想像力を働かせて同じ気持ちになり、寄りそうことが大切だと思います。電車で乗り合わせたあの女性は、耳が聞こえない中で電車に乗るのはこわかったのかなど考えて、少しはあの時の女性の気持ちに寄りそうことができるのではないかと思います。そして、私自身にできることは、ヘルプマークをつけている人だけでなく、お年寄りや困っている人がいたら、声をかけてあげたいという気持ちを今後も大切にしていきたいなと思いました。

ぼくが、今がんばっていることはサッカーです。ぼくは、宮本小でやっている宮本サッカーというチームでがんばっています。そしてぼくがプレー中に意識していることは三つあります。

まず一つ目は、チームプレーを意識することです。ぼくは、宮本サッカーでディフェンスや、ボランチというポジションをやっています。そこは、一人でガンガンボールを運ぶポジションではなく、味方のサポートやカバーをするところです。なので、味方の動きを見て、ボールをうまく回して、チームプレーをするようにしています。

二つ目は、味方のことを考えてプレーすることです。ぼくは、一年くらい宮本サッカーでやっているのですが、味方の得意なこと、不得意なことを知っています。なので、味方の得意な方へボールを出したり、得意なプレーが出来るようにボールを出したり、相手にボールをうばわれないようにしています。

三つ目は、やさしい言葉づかいでコーチングをすることです。例えば「もっと行こう」とか「ナイス」などで

す。もしミスしてしまった時に、強い言葉づかいで言うてしまうと、その人のやる気をなくしてしまったり、パフォーマンス低下につながってしまうからです。

そして、今意識していることは、少し意味はちがうものの、全て社会につながっていると思います。チームプレーを意識するは、仲間と協力するということになるし、味方のことを考えるは、仲間のことを考えて行動するということになり、コーチングをするは、仲間に何かを教えるということになるので、チームスポーツは社会につながっていると思います。

このことをふまえ、今サッカーをやるときに意識していることは、社会につながっているということを忘れずに、これからもサッカーをがんばりたいです。

越谷とエコ

宮本小六年 桜井 柚輝

今、世界各地で環境問題が深刻化しています。そこで、世界の各国は様々な取り組みをしています。それは、越谷でも同じなのです。

越谷で環境の場所といえば、越谷レイクタウン。レイクタウンは、「自然と人に心地いい」をコンセプトに開発された大型ショッピングモールです。レイクタウンのテーマは、「エコ」となっています。そのため、エコについての取り組みがたくさん行われています。例えば、ソーラーパネルを設置したり、緑を増やすことなどです。さらに、レイクタウンは、越谷市と協力してエコに取り組んでいます。

また、越谷市は、「エコ勉強会」という取り組みも行っています。ここでは、エコな施設を見に行ったり、エコな物を作る、環境への取り組みを学ぶといったことをしています。実際に、「イオンレイクタウンのエコな施設を学ぼう！」や、「越谷環境管理計画を学ぼう！」といったことが行われていました。越谷市は自ら色々なことを計画し、市民に環境について少しでも関心をもってもら

うために取り組んでいるのです。ではなぜ、レイクタウンや越谷市は「エコ」に取り組んでいるのでしょうか。

僕は、これ以上、環境の悪化を進めてはならないと考えているからだと思います。環境問題は、すでに深刻な問題となっています。そこで、国や都道府県は条例を作成するといった対策を行っています。しかしなぜ、条例があるのに、環境問題が深刻化しているのでしょうか。

それは恐らく、みんなが、

「誰かがやってくれるからいいや」

という軽い思いが環境問題に繋がっていると考えます。だから、そのような軽い考えや思いをしないことが環境問題の解決に近づくために必要だと思います。

この地球は、みなさんの軽い考えや思いで悪い環境となっているのです。だから、一人一人の思いを変えて、よい環境と未来を目指していきましょう。

ぼくと色弱と未来

宮本小六年 金子拓真

みなさんは色弱というものをしていますか。色弱とは、多くの人とは異なった色の感じ方・見え方をすることです。ぼくも色弱です。ぼくはもっと色弱のことが広く伝わるための活動などをしていくことが未来に必要であると考えています。

ぼくは、茶色と緑色などの色をまちがえてしまいます。家にあるベージュのソファ어도、黄緑色に見えています。その色弱のせいで交通関係の仕事や、公安関係などの仕事をするのが困難になります。それで未来を目指せない人達もいます。

また、色弱は日本人男性では約二十人に一人、女性では約五百人に一人といわれています。これは、先天的な色弱の割合です。主に色弱をもっている男性から生まれた男の子になる確率が高いです。女の子が生まれた場合、その女性が保因者となり、そこから生まれた男の子もある確率が高いです。

ぼくが生活でこまっていることは、たくさんあります。例えば、授業で使うタブレット内のアプリです。そのア

プリでは、ペン機能があります。このペンの色を選ぶことができます。その画面には丸い形で様々な色が表示されています。それがぼくには見分けのつきにくい色がたくさんあり、人に聞かないと分かりにくいのです。なので、色の下などに色の名前が表示されると分かりやすいと思いました。

また、授業の黒板に書いたチョークの色が白や赤など、どっちがどっちだか分からなくなってしまっていることがあります。なのでそのときは、お母さんに伝え、個人面談でそのことを言いました。その後は、色を変えるときは色の名前など言ってもらい、それ以来あまりこまらなくなりしました。

低学年のころには、色ぬりのときに木の幹を緑に、葉っぱを茶色にぬってしまうことがありました。その絵を見て気になったお母さんが眼科につれていってくれて、検査をした結果、色弱だということが分かりました。

ぼくは生まれたときからこの見え方で、みんなとちがう見え方になっていることに気づけません。そして、後からちがっていたことが分かって、はずかしい思いをすることもありました。みんなとちがう世界を見ているなんて、なんだかこわいです。ぼくはみんなと同じ景色を見たいです。

お母さんから、色弱を補正するメガネがあるというのを聞きました。ぼくはそのメガネがすぐほしいと思いました。でもそのメガネは、約七〜九万円もするそうです。お母さんがそれをすぐ買ってあげたいけれど、価格が高くて今は買ってあげられないとごんねんがっていました。色弱の人口は、日本人男性に約二十人に一人、女性に約五百人に一人と言われてこまっている人が多いのに、なぜそんなに高いんだろうと思いました。ぼくはこまっている人が多いのだから、市や国などから補助があったらよいと思います。

このように、色弱でこまっていることがたくさんあります。ぼくの弟も色弱でこまっているので、ぼくは色弱にもやさしい世界になってくれたらいいと思いました。

「障がい者への接し方」

西方小六年 幅崎 聖 夏

みなさんは、障がいをもって生まれてきた人々に出会ったことは、ありますか。またその人たちにどのような感情をもっていますか。世の中では、表向きには、平等を語っていてもうらでは差別感情をもっている人も少なくありません。どのようにしたら本当の意味で平等な社会をつくることができるのでしょうか。

私の弟は発達障がいをもって生まれてきました。障がいをもっているから感情のコントロールができません。例えば突然怒ったり泣き出してしまいます。それにくわえて、簡単な単語しかしゃべることができません。日常生活の中でコミュニケーションがうまくとれず困ってしまいうことが多くあります。

しかし幸いなことにはかれは周りの人から差別的な言動をうけたことはありません。それは周りの人が温かい気持ちで接してくれているからであり、私たち家族はとも感謝の気持ちでいっぱいです。

ただ、一方で世の中には、さまざまな理由で差別されている人たちがいます。その主な理由は「見た目がちが

う」「コミュニケーションがとれない」「手間がかかる」「じゃま」と私が調べたものにはかいてありました。

これを知って私はとても悲しくなりました、怒りをおぼえました。世の中にいるすべての障がい者はみんな、のぞんで障がいをもってうまれてきたわけではありません。人とちょっとちがうだけで差別をうける人たちはどんな気持ちでしょう。もっと相手のことを理解してお互いを認め合える社会になるべきだと私は考えました。

バリアフリーという言葉があります。これはすべての人にとって人生のかべをとりのぞこうという考え方です。私はこの考えを実現する一員としてこれからも弟を大切にし、同時にもっと障がいについてすすんで学んでいきたいと思いました。

高れい者の人達だけでなく

鷺後小六年 広川 晴 香

わたしは、四年生の時にやっては、いけないことをしました。でも、そのときの自分はなんとも思っていないませんでした。わたしが、友達と遊ぶ約束をしていたのですが、宿題をしていて、遊ぶ時間におくれてしまいました。だから、わたしは、とても急いでいたので、頭の中は、早くしないかという思いしかありませんでした。そんな中で、横断歩道をわたろうとしていたとき、高れい者の方がちょうどまん中の所で止まっていたのです。それを見て、いっしゅんだけ、だいじょうぶかなあと思いました。でも、友達にめいわくをかけるのがいやでした。だから、わたしは、そのままに行ってしまうしました。そのことは、今は、とても、こうかいしています。でも、やってしまったことは、しかたない、次にこういうことが起きたら、助けてあげればいいと思っていました。そんなとき、この作文があったことを思い出し、色々と考えてみました。そしたら、こんな思いではだめだと、思いました。わたしは、本当に助けてあげたかったです。でも、わたしは、友達をこまらせるのは、いやだからと

いって助けるのをやめてしまいました。その時の高れい者の方は、無事だったと思いますが、もしかしたら、命に関わることになってしまっていたかもしれないのです。だからこそ、助けなければいけないのです。それを、分かっていたのに、助けてあげられなかったことは、本当に、こうかいしています。だから、これからは、こんなことが起きないように、どんなに急いでいても、なにか大事なことがあったとしても、絶対に助けなければいけません。それは、一つしかない、大事な命だからです。そして、高れい者の方だけでなく、他のしょうがいのある人やふつうの人でも、こまっていたら助けてあげなければいけないのです。そのことをわすれないで、日じょう生活に取り入れて、生きていこうと思います。

ごみの少ないきれいな町

鷺後小六年 岩 本 悠 斗

ぼくは、自分たちの町、越谷市をごみの少ない、とてもきれいな町にしたいと思っています。

現在、越谷市には、ごみが歩道などに落ちています。おかしの袋や使い終わったたばこ、飲み終わったペットボトルなどが落ちています。どうしたら、このようなことがなくせるのでしょうか。

まず、おかしの袋やペットボトルのごみをなくすには、外で飲食するのではなく、家ですれば、外に落ちることはないと思います。

でも、どうしても、外でしなければいけないということもあると思います。そういうときは、ごみ袋を持って行けばいいと思います。そうすれば、飲食して、ごみが出ても、ごみ袋に入れて、持ち帰ることができます。

また、たばこのごみをなくすには、吸い終わったたばこを、バス停などにある、たばこを捨てる場所に捨てればいいと思います。そうすれば、たばこのごみもなくなります。

そして、何より大事なのはごみを捨てないということ

と、ごみが落ちていたら、捨てられる物は、自分の物でなくても捨てるということです。そうすれば、落ちているごみは、少なくなると 생각합니다。

ぼくは、自分たちの町、越谷市をごみの少ない、とてもきれいな町にしたいです。そのために、これまで書いてきたようなことや、他に、自分でできることを考えて、意識してほしいと思います。



自分がやられていやなことはない

明正小六年 森 口 佳 穂

私は友達同士のけんかをとめました。

そしてけんかしていた子に言いました。

「今のこってAちゃんやりすぎじゃない、やられていいの。」

私は、そのときいっさい自分がやられてうれしくないことはやっていないと思っていましたが、少し前はちがいました。

少し前は妹と毎日けんかをしていました。

年れいは三才差でけんかはよく私が勝っていました。

そして最後にやりすぎてしまいお母さんに

「なんでそんなことするの自分がされていいの。」
と言われます。

そして、最近ハッとしました。

自分がされてうれしくないことをやっている。もうやめようと思ってもうしなくなりましたが、自分がされてうれしくないことをやっていた自分に後悔しています。

なのでこれからは、絶対にやらないようにします。
テレビを観ていると世の中では、けんかがヒートアップ

プしひどいことが起きています。

それは事件です。事件のニュースはたくさん起きており、そのニュースを聞くととてもつらい気持ちになります。

事件を起こした人のもとでもつらい思いだと思いますが、事件にあった人、あるいは家族の方はもっとつらく大変な思いを味わうと思います。

このようなことから私は、絶対に自分がやられてうれしくないことはしません。

これからはみんなにやさしく、毎日つかう言葉などにしっかり向き合ってつかっていききたいです。

私と君達の本線

千間台小六年 中 屋 穂 風

私は、この世界に生まれてきた一人の人間です。そして、私の家族、友達もみんなこの世界に生まれてきた人間です。私のまわりの人だけでなくこの地球にいる人全員がこの世界に生まれてきた人間です。

私は、得意なこと、得意ではないことがあり、できること、できないことがあります。それが「人間」という生き物です。みなさんにも、得意なことや得意ではないことがあると思います。私、世界の全員が「出きない」から始まり、「完璧」になることは、出来ません。だから人間は、協力し合って生きています。この世界はすべて平等で出来ていて、この世界は差別をなくし、だれもがくらしやすい生活をおくれるような地球を目指しています。でも世界のどこかでは差別をされ、くらしやすい環境が整っていないところがあります。みなさんは「人権」という言葉を知っていますか。人権とは、この世界にいるすべての人が生まれたころから持っている自由と平等に関する権利で自分らしく生きて良いという意味で、その自分らしさはだれにも奪えないのです。その権利、

自分らしさを奪うことを差別といってその人は自分らしく生きられていない可能性があります。私は、自分らしく生きられていて、「私」は「私」で代わりはいません。だからこそ、生きていくだけで価値があると思っています。私達全員、ちがう未来を歩んだとしても、この世界にいるすべての人達は絶対、切れることのない一本線で結ばれています。

それぞれの「ふつう」

千間台小六年 小田 優 希

この世界には、色々な「ふつう」があります。日本では戦争が無いのが「ふつう」で、他の国では、これが「ふつうじゃない」のかもしれない。むしろ、戦争をして国の領地を増やそうという国もまだまだ多くあります。

でも日本ではこの「ふつう」はあたり前です。外国人が日本の文化と違うことをしたら、「おかしい」と思われてしまいます。でも、この「おかしい」は本当に良いことなのでしょうか。国が違うなら文化と違うのはあたり前ではないでしょうか。確かに、私も外国の人が、日本の文化と違うことをすればびっくりします。でも、それをわざわざ口に出しているのは完全に差別だと思いません。だからその「おかしい」があるのはあたり前でおかしくなんかないという考えを日本にもっと広げていけば戦争はなくなつて、この地球に住む生き物達は仲良く、楽しくくらしていけるのではないのでしょうか。でも、世界にもルールがあり、それを守って行動することやルールの中で平和にすごすことが重要です。いくら、文化の違いがあろうとその国のルールを守らなければいけません

ん。そこが「文化の違い」の難しい所です。「多様性」と「ルールの反」は似ているようでまったく違うのです。

でもけっこう「ふつう」とはなんなんでしょう。私は、この世界に「ふつう」なんて無いんじゃないかと思っています。例えば、一人がここが真ん中と言っても他の人にとっては必ずここが真ん中かなにか分からないし、違う場所が真ん中だと思う人もいるかもしれませんよね。一人はこれが「ふつう」でももう一人は違うところが「ふつう」なのは、あたり前なのです。人が増えれば違った「ふつう」も、増えるはずです。一人一人が違う意見を持つことは、悪いことではないし、むしろ一人一人が違う意見を持つのはあたり前です。だから自分が他の人と違う「ふつう」があってもいいし、似た意見を持つ人、まったく違う意見を持つ人と関わって自分の考えを深めていくのが大切なのです。

私は、他の人の「ふつう」と違っても自分の「ふつう」を大切にすることが大切だと思います。と中で、考えが変わってもいいし、考えをどんどん深めてもいいのです。それが「自分のふつう」で、他の人とは違う唯一無二の大切な考えなのですから。

「将来の夢」

桜井南小六年 福本 托久心

ぼくは今、未来に向けて考えていることは、介護ができるロボットを作る仕事です。なぜ介護ロボットを作ろうと思ったかというと、お父さんとお母さんが、おじいちゃんのお世話をしていたからです。ぼくが、生まれる前のことですが、お母さんから聞いた話は印象に残っています。

お父さんは、仕事から帰って来てヘトヘトに疲れていても、お母さんと順番におじいちゃんのお世話をしていたそうです。お母さんは、三人のお兄ちゃん達のめんどろを見ながら、おじいちゃんのお世話をしていたそうです。習い事の送りむかえや三番目のお兄ちゃんが幼稚園生だったので、幼稚園の送りむかえもしていたそうです。家に訪問看護師さんやマッサージをしてくれる人達が、交代で来ていたそうです。

そういう話を聞いて、ぼくが大人になったら、介護に役立つ何かを作りたいと思うようになりました。ぼくは作ることが好きなので、介護ロボットがあれば、介護を必要としている家族が、どんなに助かるだろうと思いま

した。お母さんから聞いた話で、いそがしい時が重なってしまふ時の介護は、お母さんの身が半分にはならないので、とても目まぐるしかったそうです。おまけに、声があらあらしくなってしまうそうです。そうじロボットや食洗機やかんそう機ということではなくて、お母さんがお兄ちゃん達の方に目を向けている間に、介護ロボットがいてくれたら、どんなに助かっただろうとお母さんが言っていました。

ぼくの夢に向けてがんばることは、勉強や運動、友達と協力すること、自分より下の子のお世話をすること、そして自分が健康でいることだと思います。一人でも多くの人が助かるといいと思いました。ロボットの胸の中に、人の気持ちに分かる『心』を入れられると最高のロボットになると思いました。

目標に向かって

花田小六年 大塚 菜央

私は三年生からテニスを習っています。そこでは友達ができたり楽しいことや悔しいこと、喜びの気持ちをたくさん知ることができているとともに、経験を積んでいくうちに勝ちたいと言う気持ちが強くなったりしました。そして様々な人が関わって、今の自分があるということを知りました。

四年生のときに、朝霞市で開催された双葉カップの大会の四年生以下の部で優勝したことがあり、そのときのペアの子と一緒に喜びあったのを今でも覚えています。そして五年生ではペアが変わり、不安がありました。どんどんやっていくうちにけんかをしたり、考えたりと様々なことを経験できました。五年生のみの県大会では、ベスト8となりました。その後、みんなでたくさん練習をして、六年生の大きい大会に向けて頑張り続けました。その後の五・六年生の県大会ではベスト16でした。しかし私にとってこれはとても悔しい結果でした。このとき、まだ努力が必要なのだと改めて分かりました。次の研修大会に向けて、ダメだったところを改善して、臨みたい

と思いました。

また、お母さんやお父さんは、私に上手くなって欲しくて、いろいろと助けてくれています。忙しい中、練習に連れていってくれるなど、両親のおかげで今の自分があります。絶対にベスト4に入って両親を喜ばせたいので、より頑張ろうと思いました。

練習は毎週火、金、日曜日にしています。コーチが考えたメニューをみんなで一緒に取り組んでいます。真剣に教えてくれるので、私もその気持ちに応えるために練習しました。そのおかげで前の何倍も強くなりました。

ベスト16だった大会から心を切り替えて研修大会に向けて苦しい練習を積み重ねました。万端の準備で「悔いのない大会にしたい」と思いました。コーチからアドバイスをもらって、そこを意識して自分なりに努力をしました。しかし研修大会とは別の大きい大会に出たときに、自分よりもっと上手い人がたくさんいることがわかり、もっと上手くなりたいと気持ちをより一層強めました。そのため家の外でネットを張って練習したり、反復横跳びをしたりして自分なりに練習を工夫した結果、大会で良い結果を残したいという思いを強められました。

ついに研修大会当日、苦しい試合もありましたが、その結果、ベスト4に入ることができました。これには両

親も大喜びでした。良い結果を収めることができたのは家族や友達、コーチなど色々な人がたくさんサポートしてくれたからです。感謝の気持ちでいっぱいになりました。

今はダメだったところを確認し、改善することを頑張っています。来月にひかえた福島県の大会でも良い結果を残せるように今後も頑張っていきたいです。今後も全力でテニスと向き合っていきます。



夢の舞台に立ったあの日

蒲生小六年 洞口 花

私は、小学三年生の時にチアダンスを習い始めました。チアダンスを始めたばかりの頃は、ただただ楽しくて、ワクワクしながら踊っていました。小学四年生の時、一つ上のレベルの大会チャレンジクラスに編入しました。レベルが上がって大変だったけれど、毎日充実していて楽しく踊っていました。小学五年生で更にレベルUPを目指し、大会チャレンジクラスよりもレベルの高い、大会育成クラスに編入しました。大会育成クラスは想像していたよりもとてもレベルが高く、みんなについていくのに必死で初めの頃は何も出来ませんでした。

周りには上手に踊れている子もいるのに、私は振り付けを覚えられず、怒られてしまうこともありました。練習中に左手を骨折したこともあり、「どうして上手く踊れないんだろう」と何度も悔しい思いをしました。いつのまにか楽しく踊る事を忘れてしまって、毎日の練習やトレーニングが辛く苦しくなっていました。

毎日遅くまでの練習が続き、身体は痛いし、眠い。疲れたから今日は休みたい！何もやりたくない！と心が折

れそうになった事もたくさんありました。毎日頑張っているのに結果が出なくて、母に八つ当たりした事もありました。

友達に遊ぼうと誘われてもチアだからと断る日々に、無性に悲しくなって涙した事もありました。

でも、「チアが大好き!」「絶対に上手になりたい!」「負けたくない!」という気持ちを大切に、私は絶対に諦めませんでした。出来ない事が出来る様になるまで、何度も何度も毎日練習にはげみました。

ある日、先生に「前よりすごく良くなったね」「一番成長した」とほめてもらえました。その言葉が本当に嬉しくて、自分の努力を認めてもらえたと感じることが出来ました。その日から私は、もっと練習を前向きに頑張れるようになりました。どんなに辛くても苦しくても、仲間と支え合いながら、毎日の練習を一つずつ丁寧に取り組みでいきました。

そしてついに、私たちのチームは大会の予選を勝ち抜き「USAナショナルズ」という全国大会に出場することができました。この大会は、野球でいうと甲子園のような大きな大会で、私がずっと憧れていたまさに夢の舞台でした。その舞台で私たちのチームは入賞し、更に全国大会二位を獲得する事ができました!

表彰台に立った時の喜びは、今までの苦労や努力が全部報われたような気がして、やっぱりチアダンスは楽しい!と思う瞬間でした。本当に二位になった事が信じられないほど嬉しかったです。

チアを通して、私は努力する事の大切さ、諦めない気持ちの強さ、仲間と助け合う事の素晴らしさを学びました。夢は絶対に叶う!これからもこの経験を大切に、どんなことにも全力で取り組み、夢を叶えるために努力をしていきたいです。

未来の地球に向けて

蒲生小六年 小山 珠 希

皆さんは、地球温だん化についてどう思いますか。私は地球温だん化を少しでも止めるために、一人一人が地球温だん化について考え、対策を行った方が良いということです。なぜなら、二酸化炭素が少しでも増えることで、地球温だん化が進み、地球の平均気温が上がってしまうからです。

地球温だん化とは、二酸化炭素などの温室効果ガスが増えて、地球の平均気温が上昇する現象のことです。

二酸化炭素は、「火」を使うときや、私たちが「呼吸」をするときに出来ます。その二酸化炭素によって、地球温だん化が進み、平均気温が上がるだけでなく、海面が上昇したり、異常気象がひんばんに起こったりします。このまま一人一人が対策を行わないと、地球温だん化が進み、かん境の変化も出てきます。

対象として三つ例を挙げます。簡単なものなので皆さんも実際にやってみてください。

一つ目は、エコバッグを使うことです。前までは、レジ袋がゴミとして捨てられ、焼きやくされてきました。

燃やす際の火を減らせば、地球温だん化は止められます。これは、一人一人が簡単に取り組める対策です。このような少しの努力で、地球温だん化を止められるのです。

二つ目は、徒歩や自転車での移動を心がけることです。車が走る時、エンジンが燃やされ、温室効果ガスが出て、地球全体の気温が上がります。徒歩や自転車での移動では、温室効果ガスがでないので地球温だん化を止められます。遠くへの移動は電車などを利用してみてください。

三つ目は、なるべく電気の使用量をひかえることです。電気を作るために必要な石油や天然ガスなどを燃やす量が減らせるからです。家族みんなが同じ部屋ですぐすことも、電気の使用量を減らせるだけでなく、家族団らんの時間にもつながります。地球温だん化を止められるだけでなく、家族の笑顔にもつながり、地球も家族も笑顔になれるのです。

このように、一人一人が地球温だん化について考え、対策を行うことで、少しずつこの状況が改ぜんされていきます。他の人がやってくれるという考えではなく、自分がやるという心がけをしてください。

私は今回、地球温だん化について調べてみて、今までは「対策は難しいんだろうな」と思っていたけれど、エコバッグを使うだけでも地球温だん化を止められるんだ

とおどろきました。また、ふだん何気なく使っている火で地球のかん境が変わってしまうことが分かったので、火の使い方を見直して、対策をしていきたいなと思いました。

一人一人の小さな努力で、この大きな地球の問題を変えられることができます。このままではどうなってしまうか、自分ならどんな対策ができるか、皆さんも自分のできる方法で対策を行い、地球の笑顔を作ってください。



友達を大切に

蒲生小六年 小 高 実芭菜

私は、五年生の時にあった経験をもとにして友達関係について書いていこうと思います。

私は、四年生の時に同じクラスになった子がいて、その子とは、すごく仲が良くあまりケンカをしたことがなかったのですが、五年生になってトラブルをおこしてしまいました。それは、すれちがいのトラブルでした。私は友達から、仲が良い子が私と私の友達の悪口を言っていたということを聞いて、私は、仲の良かった友達とあまり話さなくなりました。けど私は、これ以上自分たちだけでかいけつするのは、むずかしいと思って私の担任の先生に相談することにしました。先生に相談してみると、まずは悪口を言われた人の話を一人ずつちゃんと聞いて、悪口を言われた人からの話を悪口を言った人にその話を伝えて、どう思ったかなど、先生は、一人一人の思い、気持ちを考えて聞いてくれたので、納得しました。私は、その時先生やお母さんから、大切なことを教えてもらいました。一人が悪口を言っていることにきづいたら、他の人にそのことを言ってしまうとそのこ

とがみんなにいきわたって悪い方向に行ってしまうという事です。

その経験があった中で今自分が大切にしていることは、相手の気持ちを考え、自分がされたいやなことは、しないこと、そして友達の相談にのってあげ、相手が安心して学校にかよえるようにすること、あとは自分が色々なトラブルがあったからこそできることは、私が経験したことを話すことです。

私は、みなさんに友達関係は、これからの人生にもつながるということを伝えたいと思っています。私は、トラブルがあった友達とは、あまり遊ばなくなり、話すことも減りました。それも、一人ではなく、その子と一緒にいる、友達も話すことは、減りました。私みたいにあまり関係のない友達も急に遊ばなくなったり、話さなくなったりと、する人も多くいるので、友達関係を大切にしようと思います。大人になっても、友達関係というのは、あるので逆に私は、トラブルがあつてよかったと思っています。私のお母さんもいまでも友達のことやんでいることがあります。なので私は、これからの人生にもつながると考えました。

みなさんも学校などに行くのがいやになったとき、お母さんや先生にあまり言いたくない理由だったら友達に

相談するのが一番だと思います。自分が安心して相談できる友達が一人でもいるとみなさんもよいですね。だからこそ友達関係を大切にしないといけないのです。そのためには、相手へのきづかいが大切です。自分が思っている気持ちと相手が思っている気持ちは、ちがうので私は、友達関係は、ただ友達になって、仲良くなって終りじゃなくそこから友達関係というということなので友達関係ってすごくむずかしいんだなと思いました。

大相模中一年 栗 本 莉 愛

私には夢がある。それは、医療系の仕事にたずさわることだ。小学一年生のころ、祖母の病気をきっかけに、医者への強いあこがれを持つようになった。人々を助ける職業はすごいな。ヒーローみたい。私もだれかを助けてみたいと思った時のことを今でもよく覚えていて。しかし、医者になることは、決して簡単ではない。大学の医学部へ行き、国家試験を受験し、医師免許を取得しなければならぬのだ。さらに、ただ免許を取るだけでは、かん者からの信頼の厚い医者になることは出来ないと思う。かん者の気持ちによりそえる医者になるためには、ものすごい努力をしなければならぬのだ。そのことを知って、私は、なれそうにないやと将来が不安になることが増えていった。勉強がとびっきり出来る訳でもないし、どんな時でも、優しく冷静でいることもできないのに、医者を目指してよいのかと思った。私はこのことを家族に話した。すると母に「人生はこれからなんだから、あきらめなければ何にでもなれるよ。」と言われた。でも、私には綺麗事に思えた。

「あきらめない」という言葉は簡単に言えるけれど、すぐく難しいことだと思っていたからだ。ある日、スマホを見てみると、ある文章が目飛びこんできた。そこで私は、「可能性は無限大だ」と思うことができるようになった。

「天才は努力をする凡才のことである」「あきらめるのはいつでもできる。ただあきらめないのは今しかできない」この偉人の名言を見てそう思ったのだ。生まれた時から天才な人はいない。あきらめなかった人達が夢をかなえていくんだな。と改めて実感した。

今、私は部活も勉強も、一生懸命取り組むようにしている。部活では毎日コッコツと練習に取り組むことが大切だと思う。思うようにうまく走ることができない日や、自分より早く走れる友達をうらやましがってしまう自分がみじめに思ってしまうこともある。でも自分のベストを出すために努力する経験は、お金では買えない価値だと思っている。どんなにきつい練習でもあきらめない力、協力する力、相手の気持ちを考える心も身につけられると思う。勉強の面では毎日の授業をしっかり聞いて、宿題や予習、復習をいままで以上にがんばろうと思っている。得意な教科もあれば苦手な教科もある。特に数学は、昔から苦手意識があり、何度もつまずくことがある。で

も、そのたびに、「医者になりたい」という夢を思い出し、自分を高めながら努力している。今までしてきた、すべての経験は、どこかで必ず活きると信じている。これから先、夢をかなえるためには、もっともっと高いかべが待っていると思う。部活、勉強、高校受験、大学受験など。でも私はそのすべてを、将来の自分につながっているとって、覚悟をもって受け止めたい。いつか誰かの命を救い、心も支えられる医者になれるようにあきらめずに努力を続けたい。



将来の夢

大相模中一年 小 椋 梨 央

私の将来の夢は助産師になることです。助産師は、妊娠から出産、育児に至るまで母子の健康を支える仕事です。正常分娩であれば医師の指示を受けることなく、自身の判断による助産介助を許された専門職です。赤ちゃんが生まれる瞬間に立ち会い、新たな命の誕生を直接的にサポートできる大切な役割だと思っています。

私は幼い頃から赤ちゃんが大好きでした。親戚に赤ちゃんが生まれた時には、いつも赤ちゃんを抱っこしたり、ミルクをあげたり、時にはオムツ替えのお手伝いをしていました。赤ちゃんの柔らかな肌やプニプニのほっぺ、小さな手足を見るととても幸せな気持ちになりました。そんなときにテレビや本で助産師という職業があるということを知りました。

助産師の仕事は出産に立ち会い、赤ちゃんをとり上げるだけではなく、妊娠中の悩みに寄り添い相談に乗って妊婦さんの不安を取り除いたり、赤ちゃんが生まれてからも母乳指導や乳児の生活や育児に関するアドバイスなどもおこないます。そしてお母さんと赤ちゃんの両方の

命を預かる重大な役割を担うため、責任感の強さや共感力、コミュニケーション能力の高さが求められるそうです。

このような助産師の姿を知って、私も人の役に立てる仕事をしたいと強く思いました。命が生まれる瞬間に立ち会い、お母さんやそのご家族が喜ぶ姿を見られることはとても素敵だと感じています。

助産師になるには、「看護師資格」と「助産師資格」を取得する必要があります。どちらも国家資格であり、資格を取得する為には、大学や短大、専門学校への進学が必要になります。進学する為には勉強が必要不可欠です。中学生の私が夢に近づく為に今できることは勉強を頑張ることだと思います。日々の勉強では、毎日やる事リストを作り、予習と復習は欠かさずにするようにしています。また、本を読んだり動画を見たりして、助産師の仕事についてもっと知るように勉強しています。助産師と看護師の資格を取得するためには、医学や看護についての専門的な知識が必要なので、今からしっかりと基礎を学んでおきたいです。

将来、私が助産師になれば、どんなことがしたいか、どんな助産師になりたいかをよく考えます。お母さんと赤ちゃんの安全を守り、妊娠、分娩そして産後にかけて、

前向きに笑顔で過ごしてもらえような関わりができる助産師になりたいです。「あなたになら任せられる」と妊婦さんやそのご家族に思ってもらえる助産師になりたいと心から思っています。

将来、私が助産師になって、たくさんのお母さんと赤ちゃんが幸せに過ごせるように力になれることが今の私の夢です。赤ちゃんが元気に生まれて、お母さんやご家族が笑顔になるのを支えることができることを想像すると、本当に楽しみです。

私はまだ十三才の中学一年生です。これから大変なこともたくさんあると思います。しかし、いずれ必ず実を結ぶときがくると願い、自分を信じて、今できることから一生懸命頑張っていきます。

「夢」への小さくて大きな一歩

北中一年 飯尾 彩 香

私の将来の夢は「チアリーダー」になることです。

「チアリーダー？」と思った人も多いと思います。私もチアを習い始める前まではそう思っていました。ですが、チアを習い始めてから月日が経つうちにチアに対する想い、考えが大きく変わっていきました。

それは、具体的に二つあります。一つ目はチアを習い始めてからの約四年間で感じたチアの世界の深さです。パフォーマンスを披露する際には圧巻のステージを軽々とこなしているように見えますが、実際あのステージを披露するためには大きく分けて五つの陰での努力を重ねる必要があります。それは「体幹を鍛えるための運動」、「柔軟を極めるためのストレッチ」、「技を綺麗に見せるための練習」、「表情の管理」、「会場を盛り上げるための声出し」です。中でも「技を綺麗に見せるための練習」ではアームモーションという腕でとるポーズだけでも三十個以上、その三十個の中でも「フィスト」と呼ばれる手のひらを握る向きも親指が前か、小指が前かなど細かい違いもあるのです。キックやジャンプにも様々な種類

があります。がどちらも一回で出来る事ではなく、地道にコツコツ継続していく事が綺麗な技に繋げる小さいようで大きい一歩なのです。これが実際に私がチアを習って感じたチアの深さです。二つ目はチアの事を好きになれたからこそ感じた、チアの魅力です。チアと言えば、「笑顔で一体感がある」というイメージが強かったです。が一人一人に注目してみると表情や振りの緩急の付け方などしっかりとそれぞれの個性が鮮やかに表れていることに気付けます。誰か一人が欠けてしまうと振り付け、フォーメーションにも影響が出てしまう反面、自分達の中の最高を見せることが困難になってしまいます。虹ももし、一色でも欠けてしまえば虹は虹でも本来の美しさをそのままの状態で表すことは出来ません。チアも同じで一人一人が表す、一色の個性が全色揃うことで輝かしいステージになるのです。これが私が思う一番のチアの魅力です。この他にもチアには達成感を味わえたり、成長を目に見えて感じる事が出来たり、人の笑顔を作る事が出来たりとチアだからこそその魅力は数え切れない程あります。もちろん時には苦しくてめげそうになってしまいう事もあります。ですがそれ以上にチアの魅力、楽しさ、やりがいとはとても大きいのです。これがチアリーダーを目指したいと思える最大の理由だと感じています。

平和で幸せがあふれる世界を目指す

光陽中一年 大曲 佑 奈

この作文を通して、改めてチアリーダーに対して尊敬の気持ちを持つことが出来ました。「チアリーダー」という職業において周りの存在はとても大切だと思います。だからこそ周りの一人一人を大切に、日頃から一人でも多くの人に笑顔になってもらえる様、後ろを見るのではなく常に前を見て過ごしていきたいです。また、人から認められて終わりでなく、そこからさらに自身を認められるところまで辿りつけるように、今という夢を叶えるためのバネを日に日に深く押していきたいです。そしてその時に一緒にバネを押してくれた人に恩を返していくために夢がもしも叶ったとして、そこで止まらずに努力し続け、より良い時間を見てくれた方に届けていきたいです。そのために部活動や勉強、そしてチアの両立を心がけ、自分が進める夢への最大の一步を一日一日進んでいきたいです。

殺人や戦争のニュースを見ると、「どうやったら世界中の人々が幸せになれるんだろう。みんなが幸せになれる世界はないのかな。」と考えることがあります。そこで今回、この作文を書くことをきに、「どうやったら世界中の人々が嫌な思いをせず幸せに暮らせるのか」について考えてみました。

一つ目は、「集団で特定の人を攻撃しない」ということです。世界には何十億という数の違う価値観を持った人がいるので、その中で自分と相性が悪い人が出てきてしまうのは仕方ありません。では、そういう人達とどうやって関わっていけばいじめに発展しなくなるのでしょうか。私は、友達にその子の悪口を言って、共感者を探すことをやめればいいと思います。そうすれば、集団で特定の人を攻撃する「いじめ」の形が形成されにくくなると思うのです。

二つ目は、「全ての人に平等に接し、相手の個性を尊重する」ということです。自分が好きなものを嫌いと言う人もいれば、自分が嫌いなものを好きと言う人もいて、

なんなら自分が全く興味の無いものを好きという人もいます。他にも、自分と話す言語が違ったり、肌の色が違ったり、強気な性格の人かもしれないと控えめの性格の人もあります。こういう人達と関わる時に大切なのは、たとえ自分と違う部分があっても、それを良いこととらえ、相手を尊重することです。そうすれば、いじめも差別も少なくなると思うのです。

三つ目は、「ウワサや偏見で相手を判断しない」ということです。「あの子、昔いじめられてたらしいよ。」「あそここの国の人って態度が悪いイメージあるよね。」など、自分が実際に経験したわけでもないのに、私達の体には知らない間にたくさんさんの偏見がしみついています。さらに恐ろしいのは、この偏見を信じ込む人が多く、本当は違うかもしれないのに偏見だけで相手を判断してしまう人が多い、ということです。では、どうすればこの偏見から私達は解放されるのでしょうか。私の考えは、まず人から「○○らしい。」と言われても、その情報をすぐのみにしない、そしてその情報を他の人に広めない、ということなんです。そうすれば、あなたが新しい偏見を手することは無くなるし、万が一あなたがウワサを聞かされても、あなたがその情報を新たに広めなければ、他の人が新たに偏見を入手することはなくなります。これ

らのことをすれば、ウワサが広まることを止められるし、いじめも差別も無くなると思います。

最後に四つ目は、「我慢しない」ということです。これまで私が提案してきたものは、人によっては自分の性格を殺してまでやる必要があるかもしれません。人というものは、いつか我慢の限界が来て爆発してしまうものです。それは新しい問題を作り出すということになります。それは新しい問題はみなさんに何が言いたいかというと、「爆発する前に相談をしてほしい」ということです。ですがここで気を付けてほしいのが、ウワサが広まりやすい所で相談をせず、先生や相談所の人などに相談をしてほしいということです。そうすれば、ウワサが広まることもなく、みんなのストレスも無くなると思うのです。このように四つの案を出しましたが、他にも、欲張らない、助け合うなど、まだまだ考えられることはたくさんあると思います。みなさんも、平和で幸せがあふれる世界を目指すために、私と、何か考えてみませんか。そこで、みなさんに知っておいてもらいたいことがあります。「幸せ」とは、大きなことでなくてもいいのです。友達と笑い合ったり、おいしいご飯を食べることができたり：自分が幸せだと思ったことは、どんなに小さなものでも「幸せ」といえるのです。

いつもの道・いつもの声

東中一年 山田 光希

「おじちゃん」と学校の帰り道だった僕は近所のおじさんと呼んだ。聞こえないかなあとおじさんの後ろ姿を見ながら自転車を止めた。少し距離が離れていたからだ。きつと夕方の散歩中だ。「おうっ」と片手をあげてくれた。聞こえた、僕も手を振り返してまた自転車をこいだ。小学生の頃は、夕方家の前で遊んでいるといつでもおじさんに会えた。おじさんは僕の家の低い屋外壁に座って散歩の休憩をしていく。僕は隣に座って学校の話聞いてもらったりしていた。天気の良い夕方は、犬の散歩中のおばあちゃんやウォーキングの近所の人達も一緒に座ってみんな話をしていく。僕は、そこに混じって座るのが楽しかった。みんな僕を「みっちゃん」と呼んでくれるけど、正直なところ名前を知らない人もいた。犬の名前はわかるけど、おじさんの名前は知らなかったりした。みんな「みっちゃん」と呼ぶのにおじさんだけは「おいっ光希」と小さいころから、ずっと呼び捨てだ。僕が遊びに夢中になって、おじさんに気がつかなかったりすると「おいっ光希、あいさつはどうした」と怒られたりもし

た。でも僕は、呼び捨てで呼ばれても怒られてもおじさんが大好きだ。おじさんの家には、みかんの木があって実がなると「光希一緒にとりこい」と呼んでくれる。しかもメダカを孵化させて沢山育てているので「バケツ持っついてこい」と呼ばれて、おじさんの育てたメダカをもらったりする。僕の家でも大切に育てているがおじさんのように増やして育てる事がなかなかできない。それでも毎年、水換えのしかたや餌やりのアドバイスをしてくれながら僕にくれる。いつか上手く飼育してみたい。

僕が中学生になってから、部活などで帰宅が遅くなり、会える事が少なくなった。おじさん、元気かなあとき々気にかかる。一緒にかけっこをしたり、バドミントンの相手をしてくれたり、親戚のおじさんのようにかわいがってもらってきた。物知りなおじさんの話を聞くのがとても好きだ。僕の住んでいる地区は行事などで近所どうしの交流が多い方だと思う。草刈りや道路清掃をしたり、祭りや体育祭に参加したり、小さい頃から楽しかった。近所の方々はみんな顔見知りだ。でもその中でもおじさんは特別かわいがってくれた大切な存在だ。

夕飯の時、父が「おじさんが、光希が『こんにち』ってあいさつしていったぞってほめてたよ」と話してくれ

た。「こんにちは」じゃなくて「おじちゃん」って呼んだんだよと言うと、「じゃあ『おじちゃん』が『こんにちは』に聞こえたんだね」と家族で笑った。これからおじさんは僕の家の前を散歩すると思う。見かけたら、また話を聞いてほしい。中学校の事、部活の事など話したい事は沢山ある。おじさん、ずっと元気でいてね、「おいっ光希」っておじさんも僕を見つけたら呼んでね。



憧れを超えて

光陽中一年 篠田小陽

「私は、水泳で世界一になりたいんだ。」

私は、水泳で世界一になる。きっとこの先もこの思いは、変わらない。だって、この思いが、この夢を志したあの日から、変わったことは、一度もないから。だから、この思いと夢が誰かにバカにされても、くじけずまっすぐに進んでいける自信がある。でも、この言葉にだけは、そう思うことは、できなかった。

「ほとんどの人間が、夢をあきらめて生きていくんだぜ。おもしろえよなあ？だからさあお前も。早くそのくだらない夢、あきらめちまった方がいいぜ。そしたら、後でくるしくもなんねーし。」こう、言ってきた同級生がいた。その時私は、「ああ、バカにされてるんだなー。」と思った。そして、その同級生の言葉には、何も言い返せなかった。

「世界一になるー。私は、池江璃花子っていう日本の天才スイマーを超えて、世界一になってやるから。」私は、そう、冷たい声で言い返した。多分、これぐらいしか言えることがなくて、悔しかったんだと思う。だって、

この時私は、全国大会・JOCに、出場したものの、結果は、下から数えて何番目とかいう、誇れるようなものではなかったから。その日の夜、私は、悔しさとなさけなさで泣いた。バカにされた時、もっとがんばりたいと、憧れを超えたいと、確かにそう思った。でも、今の自分には不可能だと感じてしまった。そのふがいなさに、腹がたった。

その、次の日からだろうか。私は、人が変わったように、努力をし始めた。もともと、小学四年生で選手になった私は、年々い的にはもう終わりと言われていた。でも、それを全部くつがえして、全国の舞台までたどり着いた私に、ほぼ、不可能は無い。そう思いながら泳ぎつづけて、向かえた春の全国大会―。結果は：全国大会「決勝8位入賞」だった。うれしくて、ただただうれしくて泣いた。でも、ここで満足はしないし、できない。そう、私の夢は、世界一になること。今年の夏―。ねらうは優勝。ただそれだけだ。「勝ちたい」・「負けたくない」この思いで優勝する。そして来年の日本選手権に出場して、そこでもまた優勝。私は、この世界の常識をくつがえす天才になりたい。憧れは、私にとっては超えるもの。憧れに並んで、肩をそろえて歩いたり、そんなことをしても、満足はできない。「あこがれ」だからこそ超える。

超えれば、またきつと次の「何か」が見えてくる。それがたとえ未知でも、全部を超えて、輝いてみせる。だから、今日も私は泳ぐ。
憧れを超えるために。

将来について

大相模中一年 井上 結 穂

私は、将来について、あまり考えたことはない。しかも、夢もまだみつかっていない。

中学校に入ってから、小学生のころよりも夢についての話題が多くなり、とてもあせていた。でも、入学式のときに先生が、「まだ夢がみつかっていなくてもあせらず、これからみつめていけばいい。」と言っていた。

私はその言葉に救われた。あせてみつけず、これからみつめていけばいいんだなと思った。でも、まわりの友達、ほとんどの人が夢をもっていた。なので私は、少しずつだけ、夢を探してみることにした。

ネットでけん索してみたり、今、自分が好きなことやとくいなことなどを想像してみたりもした。でも、どれもピンとこなかった。お母さんにも、「夢とかないの。」と聞かれたことがある。でも、いつも私は「うーん。なかなかみつからないんだよね。」と話している。「なかなか好きなこととかとくいなことないの。」とお母さんに聞かれた。「あるんだけど、なんかねー。」と私は答えた。小学生のときとかは、「パン屋さん」や、「お医者さん」

「ロールアイス屋さん」や、「ダンサー」など、いろいろな夢をもっていた。でも、小学生の六年生の最後らへんでは、夢がなかった。でも、がんばって夢を探していた。けれど、みつからなかった。

でも、私は夢はないが、こうしてみたいな、なっていてほしいなということがあった。それは、幸せな家庭を築くことだった。私は小学五年生の九月、病気でお父さんがこの世を去った。お父さんが亡くなってから一週間ぐらいは、悲しかったりさみしくて夜にいつも泣いていた。すごく苦しかった。でも、一番苦しいのは多分お母さんだ。でも、いつも明るくて、家のことを一人でこなしている。絶対に苦しいはずなのにそんなことも言わず、いつも私と弟のことを支えてくれていて、私達がやりたいことはそっ先してやってくれたり、やらせてくれたりする。去年の六月も、家族でペットがほしいねと話していた、八月にペットを家に迎え入れた。そのペットのお世話、ほとんどお母さんがやってくれている。私は将来、そんなお母さんみたいに家族を支えられるような存在になりたい。そして、大人になったらしっかりとお母さんに恩返しをしたい。今からできることは、お手伝いだと思う。なので、これからはもう少し家のお手伝いを積極的にやっていききたい。

私の夢はまだない。でも、将来はお母さんみたいな、努力ができたり、まわりの人を支えられることができる存在になりたいなと思った。そのために、まずはまわりの人のお手伝いや、困っている人がいたら助けられるように、積極的に声をかけにいたり、人がいやな言葉や、されたらいやなことをしないように相手の気持ちを最優先し、相手が言われたり、されたらうれしいことをしていきたい。



私の将来

東中一年 宮川 琴 羽

私は将来NGO団体で働きたいです。少し前まではODA団体で働きたかったのですが、ODAは資金で活動しているため行く場所が限られてしまうのではないかと考えたので、市民が中心になって課題を解決できるNGO団体で働きたいと思っています。

きっかけは、六年生だった時の社会の授業です。私達は平和で食料がたくさんある中、どうして世界には、市民が悪いわけではないのに食事をする事ができない人がいるのだろうと疑問をいだきました。そして先生がNGO団体に入っている友人の話をしていました。その中で一つ気になる言葉を耳にしました。「自分たちは平和に暮らしているのに、困っている人がいるのは平等ではない。」私はこの言葉に強く共感しました。たしかに今の世の中「平等」という言葉を大切にしているのに暮らして平等ではないって言葉は、あまり聞きません。それは平等ではないのでしょうか。今、世界では約七億三千五百万人が飢餓に苦しんでいます。今、世界では約三億三百万人が教育を受けられていません。自分ではあたり

まえのことがあたりまえではない人がいたと知ってから、今も苦しんでいる人に苦しまない自由なくらしという新しい世界を見せたいと考えるようになりました。それも自分の考える自由なくらしではなく、住民が考える自由なくらしです。住民と暮らしして気づく大変さは自分たちでは考えられないようなものではないのかと思うほど私がそのような人達を救いたいと強く思いました。

例えば、百円募金しただけで千五百八十リットルの水がきれいになります。百円募金するだけで、きれいな水を飲めなくて困っている人が何十人の子どもや大人を救えます。しかしそのお金を本当に人々を救うのにつかっているか分かりません。だからいつて確認してみたいと感じたからなってみたいというのも一つの目標です。そしてもっとこの子たちを救いたいという気持ちになるようなとり組みをしたいです。

これらの理由から私はNGO団体で働きたいです。世界のくらしを平等にするため、そして一人一人の少しの気持ちで世界を平和にすること。それが私の将来の夢です。

「SDGs」それは持続可能な開発のための十七の国際目標。誰しも耳にしたことがあるだろう。世界では、そんなSDGsに対する様々な取り組みが進められている。これからの未来を考えたとき、私は、少し疑問に思うことがあった。それは、「その製品をなにでつくるのだろう。」という疑問だ。

例に電気自動車を挙げよう。電気自動車の主要な素材には、リチウム、コバルト、ニッケルなどのレアメタルが使われている。レアメタルとは、産出量が少なく、流通量が少ない金属の総称である。そう。元から地球にある量が少ないのだ。つまり、今地球にある限られた量を採り尽くしてしまうと、未来でそれ以上の製品をつくることは出来ないということになる。それではSDGsの十五番である「陸の豊かさを守ろう」が達成出来ていないと思ふ。

それならば、「陸の豊かさを守ろう」を優先的に進めれば良いということになるだろうか？

そんなに簡単にはいかない。「陸の豊かさを守ろう」

頑張って取り組む

栄進中一年 塩原悠夢

を優先してしまえば、逆に七番、「産業と技術革新の基盤をつくろう」が達成出来なくなってしまうだろう。何故ならレアメタルは電気、電子機器や液晶、バッテリーにも使われているからだ。リサイクル出来ないか企業の方も考えたようだが、かなりの高コストで、そもそも使われているといってもかなり少量のため採算が取れず、その結果十分に普及していないのが現状だ。

これから先の未来、レアメタルはこの地球から掘り尽くされてしまうだろう。だから私は、レアメタルを使わなくてもいいような技術をつくらなければならないと考える。だが、一人で解決できるわけではない。このことから、国際的な取り組みが必要だと考えた。レアメタルは、地球にある量が少ないにも関わらず、リサイクルしにくい。このままでは、SDGsの目標を達成するどころか、逆に達成から遠のいてしまう可能性があると思う。だから、急がなければならない。SDGsは、二〇三〇年には達成すべき目標としてつくられたのだから。

私は、今年から中学生という新しい道を進み始めた。制服登校や部活、新しいことに少しずつ慣れてきたこの頃、私は頑張っていること、頑張りたいことがある。

それは、勉強だ。授業では小学校で習ったことをもとに勉強している。そのため、わからないところが出てきて、復習することが当たり前になってきた。小学校では、復習しなくてもわかることが多かったが、中学校では復習しないと理解が深められなかった。そのため、以前よりも先生の話をしっかり聞き、教科書に大切なところをメモしたり、ノート作りをていねいにしたりすることができるようになってきた。それでもわからないときは、家族に教えてもらったり、家庭学習で行い、しっかり復習することができた。その家庭学習にも、私は力を入れている。小学校からある家庭学習は、宿題でたまにしか取り組むことはなかったけれど、中学校では、毎日取り組むことが当たり前になっている。もともと好きというわけではなかったが、今では、自分なりにノートにまとめることが少し楽しくなっている。大切なところを目立

たせたり、練習問題の理解を深められるようにしたり、これからも工夫したりして、より良い家庭学習になるようにしていきたい。

中学生の勉強とともに、もう一つ意識するようになったことがある。それは、移動教室だ。中学校では、各教科ごとに先生が変わり、移動教室が多くなった。校舎が五階と階数が多くなったこともあり、はやく準備しないと時間に間に合わなくなってしまふ。そのため、前の授業が終わるとすぐに片づけをし、準備をする習慣がついてきた。最初の頃は、時間ギリギリになってしまふことが多かったけれど、今では余ゆうを持って移動することができている。はやく移動することができると、二分前無言着席や学習もでき、時間をうまく使うことができている。時間をうまく使って授業前に学習ができると、復習や予習などの時間にあてられ、授業の理解がより深められるようにしている。

そして、私がもう一つ頑張っていることがある。それは、委員会や係などの仕事だ。私は今、生活委員会と社会係を担当している。生活委員会では朝のあいさつ運動を行なっている。前まであいさつは自分からしたりすることがあまりなく、少し不安だった。朝いつもより早く起きるのも大変だったが、自分からあいさつをし、それ

を返してくれることがとても嬉しかった。そんなこともあり、前よりも大きな声で、相手の目を見てあいさつすることができていると思う。そして、あまり気の向かなかった早起きも、今ではいやではなくなってきた。その他の係やそうじ、給食当番なども、任せられた仕事を責任を持って取り組むことができている。自分のことと仕事をやるのは大変だが、計画を立てることで効率よく行うことができている。

また、私はこれから頑張りたいことがある。それは、提出物だ。一学期の期末テストでは、提出物がたくさんあり、どう進めていいのかわからず、効率よく進めることができなかった。そのため、次回のテストからは、計画を早めから本当にできるように立てて進めていきたいと思っている。

頑張っていること、これから頑張りたいことについてや、これからの目標について考えることができた。これからも、頑張っていることを続け、目標に向かって頑張っていきたいと思う。また、すべてのことに対して、全力で最後まで取り組み、毎日を大切に笑顔で過ごしていきたい。

夢を叶えること

光陽中一年 千葉 彩 寧

「私も楽器を上手に吹いてみたい。」

私がそのように思い始めたのは、小学校四年生のことでした。それまでずっとピアノを習っていたけれど、音楽を聞くことが趣味だったり、興味を持ったりしたことはありませんでした。

そんな時、母といっしょにコンサートを見に行くことになりました。その時も音楽は好きではなかったのですが、きっと退屈するだろうと思っていました。しかし、実際にコンサートを聞いてみると、楽器ひとつひとつに力強さや華やかさがあり、どの楽器も輝いて見えました。楽器の迫力に圧倒され、音楽の楽しさに気づかされました。

しかし、音楽を好きになっても、急にピアノが上達するというわけではなく、今までと同じような日々が続きました。学校の友達には私よりも難しい曲をひくことができたり、そのようになるために努力したりしていました。なぜ私はみんなのように一つのことに対してとことん頑張ったり、突き詰めたりすることができないのだろうと思うときもありました。そのまま、何もすることのない

まま時は過ぎていきました。そんな時、私の今までの気持ちを変えようとした。そんな時、私の今までの活動選びです。仮入部期間の一日目には吹奏楽部の歓迎コンサートがあったので、吹奏楽部に行きました。コンサートはただ演奏を聞くだけでなく、楽器紹介もあり、とても盛り上がりました。その中で、私が印象に残っていることは、先輩達が楽しそうにしていたことです。先輩達はコンサートのための準備や練習が大変で忙しかったと思いますが、マイナスの言葉は聞こえてきませんでした。その時気がついたことが、

「上達したから楽しいのではなく、楽しんでるから上達していく。」

ということでした。好きこそものの上手なれということわざがありますが、まさにその通りだと思いました。

それから私は吹奏楽部に入部し、練習に一生懸命取り組んでいます。同じ楽器の友達と教えあったり、先輩達にアドバイスをもらったりしながら、仲間と切磋琢磨しているのとより上達しているような気持ちになります。今は早く先輩に追いつき、同じステージに立てるように努力することが目標にしています。いつかステージに立つことができたなら、先輩達が歓迎コンサートで感動させてくれたのと同じように、今度は私が感動させられるよう

になりたいと思います。

夢というのは、難しく、複雑でどこか遠くにあるもののように感じていたけれど、身近なことから一歩ずつ近づいていけばいいということが分かりました。誰でも叶えられるというわけでもなく、努力しても叶えられないかもしれない「夢」を私は人一倍努力して叶えようと思います。すぐに頑張った成果がなくてもあきらめなかった人だけ夢を叶えられると思うので、今回の経験から学んだこと、感じたことを頭に入れて生活していきたいです。また、この経験は他のことにも繋がることだったと思うので、次、何かに挑戦する時には活かしていきたいです。

夢を叶えられる場所

優秀作品

光陽中二年 福田 美 結

息を吸う音が重なる。指揮者の一振りから始まる十二分間の演奏。私はそれに、ありったけの想いを込めた。

私は吹奏楽部に所属している。毎日のように楽器の練習をし、主にコンクールなどの大会に向けて活動している。昨年、入部して数ヶ月だった私達は、一年生（今の二年生）だけでDの部という部門に出場することになった。入部した当時、楽器の経験者はほとんどおらず、右も左もわからないような状況で部活動をスタートした。各楽器、先輩や先生に基礎を教わり、たくさん楽器を吹く日々。すぐには慣れなくて、とにかく必死に吹いていたのを覚えている。六月頃に東部支部発表会を終え、コンクールに向けて本格的に動きだした。楽譜が配られ、曲を聴いた。難しそうで、でも楽しそうで、心が躍り、すぐその曲が好きになった。それから、基礎練習も同時進行で、曲の練習をした。最初の頃はとにかく必死になって吹いていたけれど、部活にも慣れてきて、吹くのがどんどん楽しくなっていた。ただ、楽しく吹いているだけではコンクールでいい成績は残せない。いい演奏

をするには、色々なことを考える必要がある。音程、強弱記号、スタッカートなどの、アーティキュレーション。それに合う息の量やスピード。自分が吹いているのは主旋律か対旋律か、それとも伴奏なのか、など考えることは山のようにある。たくさん譜面にメモをして、同じ楽器やパートの皆と曲について話し合った。夏休みも練習録音をして自分達の演奏を聴いたり、先輩にアドバイスももらった。そして迎えたコンクール当日。前の学校の演奏を聴きながら舞台袖で待機をする。不思議とあまり緊張はしていなかった。前の学校の演奏が終わり、いよいよ私達の番になった。それぞれの位置に座り、先生が客席に向かってお辞儀をする。先生がこちらを向き、指揮棒を構える。それと同時に、全員が楽器を構える。息を吸う音が重なった。指揮者の一振りから、演奏が始まった。演奏が終わり、高揚感に包まれながら退場をした。そして、私達は見事に金賞を受賞し、初めてのコンクールは幕を閉じた。

夏のコンクールから七ヶ月。三月に、私達は「定期演奏会」という舞台で、もう一度同じ曲を同じ編成で演奏をした。私にとってその曲は「思い出の曲」となり、また演奏できることが心から嬉しかった。そんな定期演奏会で、私はひそかに抱いていた一つの夢を叶えた。それ

は、「舞台上立つ」ということだ。コンクールや大会で舞台上に上がることはあったが、「舞台上立って人を楽しませたい、笑顔にしたい」という夢であり、本当の意味で叶えたのはこの時だった。定期演奏会、特に三部のポピュラスステージでは、会場が一体となって、皆が笑っていた。舞台の上の人も、客席の人も、全員が楽しんでいた。最高の気分だった。この部に入って、心からよかったと改めて感じた。

コンクールでは、「金賞をとる」という目標、大きくいえば夢を、皆で叶えた。定期演奏会では個人的な夢を叶えられた。そんな私は、部活は「夢を叶えられる場所」だと思う。毎日のようにたくさんの練習で、正直辛い時もあるが、皆の笑顔に触れられる最高の場所だ。夢を叶えるために、今日も私は部活に行く。

大切な匂い

武蔵野中二年 渡部 希実

暖かな春風が私の頬を撫でる三年生の春頃、私はおばあちゃんの家で暮らしていた。

優しい訳では無いが、いつも凜としていて、淡い憧れを抱いていた。おばあちゃんの家はベランダによく日が当たり、洗濯物は優しい香りを纏っていて、洗濯物を畳む時に、洗濯物の暖かさと、良い匂いが部屋を包む。おばあちゃんが鼻歌を歌っているのが好きで、あの時間が途方もなく懐かしく、愛おしく感じた。今も洗濯物を畳んでいけば、懐かしい香りに包まれる気がして、その度に幼い頃の記憶が鮮やかに思い出される。

今年はおばあちゃんの三回忌で、実家の仏壇におばあちゃんの写真が飾られている。手を合わせていても、おばあちゃんがお茶を持って出て来そうだと思っていた。こんな年月日が経っても死を実感できなくて、お焼香をしたりお墓参りをしたりしていても、ぼんやりとしていた。

実家から帰るころには、暗闇が空を覆っていた。家に着くと疲れが来て、布団に潜り込んだ。乾燥機をかけ終

わったばかりで、暖かい匂いに包まれた。でも、やっぱりあの時の匂いはなくて、私の好きな匂いも、おばあちゃんもいないのだと、今まで実感が湧かなかったのにいきなりそう思った。死んでしまったという事実は、心の準備をさせてくれなくて、言いようの無い悲しさと同時に、やけに心が冷静になって、何処に居ても探してしまっておばあちゃんの面影を、断ち切った気にもなった。

今までおばあちゃんは何処かに居ると思いこんで、おばあちゃんの死から目を逸らしていた。でも、おばあちゃんが居なくなっても時間は私に合わせてくれないし、おばあちゃんも生き返ってはくれない。それに、憧れたおばあちゃんはずっと、私が引きずる事を望んでいないと思った。私は、次に実家に帰るときは、おばあちゃんの仏壇に話しかけよう、今まで話せなかった事を話そうと思った。次に実家に戻る時には、少し明るい気持ちで行けそうな気がした。過ぎた事を悔やんでも、戻る事はないから、今からでも変えようと思った。

地球の果て

光陽中二年 国井 ひより

「地球沸騰化の時代が来た。」この発言から二年もの月日が流れた。真夏には三十度を軽々と超えるのが当たり前となった今を生きるみなさんは、地球沸騰化という言葉を知っているだろうか。

世界で共通の言葉となった地球温暖化。人類が活動するうえで大量に放出される温室効果ガスを原因とし、地球の気温が上昇することを地球温暖化という。そして、その地球温暖化の進行による影響が極めて危険な状況であることを「地球沸騰化」と表す。

では、今後の地球沸騰化による人類への影響はあるのだろうか。

最も多く考えられるのは、記録的な高温。それにより生態系において動植物の減少または絶滅。自然災害においてヨーロッパでは乾燥化、一方で異常気象によりアジアでは予測困難な豪雨が増えた。また、海面上昇が発生し、島々は水没の危機に面している。そして人々に多くの影響をあたえたのは電力消費。エアコンの使用頻度が増し、電力不足や電力料金の増加に頭をかかえている人

も多い。

これら全ての影響は、人々が生み出した温室効果ガスがもたらしている。では、日常生活の中で地球沸騰化対策に貢献してみるのはどうだろうか。

まずは、今の身の回りの環境問題について学んでみる事が大切だと考える。

私も最近、ニュースやインターネットで地球沸騰化について調べてみるが増えた。たくさん情報があり、正直なところ不安になることも多い。しかし、現実から目をそらしてはいけない。事実、世界中の至る所で異常気象や災害が起こっており、それがすべて人々の暮らし方が関わっていると知ったとき、自分にも責任の一部があると考えようになった。

たとえば、自分の家でも夏になるとエアコンを使う回数が増える。もちろん熱中症を防ぐためには必要だけど、それがさらに温室効果ガスを生み出す原因になっているのだと思うと、複雑な気持ちになる。自分一人の行動など小さなことのように感じるが、何十億人も人が同じことをしていたら影響は計り知れない。

だからこそ、自分にできることは何かを考えるきっかけとなる。まず、無駄な電気を使わないよう、家族みんなで協力している。使っていない電気はこまめに消す。

冷房の温度を控えめにする。冷蔵庫や電子レンジをあけっぱなしにしないなど、ちょっとした工夫を続けている。また、使い捨てのものではなく、繰り返し使える水筒やエコバッグを持ち歩くようになった。

一方で、自分の無力さを感じることもある。どれだけ努力しても、大きな企業や一部の国が大量にCO₂を排出している現実をニュースで知ると、どうしたらいいのかわからなくなる。しかし、「継続は力なり」すぐに大きな変化を生むわけではないが、継続することに意味があると信じている。

地球沸騰化は、決して遠い未来の話ではなく、すでに自分たちの暮らしの中に起きている問題だ。もし何も行動を起こさなければ、自分の住む地域でも毎年災害が増えたり動植物が減ってしまったりする。私の家族や友達、大切な人たちの日常が脅かされる未来は絶対に嫌だ。未来のために、小さなことでも続けていくことが、自分の「かがやき」なのだと思う。

これから、地球沸騰化の問題について学び続け、自分自身の行動を見直すことを忘れずにいたい。そして家族や友達と協力し、声をかけ合って明るい未来を目指したい。地球に生きる一人として、小さな力でも地球の未来を守るために貢献していきたい。

一年のころ、私は三年生最後のソフトテニス団体戦に出場させてもらった。三回勝負の一勝一敗、三回戦目。勝ったらチームの勝利負けたらチームの負け、三年生は引退。そんな三回戦目。相手は三年生。相手も負けたら引退。実力は私たちのほうが上だと思っていた。最初は私たちがリードをしていた。このまま勝てると私は思った。優勝候補校の相手チーム。このチームに勝てたら、優勝だって夢じゃない。県大会にだって出場できる。私はそこまで思えがいていた。しかし、相手はどんどん調子を上げていき、試合はファイナルまでもつれた。後ろから全員が声をはりあげて、必死に応援してくれる先輩たち。中には団体戦に出場できなかった三年生もいる。試合が終わり優勝候補校の試合はどのようなものかとまわりの他のチームも私たちの試合を見ていた。相手の応援の声だっすごい。私はまるで、決勝戦で戦っているような気持ちだった。胸はドッキドキで心臓が口から飛び出しそう。体はとても熱かった。汗がだらだら流れて少し震えていた。ファイナルまでいってしまったことか

私はかなり緊張していたと思う。必死になってあまりおぼえていない。相手は一年生になんかに負けたくないという三年生の意地があったのだろう。だけど、私たちだって小学生のころから努力してきた経験の意地がある。言葉通りの「負けられない戦い」だった。最後の最後のポイントまでもつれて私たちは負けた。私たちはきっと真っ白になっていただろう。相手に殺されたような気持ちだった。いろんなものを背負って戦ってきたのが一瞬にして壊されたような感覚。これが「絶望」なのかと今では思う。負けた瞬間から涙が溢れそうだったが、泣いたら敗北を認めてしまうような気がして泣きたくなかった。みんなのもとへ戻ってからも申し訳なさど悔しさで何も言うことができなかった。歯を食いしばっていないと口を開いたら涙がでそうだった。すると、三年生の先輩が「私たちのために一生懸命戦ってくれてありがとう。」といって肩に手をおいてくれた。その言葉を聞いた瞬間、我慢していた涙が溢れてしまった。その日は、家に帰ってからも、布団にくるまってからも悔しさと涙であふれていた。今でもこのことを思い出すと涙が出てきそうだ。きっと一生わすれないだろう。

私はどの大会に出ても毎回悔しい思いをしている。自分がいっかりやりきれたと思える大会は四年生からやっ

てきた中で一回しかないと思う。特にこの試合が一番悔しかっただろう。中学二年生になってから、ソフトテニスはいまうまいかなということばかりだ。だけど、もうすぐまた、三年生が引退して次は私たちの番だ。今度は先輩として部活を支えていかなければいけない。正直いってしまうと自信なんかこれっぽっちもないけど、逃げてしまいたい気持ちもあるけど、この悔しかった試合を思い出して少ししかない勇気をがんばって奮い立たせて挑戦して戦う。きっと悔しい思いをこんなにした経験はこれから戦う相手にはだれにも負けないだろう。私は悔しさを武器に今日も悔しい涙をうれしい涙に変えるため戦っていく。



挑戦の本質

光陽中二年 甲 斐 颯 介

山形から引越して早六年、今でもあの先生のことは鮮明に覚えている。

小学一年生の頃、幼稚園で仲の良かった友達とも別れクラスになじめずにいた。小学校で一番最初にある大きな行事といえば運動会だ。僕はもともと走ることが苦手だったのだがリレーの補欠として運悪く当日走ることになってしまった。他のクラスでは走るが遅い理由でいじめが起きたケースもあったらしい。僕は足が遅い理由でいじめられたらいやだと思ったのか、ずっと教室にこもっていた。しかしそんな時に声をかけてくれたのが「石井先生」だ。石井先生は優しい表情で、しかし、はっきりと僕にこう言った。「不安や緊張する気持ちも分かるけど、挑戦しないであきらめるのは違うんじゃないかな。」と。その後無事リレーでは一位を取ることができ、クラスのみんなからも祝福された。その時初めて挑戦することの大切さを学んだ。しかし挑戦するということは時に失敗することもある。

僕が通っていた学校は、ダンスの発表会という運動会

に継ぐ大きな行事があった。僕は運動会の時の「挑戦」をしたいと思い、セクターを任された。振付も難しくかなりハードな練習だったが運動会の時とは違い、自ら立候補したため、最後まで務めを果たさなければと思い、一生懸命練習した。クラスのみんなや石井先生からまたくさん励まされた。

待ちに待った発表会当日みんなで円陣を組み、舞台に立ち上がった。たくさんの人が見守る中、今までの成果を出そうと全力で踊った。自分がゾーンに入っていくのが分かり、踊るのが楽しかった。そして上手く踊れたと思っていた。しかし途中から自分だけずれていたのだ。運動会の時とは違い静まり返っていた。その時のクラスの僕に対する視点はやけに冷たく感じられた。

翌日、僕は発表会で失敗してしまったこと自分がセクターになったことを後悔して落ち込んでいた。しかしクラスメイトには予想外のことを言われた。「ダンスかっこよかったよ」「私たちの分まで頑張ってくれてありがとう」「また次があるからリベンジしよう」などたくさん温かい言葉をもらった。その時初めて挑戦の本当の意味が分かった気がする。その後石井先生には「挑戦というものは時に失敗したり負けたりするけれど、君が挑戦したことに意味があるんだ。そして君はそのことにク

私が頑張っていること

平方中二年 金森 穂 真

ラスの誰よりも早く気づくことができた。大事なものは結果ではないんだ。」と僕に言ってくれた。この言葉は今でも鮮明に覚えている。石井先生のおかげで人生が変わった気がした。石井先生は本当の意味で僕の味方だった。それから僕が転校して一年がたった小学三年生の頃のことだ。玄関の所に一枚の手紙が入っていた。石井先生からだった。「お元気ですか。小学三年生になった君の姿が見たいです。小学一年生の時に話した挑戦のことについておぼえていますか。挑戦はすることこそが一番大事です。引越し先でもたくさんすることに挑戦し、どこまでもつき進んでいってください。」と書かれてあった。こちらこそあの時はたくさんのお話を教えてくださりありがとうございます。僕はこれからもたくさんの方に挑戦します、と言いたい。

「あなたが頑張っていることは何ですか？」よく聞かれるこの質問が私は苦手です。「これを頑張っています。」と、自信を持って言えることが思い付かないからです。だからといって、何もしていない訳ではなく、一応習字は長く続けています。小学二年生から始めて、今年で七年目になります。しかし、「習字を頑張っています。」というのは少し恥ずかしく感じてしまいます。たった週に一回だけの習い事で、スポーツのように汗を流すわけでもないし、何より習字の教室や学校のクラスには、私よりうまい人がたくさんいるからです。

運動部で必死に練習している友達や、絵画、吹奏楽で賞を取るような特技を持っている友達を見ると、こういうのが「頑張る」という事なんだろうなと思っています。それに比べると、こんな事で頑張っているなんて言えないなあとためらってしまいます。

でもこうやって改めて自分の事を考えてみると、七年続けるってけっこう長い時間だなとも思います。一年間が四十八週間と考えると三百三十六回も通っている事に

気が付き、驚きました。

週に一回だけと言っても、その一時間は自分の字と真剣に向き合ってきました。お手本と見比べながら、どうしたら近づけるかを一画一画丁寧に考えて書いています。何枚も練習し、手のひらが汗でびっしょりになります。それでも思うように書けるようにはなりません。お手本を見返して、イメージをし、また新しい紙に向かう事を繰り返します。

習字の先生は、半年に一度、私達が練習した硬筆、毛筆の紙をまとめ、とじて渡してくれます。半年前の字と最近の字を比べると、「ちょっと形が良くなっているかも」と変化に気付くことができます。小さな変化ですが、確かに嬉しい気持ちになります。

その半年に一度の練習用紙の返却は、両親もとても楽しみにしており、一枚一枚じっくりと見てくれます。習字のことなんて全然詳しくないのに「この字はいいね」とか、「この字はちょっと小さすぎじゃない？」とか好き勝手なことを言ってきます。でも、私が書いた字に興味を持っていることが伝わってきて、少し恥ずかしいけれど、それも嬉しく感じます。

そうやって考えていくうちに、中学一年生の合唱祭の時の事も思い出しました。曲名を観客に分かるように大

きな紙に書く係が必要になり、筆で書かなければいけないので、皆は自信がないと嫌がっていました。そんな中、友達に私に声をかけてくれました。重要な係だし、私よりもうまい友達がいるので、正直どうしようか迷いましたが、「私がやらなければ」という気持ちで引き受けました。本番で実際に私の書いた字が使われた時は、自分の自信にも繋がりました。

たった週に一回だけの習字。それでも最低週に一回は必ず自分の字と向き合い、お手本に近づけるように集中して努力してきました。地味で目立たないことですが、自分なりに一歩ずつ進んでこられたのかもしれないと思えてきました。

親に「どうして私に習字を勧めたの？」と聞いてみました。親は「今はスマホやパソコンで多くの事ができる時代だけど、字を書くことはどれだけ時代が変わっても絶対に無くならないし、皆があまり力を入れないからこそ、それができる人は強みになるんだよ」と教えてくれました。そんな思いで、私に習字を勧めてくれたことを知って、誇らしい気持ちになりました。これってスポーツや絵画や英会話などにも負けないくらい素敵なことなのではないかと思えてきました。

作文で自分について整理して考えてみると、新しい一

面に気付いて、新鮮な気持ちになりました。また「自分、頑張っているかも？」と思えてきて、嬉しくなりました。



思い出の由来

武蔵野中二年 新原 くるみ

ランドセルを背負って、二年たった日のことだった。国語の授業で調べた事については今でもはっきりと覚えている。

国語の授業で自分の名前の由来を調べることがあった。先生が「自分の名前の由来について親に聞いてきてください。」と言った。私はその時は八歳でその時はまだ自分の名前の由来を知らなかった。他の子の名前は漢字だけれどなぜ自分はひらがなのくるみという名前なのかよく考えた。

家に帰って真っ先に両親に聞いた。早く意味を知りたい、早く意味を知りたいと、両親に「なんでくるみっていう名前なの？」と聞くと少し驚いていたが、「くるみの名前の由来は、来る未来という言葉の最初の三文字をとった意味なんだよ。」と教えてくれた。

そして私は目が光るように「じゃあなんでひらがなのの？」と聞くと「ひらがなの方が丸っぽくて柔らかい印象があるからだよ。」と言ってくれた。私は心はずむようだった。

緊張はしなかった。みんなの前で発表する時、自信をもってはっきりと言えることができた。発表を終えた後は大きな拍手をもらえ、みんなに認めてもらえたような気がした。その事は今でも忘れられない。

みんなにも名前がある。それは親が一番最初にくれたプレゼントのようなものだと思う。その親からもらった由来のように「来る未来」という立派な人になり、ひらがなのように優しく柔らかな印象で両親がくれた名前に応えられるような人になっていきたい。



「かけがえのない時間」

北中二年 永堀杏実

私は、今部活に力を入れています。私が所属している部活は日本伝統文化部です。日本伝統文化部は、琴を基本とし、茶道、華道も月に一回程行っています。私は一番好きなのは琴の時間です。

琴は、知っている曲から聞いた事のないような曲まで様々な曲を演奏できます。私が、琴をしていて、一番達成感が得られる瞬間は全員のリズムが合うときです。これは、きっと琴でしか味わえない感動です。最初は、全く譜面が読めない状態でも一ヶ月もすると大体は読むことが可能です。

他には、友達、先輩、後輩との時間です。私の部活は先生を含めて、五十人近く所属しています。その中で私の学年の人は、二十人です。これを聞いて、多いか少ないかは人それぞれ違うと思いますが、私は、とても多いと思いました。私は、みんなの、練習中とふだんの学校での様子のスイッチの「切り替え」がすごいと思います。ふだんは、元気いっぱい、とてもふざけていて、面白くて、いつもみんなを笑顔にしてくれるAちゃん。

ですが、部活になると、表情が変わり、琴はとても上手で、一人、静かにメトロノームを聞いたりしています。ですが、Aちゃんはいつものスイッチを入れてみんなをまとめたり自分の意見をしっかり持っている芯のある子です。

二人目は、いつもは、すごい静かだけど、部活になると、とても元氣いっぱいで色んな人と話しているBくん。一年生の時は琴がものすごく苦手で、やる気0だったBくんも、「先輩」という立場になってから、毎日、自分で音を合わせたり、Bくんの目標の暗譜まで、あと一歩です。

三人目は、いつも、ダジャレを言っているCくん。みんなを笑わせてくれるムードメーカーです。その子は最近まで、部活よりも友達と話していたりの毎日でした。ですが、一週間前くらいから琴の才能の花を咲かせて、ほとんど全て、一回で弾けてしまう才能の塊です。

日本伝統文化部の特に二年生は個性豊かな友達のおかげでかけがえのない時間を過ごしています。毎日、幸せ、面白さが絶えない私の大好きな日本伝統文化部の仲間です。お互い意見を言い合ったり、改善点を見つけて話し合えるのも一つの「友情」だと思っています。日本伝統文化部に所属して良かったです。私は、これから、日

本の伝統を守り、大切な仲間とかけがえのない時間を過ごしていきたいです。



思いやりと言葉の重み

栄進中二年 松 永 璃 空

言葉には大きな力があります。人をはげまし、背中を押してあげることが出来ます。ですが、逆に人を傷つけて不快な思いにさせる事もあります。いろいろな言葉が積み重なって、人生は変わります。

冗談のつもりで少しからかって、相手が笑っていても、心は傷ついているかもしれません。それに気付かずからかい続けられ、しだいに心の傷は大きくなっていき、やがて相手は生きる希望を失ってしまうかもしれません。では逆に、良い言葉をかけるとどうでしょう。場合によっては、それが背中を押し、前向きに生きていけるきっかけとなるかもしれません。良い言葉をかけ合っていくことで、たくさんの人の人生が豊かに、温かくなるでしょう。

人は時に、誤った行動をしてしまうことがあります。例えば「からかう」という行動には二つのパターンがあります。一つは相手を傷つけたり、苦しめたりすることを目的とした悪意のあるパターン。もう一つは仲が深まることで慣れ合い、相手の気持ちを考えられなくなった

パターンです。二つ目のパターンは、誰もが経験したことがあると思います。僕もそのような経験をしたことがあります。その場では笑っていましたが、後から悲しい気持ちになったことを覚えています。また、僕自身も慣れ合いから友達をからかうような言葉をかけたことがあります。その時は友達を傷つけたなどという気持ちはなく、ただふざけ合って楽しんでいました。しかし「からかう」という行為は自分の気持ちは関係なく、相手を傷つける最低な行為なのだと僕は思います。「親しき仲にも礼儀あり」という言葉があります。どんなに仲良くなっても相手を思いやるという気持ちは絶対に忘れてはならないことだと思っています。これは友達だけでなく誰に対しても同じです。

人権とは、人間が人間らしく生きるために社会が認める権利であり、誰もが生まれながらに持つものです。この世の中には多くの人々が存在します。生まれた場所や環境、見た目や考え方、全てにおいて違い、それは全て個性です。守られる人権があると同時に、人を傷つける権利は、誰にもありません。

僕は不自由な健康な体で生まれてきました。世の中には体にハンデを持った人々も多くいます。そういった人々と出会った時、どのようにサポートできるでしょう

か。現代ではハンデをかかえていても自立を目指す強い

人がたくさんいます。困っていたり助けを求めているとは限りません。まずは状況を見て、助けが必要かどうかをたずねることが大切だと思います。

すぐ手助けするのが優しさとは限りません。どんな人でも思いやりを持って互いを尊重し、認め合う。状況を見極めることが互いの成長につながると思うからです。僕たち人間に上も下もありません。互いに支え合って僕は生きているのです。

仲間の大切さ

光陽中二年 眞島暉学

優勝を掴み取るためにみんなで戦った一ヶ月間。目指していた勝利は果たせなかったけれど、それ以上に大切なものを得ることができました。

五月の下旬に行われた体育祭。新年度になり、新たなクラスで迎えた最初の行事が体育祭でした。私は一年生の頃、体育祭で悔しい思いを経験したからこそ、今年こそは負けない、必ず勝つという思いで臨みました。それは、クラスメイトも、同じオレンジ団として共に戦った三年生や一年生も勝利を目指していた筈です。午前の競技を終え、午後に最後の競技として残ったのが、「みんなでジャンプ」という、クラスの半分ずつが一斉に大縄を跳び、制限時間内で跳んだ回数を競い合うというものです。この競技を迎えるにあたって、どうしてもこの競技では勝たないといけないという状況になっていました。なぜなら、午前の競技の、綱引きでは、団で三位という結果を収めたものの、あとの「台風の目」や、「全員リレー」といった競技では、クラスで最下位という結果になってしまったことで、このまま体育祭が終わってしま

うのかという不安や、オレンジ団の他学年が良い結果を収めている中、自分たちのクラスも何か一つでも良い結果を残してオレンジ団に貢献し、一年生に対しては、団の足を引っ張るような恥ずかしい先輩でいたくないなどの思いがあり、その思いに乗っかる一人一人のプレッシャーも大きなものだったと思います。また、学年での全体練習で行った際、どのクラスの記録も大きな差はなく、拮抗していた上、昼休みや放課後でたくさんの練習を積んでいたのも、「この競技なら勝てる。」と意気込んで臨みました。しかし、様々な思いが相まって練習のときのようにはいかず、学年で断然最下位といった記録に終わってしまいました。正直、すごく悔しかったし、これまでの練習は何だったんだろうと思ってしまう自分もいました。でも、そんなときに自分の心を支えてくれたのがクラスの仲間でした。

「楽しんだんだから優勝でしょ。」

「次また頑張ろう。」

といった言葉が、結果を引きずっていた自分を前向きな気持ちに変えさせてくれました。仲間がいたから、練習を含めた約一ヶ月の体育祭期間を最後まで走り切ることができたと思えます。「みんなでジャンプ」の練習の際には、跳ぶのがあまり得意ではないクラスメイト

の横で、跳ぶのが得意なクラスメイトと一緒に跳んであげる場面もあり、それを見ながら仲間がいることの良さや、仲間の大切さを感じました。

体育祭期間を通して、仲間と一緒に目標に向かって努力することの良さや、仲間の大切さに改めて気付くことができました。今、自分の周りに仲間がいるということは、決して当たり前のことではないので、仲間の存在に感謝し、助け合うことで成長していきたいです。また、それは大人になってからも同じで、今いる仲間も、新たにできる仲間も、大切に作る気持ちを忘れずに、これからも生きていきたいです。

冒険

武蔵野中二年 上妻 柚太

「行ってきます！」僕が冒険に出た瞬間だった。私が小学四、五年生の暑い夏の頃だ。

母が風邪をひき、一人でご飯を買いに行くことになった。徒歩二、三分のとても近い店だ。今だったら、すぐに行けるが、当時は、一人で外に出たことが無かった。僕は、本当に行きたくなかった。「でも行くしかない。」そう思った。

お金をポケットにつっこんで玄関の扉を開けた。空は青かった。でも少しさびしい感じでもあった。歩道橋をのぼって、上から見わした。下には大きなトラックが大きな音をたてて、走っていた。

店についた。券売機で食券を買うところまで来た。言われたとおりに買おうと思ったが、プリンも追加してみた。食券を店員さんに渡して、一人座って待っていた。うどんを食べている人、水を飲んでる人、料理を作っている人、いろんな人がいた。疲れて、魂が抜けたように座っていると、番号が呼ばれた。自分が持っているものと同じ番号だ。商品をわたされて、店の扉を開けた。空

の青が少し濃くなっていた。さっきと同じ歩道橋を反対から上った。さっきは見えなかった、スカイツリーが見えた。振り返り再び歩いた。下ってすぐに家に着いた。家の扉を開けて、また開けて、母がいるリビングに着いた。冒険は終わった。

これまでなんてことない話だと思っていたが、あのときはじめて一人で何かをしたのだ。このとき、一步、大人の階段をのぼったのかもしれない。



雪景色

武蔵野中二年 小船 なつみ

小学生の冬、私は久しぶりに父の実家に行くことになった。ちょうどその日は冬休み期間でもあったので、なるべく家を出たくなかったが、そんな願いは叶わず私は父と早朝に家を出た。早起きが苦手なことからは気分が乗らず、私は行くことが面倒に思っていた。

数時間して飛行機に乗っている時、まもなく父の故郷の北海道に着くと言うアナウンスが聞こえた。地上は見えるのかと窓の日よけを開けると、それは絶景だった。爽快な青い空と太陽に照らされた真っ白な雲。飛行機のいろんな匂いが混ざった独特な香りを感じ、今朝より心が踊った気がした。その後無事に着陸して家に着き、次の日が来るまで休んだ。次の日の朝、私は重い体を起こして目を覚ますために顔を洗った。まだ少し気だるかったから、庭が見える座り心地のいい椅子に座り外を見た。すると外では雪が降っていた。

もちろん、十二月の真冬だし北海道で降る雪は特別ではないけれど、私には魅力的に見えた。パラパラと降る雪と真っ白に塗られた木々、暖かい日差しが美しく庭の

真ん中には私が主役だと言わんばかりに小さな小さな足跡が残っていた。時々ここには夜中にキツネが来ると伯母から聞くと、なんだかその足跡がよりきらびやかに見えた。埼玉では見られないこの景色は、まだ小さかった私にとっては印象的だった。今はもう見慣れてしまったけれど、初めて見た時の感動は今でも忘れられない。私にとって北海道で見た景色は、たまにはここに来てみようかと思うことができた、かけがえのない大切な思い出。

この日のように目の前にある風景に目を向けて感じた気持ち大切にしたいと思った。



努力

武蔵野中二年 神田 琴音

あれは、私が小学四年生の五月にあった、ダンスの発表会のことだ。ある女の子が言ってくれた一言は、今でもずっと忘れることのない言葉だった。

私は、小学一年生の時からずっと憧れている先輩がいる。その先輩はかっこいいダンスの中にも、キレイよく踊ったり、しなやかに踊ったりと、色々な表現方法を持っている人だった。たくさん人の踊っている人の中で一人だけにスポットライトが当たっているようだった。私は、一瞬で先輩のダンスの魅力に引き込まれていった。それから、どうしてもしたらあんなふうにうまく踊れるのか、表現力が上がるのかを研究した。毎日毎日親に見てもらい、「腕を振りすぎ。」や「手首にアクセントを入れた方がいい。」とアドバイスをもらった。

そして、発表会当日。指先や重心、アクセントを意識しながら、全力で数分間を踊った舞台の上は、ライトが眩しくて、熱くて、楽しかった。もって踊っていたかった。踊り終わった時に、会場はお客さんの温かい拍手に包まれた。

帰る前に、妹の同級生の女の子が私に、「憧れています！」と言ってくれた。私は、たくさん練習の成果が発揮でき、涙が出るほど嬉しくてたまらなかった。先輩に少しでも近づけた気がした。そのとき、努力の大切さを感じた。帰り道の空には、キラキラ、キラキラと輝く星があった。

あの子が言ってくれた言葉は、今でも私がダンスを続けていく理由の一つだ。これからも、たくさん努力してさらに上手くなれるように頑張りたい。そして、努力の大切さを知ったからこそ、ダンスだけではなく、勉強や生活にも活かしたいと思った。

個性を見つめて

新栄中二年 金子 紗亜来

学力や運動能力などはテストで採点されるため平均がつけられます。でも基準というのがあるだけで、できて当たり前・できるのが普通なんてことはありません。生まれもった病氣をもっていないのが普通・異性に恋をするのが当たり前・家族が仲良いのが普通・学校に毎日行くのが当たり前。本当にそうなのでしょうか。

私は、他の人と少し違うところがあると感じたことがあります。例えば、声が小さくて、初対面の人と話すのが苦手です。また、周りの人と比べて、身長が低いことも気になります。これらの違いが、時には自分を不安にさせることがあります。しかし、ある日、学校で「みんな違ってみんないい」という言葉を先生から聞きました。その言葉が心に響き、自分の個性を大切にしようと思うようになりました。声が小さいことも、身長が低いことも、私の一部であり、それらを含めて私なのだと感じました。また、小学五年生の頃。クラスメイトの中には、たんぽぽ学級というところからクラスに通う障がいを持っている女の子がいました。最初はその違いに戸惑うこと

もありましたが、話をするうちに、彼女も私と同じように夢や趣味を持っていることが分かりました。その経験から、他人の個性を尊重し、理解し合うことの大切さを学びました。

私たち一人一人には、人それぞれ異なる個性があります。それは、外見や性格、考え方、好きなものや苦手なもの、話し方、育った環境など、あらゆる面に現れます。私はこの「個性」こそが宝物であり、その宝物を守るこそが人権を守ることにつながると考えました。個性は、誰にも否定されてはならないし、否定してはならないものです。学校でも、家庭でも、お互いの違いを認め合い、理解しようとする姿勢が大切です。それは簡単なことではありませんが、まずは身近なところから、小さな気づきや行動を積み重ねていくことが大切だと思います。これからも、自分らしさを大切にし、他人の個性を尊重していきたいです。

バスケ部新体制への抱負

大相模中二年 藤田 和軌

もうすぐ三年生が部活から引退してしまう。三年生の引退後に二年生が主体の新体制が始まるにあたって、僕がチームの中で大切にしたいものが三つある。僕はチームの中でも特にバスケが上手いわけでもなく、体力があるわけでもない。だが、以下の三つは誰にでもできることだと考えている。

一つ目は切り替えだ。二年生は中だるみの学年と度々言われていて、この切り替えがあやふやになってしまいうことが多し。また、バスケは切り替えのスポーツと呼ばれることもあり、今まで、練習中から切り替えがすぐに行えるチームが強いのだと教わってきた。だからこそ、集合時の返事とダッシュや練習と休憩のメリハリを徹底して、中途半端な態度で練習に臨まないよう心掛けたい。

二つ目は感謝の心を持つことだ。よく周りへの感謝を忘れると言われるが、具体的に何をもって感謝の心を持っていると言えるのか。そう考えたとき、初めに頭に浮かんだのは挨拶だ。応援してくれる保護者の方々へ大きな声で挨拶するのはもちろん、忙しい中時間を割い

て教えてくれている顧問の先生やコーチへ「お願いします」「ありがとうございます」を全員が伝えられるチームでありたいと思った。そういった気持ちを持てば、練習ができる環境の捉え方も変化していくだろう。

三つ目はコミュニケーションだ。ここでのコミュニケーションはただの雑談でなく、練習や試合中における情報伝達のことだ。バスケは基本的に、強度の高いディフェンスがチームの勝利に大きく関わる。では、背の高い選手や足が速い選手がいればそれでいいのか。実際にはそういったわけではなく、声でカバーしなくてはならない。人間は自分の背後を見ることが、自分より足の速い相手に追い着くこともできない。そこで声を出して味方に教えることでディフェンスの穴を埋めることができる。チームの勝利に貢献できるよう、練習中から声を出していきたい。

僕は、人に指示するよりも先に自分が率先して行動する重要性を何度も実感してきた。だからこそ、誰よりも切り替えを大切にし、誰よりも感謝の気持ちを込めて挨拶をし、誰よりも練習から声を出したいと思う。チームを強くするため、そして応援されるチームを作るためにこれら三つのことを大切にしていきたい。

今の自分が考えていること

大相模中二年 野中玲奈

私は小学生の頃からの夢がある。それは学校の先生になることだ。しかも、一年生の一学期までは小学校の先生になりたかった。しかし、昨年の一学期から本格的な英語の授業が始まり、英語の先生やALTの先生とたくさん話していくうちに、「英語をしやべることって、こんなに楽しいんだ!」と思い、いつの間にか「英語が好き」から「大好き」に変わった。昔から、私は人に物事を教えるのが好きで、昨年の夏休みのある日、英語の先生になりたいと思った。

それから、二学期、三学期になり、昨年の英語の先生の授業を受け、積極的に英語で友達や先生方にあいさつをしたり、話したりした。そのときから、英語ペラペラになって、世界で活躍したいと心の中で決意を固めた。私は小さい頃から英会話を習い始め、英検を受け始めた。昨年の夏に英検準二級を取得することができた。それから、ある目標を決めた。

「高校一年生までに準一級を取りたい!」と、達成できないかもしれないけれど、とりあえず頑張ってみよう

思った。

昨年の秋から二級の勉強をし始め、最初はびっくりした。準二級のときにすぐ解けた長文問題が解けなくなった。しかも、ほぼ合っていなかった。このような状況が半年くらい続いた。途中で諦めようと思ったけれど、一発合格したときの喜びを思い出すと、再びやる気を出した。

また、学校でもスピーキング力を向上させるために、休み時間や時間があるときに、ALTの先生とたくさん話していた。聞き取れないときもあったけれど、優しく教えてくださったおかげで、たくさんの新しい単語を覚えることができた。

英検を終えて、あまり自信がない。それは勉強が足りないのが原因だ。なので、また気持ちを切り替えて、これからどう頑張っていくかを考えるべきだ。

今年、市内の姉妹都市派遣事業の派遣生として選ばれた。オーストラリアで十二日間ホームステイをすることになった。英語圏の国に行くのは初めてで、うまくコミュニケーションなどを取ることができると不安だ。しかし、失敗を恐れず、たくさん話したいと思う。

「話さなかったら、絶対うまくならない。」この言葉は、何年前か前、母に言われたのだ。

なので、今まで学んできたことを活かして、自分に自信を持ち、夢に一步近づけられるように頑張りたいと思った。しかし、それだけでなく、留学などで海外で暮らすために、私自身はまだまだたくさん改善したいことがある。それらを達成するために、仲間と一緒に取り組んでいきたい。

未来は無限の可能性がある。もし将来、英語の先生や小学校の先生など、なりたい職業になれなかったとしても、自分自身の英語力を活かして、海外でボランティア活動をし、多くの人を助けたい。ただ、もし英語の先生になることができたなら、子ども達に自分の経験を共有し、夢に一步近づけてもらいたい。また、英語を教える上で、子ども達と一緒に成長したいと思う。

私が今、日常生活の中でチャレンジしていることは、手話の習得です。

私が手話に興味をもったきっかけは、手話を使ったドラマを見たことです。しかも、手話をして話していた俳優が、私の好きな俳優だったため、より興味が沸きました。それから私は、少しずつ手話を学ぶようになりました。

しかし、実際にやってみると、一つの単語に対する動きやパターンが複数あったり、似た手の形があったりして、思っているよりもずっと難しいです。それでも、「手話でスラスラ話せるようになりたい。」という思いから、手話の学習を続けています。

私は、将来仕事などで手話を使いたいという訳ではなく、一つの言語として、その「手話」という言語を、自分の表現を使って話せるようになりたいです。そのために、毎日少しずつでも学習を続けることを心がけようと思います。また、手話だけに限らず、様々なことに対して積極的にチャレンジしていきたいです。

未来に向けて考えていること

西中二年 田中 希帆

今、世界中で地球温暖化が大きな問題となっています。それによる異常気象や海面上昇、大気汚染などの環境問題も世界中で起こっています。そこでSDGsや二酸化炭素の排出量を減らそうと、世界中がこの問題に取り組んでいます。日本でもレジ袋が有料になったり、プラスチックプーンが廃止されたり、様々な取り組みが行われています。

私は、これ以上地球温暖化が進むのを防ぐために、これらの問題を他人事だと思わないことが大切だと考えます。最近ではテレビやインターネットなどで、SDGsや環境問題のことが多く取り上げられています。昔の私は、このことを軽く考えていて、レジ袋が有料になったときは、無料でいいじゃないかと思っていました。私と同じように考えている人もいると思います。でもこの他人事な考えの人が多いほど、地球温暖化が進んでしまうと思います。なので、一人一人がこの問題を自分の事として考え、これらの問題に取り組んでいくことが大切だと考えます。

自分に自信を持つために

西中二年 勝 呂 萌 夏

私が日常生活や、学校生活でチャレンジしていることは、主に二つあります。一つ目は積極的に動くということです。私は昔まで、自分から動くことや、行動することが苦手でした。『きっと誰かがやってくれる。』と考えて、いつも他力本願で、自分から行動することをあきらめていました。でも、最近の自分は、自分に自信を持つために、自分からボランティア活動に参加したり、授業中に手を挙げたり、積極的に動くことを意識して、物事に取り組むようになりました。そうすることによって、前までの自分より自信を持って、前の自分より前を向いて、歩いていけるようになりました。これからも委員会活動や、ボランティア、授業中も、積極的に自分から動いていきたいです。

チャレンジしていることの二つ目は人に自分から話しかけることです。他の人からしたら、少し簡単なことかもしれませんが、私は人との対面会話があまり得意ではありません。自分より目上の人に話しかけることも、友達に自分から話しかけることも苦手です。ですが、今の

私は中学二年生、三年生になったら入試があり、必ず面接があります。面接では、いかに自分のことを話し、自分のことをアピールするかが、重要となってきます。そのためには、今の内から人との対面会話を得意にしたい。かないと将来の自分が苦労します。現在の自分もです。どんなにまじめにすごしていても、そのことを他人に伝える力がないと、伝わっていきません。そして私の目標、自分の理想像は自分に自信を持つこと、自分に自信を持てる人になることです。そのための第一歩が、コミュニケーションだと、私は考えています。そのためにも、今の自分将来の自分が苦労しないためにも、私は、自分から人に話しかけることに今後もチャレンジしていきたいです。

私がチャレンジしていることを頭の上に思うかべると、この二つが思いつきました。今後はこのチャレンジしている数を二倍、三倍、さらに多く増やしていけるように、新しいことにも、チャレンジして、さらに自分に自信を持てるようにしていきたいです。

「ガンバ！」その言葉を合図に、私たちは動きだした。今なら、嫌なことがあっても、諦めずにポジティブ思考で、ペアと一緒に戦える気がした。そのきっかけをくれたのが、部活動で行っているバドミントンだった。

私は、昔から父に「日常生活や学校生活であつた嫌なことをポジティブに考えることが大切」と言われてきた。しかし、嫌なことがあると一瞬でネガティブ思考になっていた。部活でもそうだった。思い通りにできなかったり、上手くできず、迷惑をかけてしまったりすると、気づいたときにはネガティブ思考になってしまっていた。シングルの戦でも、自分で自分を追い込んでいる気がするくらいだ。ダブルス戦が始まり、ペアがいたとしても、ネガティブ思考なのは変わらな思っていた。そんな思いをペアは吹き飛ばしてくれた。練習中、ミスして落ち込んでいたら「どんまい」と声をかけてくれたのがとても嬉しかった。ペアの声かけ一つで、私が不安に感じていたことが、少し楽になった気がした。練習を重ねるにつれて、いつのまにかペアと練習するのが楽しく感じ、

自然とポジティブ思考で物事を考えることが多くなった。調子の良い時に行なった練習試合、「ポジティブ思考で諦めずに頑張ろう」と思い、試合に臨んだ。しかし、ラリーが続きこぞというときに「カン」と音が鳴り、ミスしてしまった。申し訳なさど悔しさが、ドッと私に襲いかかった。そうして気づいてしまった。「またネガティブ思考になっている」と。結局、シングル戦もダブルス戦も同じなんだと思った。「どんまい!」私の隣で聞こえた透き通るような優しいベアのかけ声。そのかけ声が、あの時の私をどれだけ支えてくれたか、考えただけで、最高のベアだと思えた。結果、私たちは負けてしまった。「私のミスが多かったからだ」と思っていたても、ベアは私を悪く言ったりすることはなかった。その日だけでも、いろいろなところでベアに支えてもらった。その支えが、私を徐々にポジティブ思考に変えていった。逆にベアがミスをしてしまったとき、私が「どんまい!」と声をかけることで少しでも支えになれるんじゃないかと考えた。それからの試合では、声をかけ合って、スマッシュを決めた時には、二人でハイタッチをしたりと、楽しみながらお互いを支えられるような行動をしていた。その成果がでたのか、顧問の先生に「上手くなったね」と褒めてくれた。

人間は小さなきっかけで、物事の見方が変わってくるということは、こういうことなんだと改めて実感した。部活中、ポジティブ思考で行動できたのだから、学校でもできると思った。勉強が苦手で、もっと勉強しないといけないのに、「めんどくさいからやりたくない」と思ったり、「苦手だからやっても分からない」と、ネガティブに考えるのではなく、「これをやったらテストの点数が上がるかもしれない」と思ったり、「順位上げられるかもしれない」と、ポジティブに考えることを意識して、学校も楽しく、テストの順位を上げられるように頑張りたい。そして、人の心を支え、元気にする言葉「ガンバー!」をもっと言って、少しでも支えになれる存在になりたいと思った。



私ができること

新栄中二年 原 結 菜

最近日本は外国人観光客が増えてきていて小学校や、中学校にも、外国の子が増えてきています。そして外国の観光客の人たちが日本の文化や食べ物や笑顔で楽しんでいるのを見ると、私はうれしくなります。ですが世の中には、その人たちを差別する人がいます。みんな一人一人が人権を持っているのに、誰かが誰かのことを傷つけるのは許せないと思いました。そこで「人権」について、改めて調べてみました。そして人権とは「みんなが平等に生きるための権利」ということを知りました。そこで私は、差別を減らしたいと思い、自分ができることはやろうと思いました。

私たちが人種差別を減らすためにできることを調べて、考えてみました。人種差別を減らすために私たちができることは、自分の偏見や固定観念を自覚することが大切だと調べてみて知りました。そのためには、自分の考え方や発言が、人を傷つけないか考えることが大事だと知りました。

私は小さい頃に友達と遊ぶ約束をしていて私だけみんな

なが持っているゲーム機を持っていなかったため、持っていないなら遊べないよと断られてしまいました。これを差別と言うかは分かりませんが、小さい頃の私には、ショックが大きかったので、他の人には同じ思いをしてほしくないと思ったので調べてみました。調べてみて知ったことは、異なる考え方や価値観を大切にすることが、差別を減らすのにつながるといことです。みんなと違った意見でも責めたりせずに、共感することが大切だと思います。

私はあまり気にせずに、友達や家族などと会話をしていましたが、もしかしたら私が気づかずに相手のことを傷つけてしまっているかもしれません。言葉づかいをしつかりと振り返って、今後は言葉の一つ一つを意識して人と接していきたいです。そして、みんなが平等に生きるためにできることを考え、できる限りのことは実践しようと思います。そして国の文化や肌の色、話す言語が違うだけで態度を変えるのはよくないことであり、人を傷つけてしまうということを伝えていきたいです。もし差別の意味を知らない人がいたら、差別をするところのようになるか、差別をされない人がいたら、差別をするところのようになるか、言葉一つで世界が変わってしまうかもしれないということとを、優しく教えてあげて、自分ができる範囲で、差別

を減らせる活動をしていきたいです。



少しでも多くの命を

大相模中二年 新地 真帆

私には夢がある。人間によって捨てられたゴミを食べ
てしまい、死んでしまう生き物をゼロにすることだ。私
はゴミを食べてしまって死んでしまったクジラの画像を
見たことがある。私はこれを見てとても悲しくて苦しい
気持ちになった。なぜなら、私と同じ人間が捨てたゴミ
により、クジラが命を落としてしまったからだ。私はこ
の事実を知ってからより一層、ポイ捨ては絶対にしては
いけない。ゴミが落ちていたら、拾わなければならない。
という意識が強くなった。そのため私は、掃除により一
層取り組んだり、掃除の時間以外にも暇さえあれば、ゴ
ミを拾うようになった。しかし、ゴミを食べてしまい死
んでしまう生き物は後を絶たない。私はどれくらいいの生
き物が、どのような生き物が命を落としてしまったのか
を知るために調べてみると、私の知らない事実がたくさ
ん出てきた。例えば、ゴミを間違えて食べてしまい、ス
リランカで二十頭のゾウが命を落としてしまっていたり、
絶滅危惧種のジュゴンの赤ちゃんが二十センチのプラス
チックゴミを食べてしまい命を落としてしまっていたり、

絶滅危惧種のウミガメがレジ袋を食べてしまい死んでしま

った状態で発見されたり：私が書いていなかったり、知らないだけで、この他にもいろいろな生き物が命を落としてしまっている。これが現状だ。

私は生き物が大好きだ。だから生き物が死んでしまったと聞くだけでとても悲しく、苦しい気持ちになる。先ほどにも言ったように、その死が人間の引き起こしたものであればもっと悲しく、苦しい気持ちになる。私は一匹でも多くの生き物を救いたい。そのためにはゴミを少しでも多く減らさなければならぬ。だから、使い捨ての物になるべく減らし、繰り返し使って使える物を増やし、活用する。例えば、繰り返し活用することができない紙皿や割り箸などは活用を控え、繰り返し活用することができる食器や箸などを活用する、とかだ。私はこれから先の未来、ゴミとなる物が少しでも減り、少しでも多くの生き物が救えるような未来になるといいと考える。

デジタル時代の「温もり」

優秀作品

大相模中三年 川野 明花莉

スマートフォンの通知音で目覚め、予定を確認するのが私の日課だ。学校ではプログラミング学習が進み、課題提出もタブレットが当たり前。私が小さかった時よりも現代はデジタル化が大幅に進んでいる。「指先ひとつで世界中の情報にアクセスでき、遠くの人ともすぐに繋がれる。」とても便利で効率的だと思う。でも、そんな日々の中、私はあえて自分の手のひらを見つめることがある。そこには、インクの跡が残る指先がある。

私は今でも手書きのノートを使い続けている。なぜなら、「書く」という行為には、デジタルでは代えられない「温もり」と「輝き」があると思うからだ。ノートを開き、ペンを走らせる。調べたことをコピー＆ペーストするだけでは得られない、自分の中で言葉を選び、考えを深める時間があり、一文字一文字に意識を向けることで、情報が心にゆっくり染みていく気がする。授業で得た気づき、読書で感じた感動、友人との会話で浮かんだ詩のような言葉。それらは、キーボードを打つ音ではなく、柔らかなペン先の音と共に記憶に刻まれる。手書き

は私にとって心を込めて学びを深めるための、かけがえない時間だ。

手書きの文字には、その人の想いや個性が宿る。先日、担任の先生が私の作文に手書きで感想を書いて返してくださった。赤ペンの添削だけでなく、特に力を入れた部分には温かい励ましの言葉が添えられていた。その文字からは、先生の「息遣い」や「心」が感じられ、インクの濃淡や力の込め方には、生徒一人ひとりと向き合う姿勢がにじんでおり、画面上の文字では伝わらない温かさがあるそこにはあった。

また、手書きは人との絆を深める力も持っている。祖父母から届く手紙。メールや電話も便利だが、ハガキに綴られたたどたどしい文字には「私を思う気持ち」がそのままの形で込められている。そこには時間をかけた、「手間暇」も感じられ、私はそれを大切な宝物として保管している。クラスメイトへのメッセージカードや部活動の仲間へのお礼の手紙も、画面上のやりとりでは伝えきれない感謝や励ましの気持ち、手書きならより深く相手に届く。

現代は効率とスピードを求める社会だ。そのなかで「手間」や「心を込めること」は見過ごされがちかもしれない。でも私は、手書きの文字が持つ温かさ、考えを

深める時間、そしてそこに込められた人の「心」こそが、今こそ大切にすべき「輝き」だと思う。それは情報が流れ去っていくこの時代に、確かな形として残る「創造の光」なのだ。もちろん、デジタルの利便性も必要だし、場面によっては積極的に活用すべきだ。でも時にはペンを握り、自分の手で文字を綴ってみてほしい。情報があふれる時代だからこそ、立ち止まり自分自身と向き合うことで人との温かい繋がりがや、新しい気づきが待っていると思う。

私はこれからも、手書きのノートを使い続けたい。そして、大切な人には手書きのメッセージを届けたい。効率だけを追わず、「手間」をかけることで生まれる温もりと「心」を込めることで生まれる輝きを忘れない人でありたい。デジタルとアナログ、それぞれの良さを理解し、上手に使い分けることで私たちの未来はもっと豊かで「心」のこもったものになると信じている。

苦手だからこそ

光陽中三年 野村 那唯太

今年から、僕は受験生だ。この「受験生」という言葉が僕を不安にさせたり、焦らしたりしてくる。それくらい緊張しているのだ。

勉強は簡単ではない。志望校に合格するにはもちろん勉強が不可欠だがなかなかやる気が出ない。そして、模試前に勉強を熱心に行ったのに、結果が振るわなかった時は納得できなくて本当に落ち込んでしまう。そんな失敗の記憶が蘇ってくるから、僕は勉強が苦手だ。「苦手」という考え方は無くすべきだとは分かっているけれど、難しい。難しいからやる気が出ないのかもしれない。

勉強以外にも、苦手だと思うことは度々ある。例えば、科学部でロボットを作っている時に、配線でミスをして苦手だと思ったことがある。また、家では「計画を立てなさい」「自主性を持ちなさい」とよく言われる。それが正しくはあってもうまく自分を改めることができない。そして、親に再度注意されて、苦手だなと思ってしまう。苦手になるとやる気が出ないし、やる気が出ないと苦手に感じてしまう。そんな悪循環を抜け出せずにいた。

そんな自分は、ある日一つの言葉に出会った。塾の壁に貼ってあった受験生へのメッセージだった。「やる気がなくても本気で勉強する。それが、受かる受験生だ。」と書かれてあった。やる気が出なくても全力を尽くすなんて、本当にできるだろうか、と最初は思っていた。しかし、今までの生活を振り返ってみると、気づかされることがたくさんあった。例えば、部活の先輩。同じグループで一緒にロボットを作った先輩は大変だとは言いながらも、工具を持つ手は止まっていなかった。また、操縦の練習をしている時にも、苦勞していたが、手を止めることはなかった。さらに、一度目の大会で、良い結果を出せなかった時のことだ。悔しがるだけだった僕とは対照的に、先輩は今まで以上に練習を積み重ねていた。そして二度目の大会では自己ベストを記録していた。その先輩は誰よりも笑顔で引退していった。今でも先輩の顔をよく覚えている。うまくいかないことが多くて、やる気が出ないこともあったと思う。大変だったと思う。それでも、いつも前を向いていた。

クラスメイトにも、努力し続けている人がたくさんいる。苦手を勉強を必死にやって、辛くても前を向いている。たとえテストの結果に打ちひしがれても、その悔しさをバネにしていた。努力を惜しまないところが素晴らしい。

しいと思った。

他の人のことを思い返しているうちに、僕はまだまだだなどと思った。みんなとは苦手なものに対しての考え方が違う。苦手なことがいつまでも苦手でいいわけがない。なかなか気づけなかった自分が恥ずかしかった。置いていかれていると思った。その分、今からもっと努力する。塾の中で人知れず心に火を灯した。

それ以来、苦手なことへの向き合い方が少し変わったような気がする。というのも、特に苦手だった理科や社会の勉強をするようになった。部活では先輩として率先して何ができるかを考え、苦手でも全力でぶつかっていった。家でも注意されたら、対策を考えるようになった。それでも、よく失敗することはある。そこで努力をやめては成長できない。反省して、成功に繋がられるように再び努力するようにしている。

今年から、僕は受験生だ。不安も緊張もある。しかし、机に向かうことで、不安が少し和らいでくる。自分の苦手を克服することで得られた達成感はひとしおだ。実は、塾で出会った言葉がもう一つある。「知らないから知ろうとする。それを楽しめるようになるう。」確かにそうだ。僕はまだまだ未熟。一人前の受験生になるための道のりはまだ長い。だから、苦手なことは努力する、楽し

む。その考え方を絶対に捨てないようにする。そして成功をつかみにいこう。

苦手だからこそのできる努力が、そこにある。



「教師」は、大変素晴らしい職業だと思います。時に誰かを励まし、時に誰かの未来を変える、そんな仕事だと思います。私もたくさん先生の方から勇気をもらいました。その中でも、私の人生に大きな刺激を与えてくれた先生が三人います。

一人目は小学校四、五年生の時、私の担任をもってくださった先生です。その先生は周りから怖いと言われていましたが、私はそうは思いません。なぜなら、先生は私のことをたくさん応援してくれて、たくさん喜びを与えてくれたからです。先生は確かに怒ると鬼のように怖かったし、普段は静かで大人しい人だったので怖いと感じる人もいたと思います。私も初めはそうでした。しかし、その印象が一変したのは五年生の二学期、通知表が返された時でした。その時の通知表は全ての項目に二重丸が付いていてとても嬉しかったです。しかし、その時一番喜んでいたのは私ではなく先生でした。まるで自分のことのように喜んで、普段あまり見せない満遍の笑顔を見せてくれた先生を、私は今でも忘れません。家族で

もない私のことをここまで励ましてくれる先生に感銘を受けました。先生が私に教えてくれたのは先生という存在の心強さでした。

二人目は中学校一年生の時、部活動の顧問をして下さった先生です。私は先生が大会の帰りに涙を流して言っていた言葉に大きく心を動かされました。その日の大会は銀賞で地区大止まりという結果になりましたが、先生は「みんな、本当にありがとう。この歳になってもこうやってみんなと切磋琢磨して何かに打ちこめるって本当に幸せだなんて思う。」とおっしゃっていました。先生にはお子さんがいたので、いつも本当に大変な中私達の部活動を見て下さっていたことと思います。そんな苦労をかけていたのにも関わらず、先生は私達に感謝を伝え、幸せだとまで言ってくれました。私は本当にその言葉に感動して、どんなに大変でも折れずに生徒を思いやれる先生が大好きになりました。そんな先生ですが、私が二年生になると同時に異動が決まり、悲しいお別れとなりました。一緒に全国大会へ行く夢は実現することなく終わってしまいました。先生がくれたあの言葉は今も私の中で響き続けています。先生が私に教えてくれたのは、教師という仕事の大変さの裏にある幸せでした。

三人目は中学校へ入学して一番初めに担任をもって

ただいた先生です。先生はとにかく元気いっぱい明るくて、人生を最高に楽しんでいるような人でした。先生といるところまで幸せになってくるから本当に大好きでした。しかし、先生はずっとふざけている人は許しません。それは先生が最高のクラスを作り上げたいと思っていたからです。私のクラスは少し行事に弱い部分があった、体育祭でも合唱コンクールでも良い成績を残すことができませんでした。そんな時、元気付けてくれたのは先生です。「負けたっていいんだよ。楽しもう、みんなで。先生は今、最高に楽しいよ。」先生はそう言ってくれました。この先生が居れば絶対ずっと楽しいだろうなと思いました。しかし、先生は私が二年生になった時に異動、そして先日、他界されました。辛く、苦しい知らせでした。もう涙が止まりません。でも先生は私に教えてくれました。いつでも楽しめ。笑っていた方が楽しい。と。だから私は笑顔を絶やしません。ずっとずっと先生のように楽しんで生きていきます。先生が私に教えてくれたのは、生きる喜びでした。

今まで本当にたくさんの先生方のお世話になりました。私を支えてくれた全ての先生に感謝を伝えたいです。そして私の背中を押して下さった三人の先生。先生は私のヒーローです。私は三人のおかげで教師という素晴らしい

い職業に出会えました。私もいつかきっと先生のような素晴らしい教師になります。



自分の手で

大相模中三年 植 竹 奏 太

私には夢がある。消防士になって、一つでも多くの命を救うことだ。私は小学生の時から、警察や消防、自衛隊、海保など、人の命を救う仕事に憧れがあった。その中でも消防を目指したいと思ったのは、一本のテレビ特

番だった。それは、二〇一一年（平成二十三年）三月十一日に、東北地方を襲った「東日本大震災」の番組だった。東日本大震災が起きた二〇一一年は、私の生まれ年であり、発生当時、まだ二ヶ月だった。もちろん当時の記憶はない。大きな地震があつて、津波が来て、と言った少しの知識しかなかった。だからこそ、それがどんなものだったのか気になって、気付いたら見入っていた。大きな地震が発生して、住民の「逃げるぞ」という声、消防団の方々が「逃げる。津波来るぞ。」と叫び避難を呼びかける様子が、とても印象に残った。その後に恐れていた津波がきた。津波が自分の足を飲み込む直前まで市民を高台に誘導する消防士がいた。その消防士は、車

の中で固まってしまった人を助けていて、すごいなと思った。その後も、福島第一原子力発電所の事故や、津波火

災、コンビニート火災など、大災害が続いた。その際に、地元消防だけでなく、「阪神・淡路大震災」の時に充足した、緊急消防援助隊の車両達が続々と応援に来た。関東だけでなく、関西からも、たくさんの方が駆けつけ、救助に当たっていた。そうした有事の際の消防の結実力や、所属を問わず、協力し合い消火や救助している姿に強い憧れを持ったことがきっかけだ。

私は、今からでも、人の命を救うことは、できると思っている。私は過去に飲食店で、倒れてしまった女性と遭遇したことがある。その時に私は、なにもすることができずただただ立ちつくしてしまった。その後の後悔や、「なにかできたのではないか」という思いから、消防局が定期的に実施される救命講習を受講することにした。

自分が受講したのは、上級救命講習で、八時間ほどの長いコースだったが、心肺蘇生や異物除去など限られたものでなく、保温法や搬送法など、災害時や、日常でも応用できる内容だったので、受講した。救命講習後も、防災イベントに積極的に参加したり、職業体験で、消防署を希望し、実際に消防の仕事を実近で体験したりもした。今の自分には、消防のように、火の中に入って人命救助をすることはできないけれど、一市民として、このような防災意識は大切だと思っている。いまの日本は、防災

世界平和達成のために

光陽中三年 齊藤 蒼

意識が低いと思う。実際、避難する時、どこに避難をするのか話し合ったり、家の近くのAEDの場所を家族全員が把握していたりする家庭は、限りなく少ない。そうした防災意識の欠如が災害時の死者や重症者の数に表われているのではないかと思う。

この災害大国の日本で、国民一人一人がこうした防災意識の向上は、限りなく大切だと私は考える。私は、今、自分ができる最大限のことをしていきたい。災害時には中学生という地域の即戦力として、自助、共助ができるようにしたい。そしていずれは、あの憧れの消防士のように、「自分の手で」だれかの大切な人を救い、災害や急病で、悲しむ人を一人でもなくせるようにがんばりたいと思っている。

一九四五年に第二次世界大戦が終わり、人々が戦争の辛さや悲惨さを痛感した後も内戦や紛争は終わらない。世界大戦後にできた国際連合で国際平和の維持を掲げたのにも関わらず、なぜ戦争は起きてしまうのだろうか。私たちの平和な未来への提案を考えてみてほしい。

第一に、戦争が起きてしまう原因について考えられることは、民族間の衝突や植民地を獲得するためなどが挙げられるだろう。この二つについて未来の平和のために私が提案することを述べたいと思う。

まず、民族間の衝突について。世界には様々な民族がいる中で互いの文化や言語の違いで言い争いになることもあるだろう。多文化社会の今、互いの民族を尊重することが大切である。しかし、それを分かっている人々の心の片隅には「武力で相手を押さえなければ良い」という考えが生まれてしまう。相手と分かり合えばいいところをなぜか相手を跳ね除けようとする。これは人間の良くない部分だと挙げられる。人間は欲望に駆られるのである。相手の民族を押さえなければ負けた方は自分達

の民族にさせることができるかもしれない。相手を倒し、自分達の民族が増えれば一石二鳥ではないか。そういった考えになってしまふから戦争は絶えないのだと思う。

そのため、現代を生きる私たちにできることは、互いの文化を尊重し、友好的な関係を築きあげること。欲望に駆られずに本当に戦争をしなくてはならないのかをしつかりと一人一人が考えることだと思う。そのためには、世界中の人が戦争について知らなくてはならないので日本の原爆ドームのような戦争に関わってきたものを世界に発信したり、各国に戦争の資料館をつくったりすることも必要だと考えた。

次に、植民地支配について。十九世紀後半から本格的に始まった自国の領土や勢力を広げようという考えを持つ帝国主義。これこそが戦争を起こしてしまふ一つの要因だと考える。先に説明した通り、人間は欲望に駆られてしまふものなので自分の国がせまかったり、都合が悪くなったりすると領土を広げようとするのだ。しかし、領土を広げるために行う戦争は、国同士の戦いになるため多くの犠牲者や被害が出てしまふ。また、民族同士の戦いよりも長期化する例が多い。一度起きてしまつたら、長い間続いてしまふのでより一層戦争に対して意識することが必要だろう。そのために行うべきことは、領土を

はっきりと明確にすること。自分が不満に陥っても、すぐに他人のせいにししないこと。このことを忘れないでいたいと思う。

今回は、戦争という大きなことで考えてみたがこのことは普段の日常生活においてもいえることだと思う。普段からすぐにつつかってしまふ人は、まず相手の気持ちを考えてみるのが大切だと思う。また、自分の考えを押し通そうとする人は、自分の意見と相手の意見を比較しながら考えることが必要だろう。

このように、身近な生活においても相手を嫌な気持ちにさせないことは一人一人が互いを尊重することで達成できるかもしれない。そして、このように考える人が一人でも増えればまわりの人も気持ちよく生活することができるはずだ。世界中の人が互いを理解し合ったとき、初めて世の中から「戦争」というワードが消えてなくなるのではないだろうか。

言葉の力の大きさ

大袋中三年 関 口 夢 麻

あなたは、怪我や病氣の人に「大丈夫？」と言ったことがありますか。

私は、中学二年生の県大会一週間前に前十字靱帯断裂という膝の大怪我をしました。地区大会を勝ち抜いて、目標の舞台で三年生と一緒にプレーできると楽しみにしていた矢先の大怪我でした。もう三年生とはコートに立つことができないと告げられたときはショックで立ち上がるできませんでした。そのとき周りの人から、「大丈夫?」「かわいそう」「怪我治してがんばれ」と、心配をされました。他の人から見たら、心配や同情しているように感じると思いますが、このときの私にとってこの言葉は前向きになれる言葉ではなく、心をえぐられるような一言言ってほしくない言葉でした。一時の感情で発する言葉は、人を傷つけてしまうと知りました。

私も、今までに怪我をした人に同じようなことを言ってしまったことがあります。自分自身がこのような体験をするまで、言われる側の気持ちの方が分かりませんでした。自分は心配をしているつもりでも言われた人にとっては、

無意識に何も考えないで言われたと感じ、とても辛いと思います。言われる側の人の気持ちを知った今、何気なく発した一言が、言われた人、その周りにいた人に良くも悪くも伝わってしまうことがわかりました。怪我をした人や病氣になった人に、自分の感情や思ったこと、興味だけで無責任な発言をしたり、事情を聞いたたりするのは本当によってはいけないことだと思います。言葉の力は、時に包丁を超えるほどの鋭い凶器になり、相手の心に深く刺さり一生残り続けてしまうと改めて実感しました。一方で、言葉には人を救う力もあります。とても苦しくて辛い時でも言葉一つで心が軽くなり、元気になることもあります。怪我をしたことと周りの人からの心配の言葉でショックを受けているとき、テレビで流れてきた曲の

「ただ前に前に出る前進あるのみ」

という歌詞が、どんなに不安でもとにかく一歩踏み出すことの大切さに気づかせてくれました。この言葉に勇気づけられて、また少し希望が見えた気がしました。

言葉は目に見えません。でも、人の心の奥深くまで届くとても大きな力を持っています。無意識で言った一言が、誰かの人生を大きく変えてしまうかもしれません。前向きな言葉は時にどんな薬よりも効き、人を助けてく

れます。私は、これから言葉をさらに大切に生きていきたいです。相手の気持ちを考えて話すことは、人を尊重するという人権の考え方そのものだと思います。誰かの気持ちを支え、後押しできる「翼」となるような言葉を選べる人間になりたいです。そして、何気ない一言が誰かの明日、そして人生を変えてしまうかもしれないことを忘れずに生活していきたいです。

誹謗中傷・いじめは何があっても

大袋中三年 鈴木 心 春

あなたは、池袋暴走事故を覚えていますか。池袋暴走事故は、二〇一九年四月十九日に東京池袋で発生した交通死傷事故。当時八十七歳の男性が、ブレーキとアクセルを踏み間違えて乗用車を暴走させました。自転車に乗っていた松永真菜さん、長女の莉子ちゃんが死亡し、他九人が重軽傷を負いました。真菜さんの夫の拓也さんは今でも交通安全を訴える活動を続けており、二度とこのようなことが起きないように、今回の事故は未来につなげようと全国各地をとび回って発信しています。しかし、この活動や拓也さんの思いに対して、中傷動画やSNSを通して悪質な書き込みをしてしまう人は少なくありません。中でも、十四歳の女子中学生が拓也さんを脅迫し、書類送検されるという事例は、ニュースや報道で話題になっていました。「妻と娘を亡くしただけだろう」「それくらいでガタガタ騒ぐな」「ヒーロー気取り」「辛いなら私がかわりに殺してあげよっか？」これらの言葉は、どれだけ拓也さんの心を刺し、傷つけたのでしょうか。特に書類送検された女子中学生は、任意の調べに対して、

「私的な悩みがあり、誰かに助けてほしくて、脅迫メールを送れば、相談にのってくれる場所を紹介してくれると思った。」などと話しています。

この発言から、本当に拓也さんの気持ちを考えず、自分の気持ちや欲だけを優先していることが伝わってきます。そして、これらのことは、いじめと同じ原理になります。受け取ったときの相手の気持ちを考え、自分の行動や言動をわきまえることが大切だと思います。そしてこれは立派な人権侵害でもあるので、なくしていくには、どんな人でも行動や言動をわきまえ、一人一人が意識することが誹謗中傷やいじめを減らしていく上で大切だと考えました。

先ほども書いたように、拓也さんは、二度とこのような事故が起きないように、この事故を未来へつなげようと、全国をとり回り、発信し続けています。それにとまって事故・事件に対する誹謗中傷やいじめも減らしていかなくてはいけません。ただでさえ事故や事件で精神的に傷ついているところに、さらに、見えない相手から自分の存在をけなされたりするようなことが起きたら、さぞ苦しく、悔しいことでしょう。私も一度、SNSのノート機能に自分のことを悪い意味で書かれたり、学校で対応がとて冷たくなったりしたことがあります。そ

のときは本当につらくて寂しい思いをしました。だから自分が被害者にも加害者にもならないよう、日々のインターネットの使い方には十分気をつけるようにしています。

誹謗中傷、いじめは何があってもいけません。相手の悪いところだけではなく、良いところを見つけないということや、日頃から行動・言動をわきまえ、相手の気持ちを考えながら過ごす。このようなことをすれば、自然と物事が平和に進んでいき、最悪のパターンに至ることはおそらく減っていくと思います。これからの時代は、今よりももっと情報網や通信網などが発達していくと思うので、よりインターネットの使い方や、自分を見直していけば、よりよい未来が見えてくると思います。そのために、自分の発言は本当に相手が傷ついていないか、その場に適した発言が本当にできているのかなど、自分の行動・言動・発言を振り返ることをより意識して過ごしていきたいと思います。

私だけの青春

光陽中三年 齊間 心 優

私は吹奏楽部の部長である。昨年の夏に、一番尊敬していて大好きな先輩から部長を引き継いだ。先生や先輩から今までの頑張りを認めてもらえた気持ちでとても嬉しかったが、それと同時に五十六人もいる部活をまとめなければいけないという責任感もあった。

吹奏楽部の活動で大きなイベントとして、アンサンブルコンテスト、新人戦、定期演奏会、夏のコンクールがある。三年生が引退し、自分達の代が中心となって活動するようになってはじめてのコンクールは、アンサンブルコンテストだ。これは、部員全員で出るのではなく、主に二年生の中で組んだ少人数のチームで出場する。私は昨年もお場していた。だからこそ、昨年の結果を超えたいと強く思い、練習に励んでいた。そして、この大会では私の知っている限り過去二年間連続で県大会に進んでいた。オーディションに落ちてしまっただけで出られない二年生、先輩も引退した先輩もたくさん温かい言葉で応援してくれた。しかし、結果は願っていたものとは違い、県大会に進むことができなかった。たくさん練習したけ

ど県大会まで届かなかった悲しみと、今までの先輩達の記録を自分達の代で止めてしまった悔しさでいっぱいだった。自分が部長になってから、良い結果が残せずとても落ち込んだ。

次の大会である新人戦の練習がはじまった。この大会は、一、二年生全員で出場できる。先輩として、後輩を成長させながら自分も成長するのはとても難しかった。でも、先輩として後輩の成長を実感できるのは嬉しかった。合奏で全員の音を合わせるのは難しく、上手いかなくてみんなで悩んだ時もあった。改めて、私達後輩をまとめてきてくれた先輩のすごさに気づいた。いろいろな悩んでいるうちに、自分個人の演奏もなかなか上手いかなかった。自分の演奏に納得がいかなくて自信がなかった時、前部長である私の一番尊敬する先輩がたまたま部活に来てくれた。そこでアドバイスをもらい、励ましてくれた。そこからまた、自信がついていった。みんなでたくさん練習を重ねて迎えた本番、みんな納得のできる演奏ができた。全員の顔から笑顔があふれていた。そして運命の結果発表。表彰式が始まるまでドキドキが止まらなかった。部長としてステージに立っていて、客席から部員みんなの姿が見えた。全員が緊張している中、私達の結果は見事金賞でした。みんなが歓声をあげて喜ん

でいるのが見えて、本当に今までがんばってきて良かったと思った。今まで上手いかないことばかりだったけど、この部活の部長になれて、心の底から良かったと思った。

次に迎えた定期演奏会。受験を終えた三年生と一緒に演奏できる、最後の機会だ。ほとんど全ての企画を生徒自身で行うので大変だが、それだけ達成感がある。定期演奏会の最後に、毎年お決まりのアンコールがある。その中で、アルトサックスの長いソロがある。昨年は前部長である私の一番尊敬していて大好きな先輩が吹いていた。今年は私の番だ。とても長いし難しいので苦戦したが、地道に練習しました。本番、アンコールは最後ののでそれまでずっと緊張していました。マイクの前に立って、観客席に座っている友達や今までずっと応援してくれた親の顔が見えました。「みんなに感謝と笑顔を届けたい！」という想いで、ソロを吹いた。今までにないくらい緊張したが、達成感でいっぱいだった。その後にホール中に響いた拍手の嵐の音は、今でも忘れずに私の心の中に残っている。

今は中学校生活最後の大会である、夏のコンクールに向けて練習に励んでいる。今年もたくさんの新入生が入部してくれて、八十九人という超大人数部活になった。

私は引退する最後の日まで、この光陽中学校吹奏楽部の部長として今まで支えてきてくれた多くの人たちに感謝と笑顔を届けられるような演奏がしたい。



言葉について

大袋中三年 近藤 希美

言葉。言葉は人と人を繋ぐ大切なものです。「ありがとう」、「おはよう」などの挨拶で元気が出たり、かけられた言葉で幸せになったり、今日一日頑張ろうと思えたりします。しかし、使い方を間違えてしまうと、時には凶器になることもあります。

最近、言葉の重みがとても軽くなっていると感じます。私は、学校で過ごしているとき「死」という言葉をよく耳にします。どのような時に使っているかというところ、悪意を持って使うというよりも、少し不快感を感じた時に冗談混じりに使う事が多いように感じます。また、楽しい時にも、死ぬほど面白いという意味で「死ぬ」と使ったり、時には、本当にイライラして使ってしまうこともあります。私も、家族と喧嘩したときに「死ぬ」とイライラして言ってしまったことがあります。その時両親はとても悲しそうな顔をして、自分が人から「死ぬ」といわれたらどのような気持ちになるか、その言葉によって傷ついて自殺をしてしまう人もいるから、絶対に人に言うてはいけない言葉だと叱られました。サッカーの試合で

も、審判に聞かせるところで、相手に死ぬという言葉を使ったら、非紳士的行為でイエローカードになると聞いた事もあります。それほどの言葉であるにもかかわらず、今では「死」という言葉が身近にあり、昔で言う「バカ」や「ヤバイ」などと同等の言葉として使われているような気がします。

最近ではインターネットが普及して、SNSでメッセージのやりとりをしたり、自分の考えをコメントとして書いたりすることができるようになりました。自分の思った事をストリートに書く人が多く、共感の多いコメントにはいいねがつけられて、いいねの数が多いとそのコメントが正しいような気持ちになります。本音かどうかかわからない情報が真実に思えて、それが大きくなり、誹謗中傷へと向かう事があります。顔や名前が分からないからといって、ひどい言葉を書き込んでいる人は相手のことを考えていないと感じます。最近は情報開示請求が認められ、匿名でも誰が書き込んだか分かるようになりました。言った言葉に責任を持ち、相手にどのように伝わるのかを考え、言う前に大丈夫か自分で確認してから書き込む事が大切です。

「死ぬ」という言葉を頻繁に聞く事で、言葉に慣れてその重大さがなくなり、深刻に受け止めるべき言葉に対

して鈍感になってしまおうと思います。そして、思わぬ誤解を招いて、想像以上に誰かを傷つけてしまう事もあります。また、誰かが死にたいと深刻なサインを発している気がつかなくなるのではないかと思います。言葉は周りの人が使う言葉に伝染します。一人でも多くの人が、安易に「死ね」という言葉を使わずに、自分の感情を表現できるようにしたいと思います。そして、使われて幸せに、嬉しくなるような言葉ができるだけ使ってきたいです。それが他人だけではなく、自分の人権を守ることにも繋がると思います。少しずつでも、自分が今できることから始めていきたいです。

農林水産省が「古古米」や「古古古米」の放出に急ぐ中、ニュースの話題は備蓄米で持ち切りになっていた。古い米を買うことに少し抵抗がある人も世の中にはいるらしく、味などに不安があるそうだ。しかし、どんな年に作られた米だろうと、農家さんの米作りに込める思いは変わらないのではないか。

小学校に入る前ぐらいの時、私の父は畑をやっていた。小さい頃であつたため、あまりよく覚えていないが、じゃがいもやきゅうりなど、たくさん野菜を作っては父が料理をしてくれた。畑仕事を私も手伝ってはいたものの、すぐ疲れてしまったのを覚えている。だからこそ、農業が大変なことも、誰かが一生懸命に作ったものが何よりおいしいことも全て、父から教わった。私が野菜嫌いを克服したのも父の畑仕事を手伝い始めた頃で、家族で一生懸命作った野菜は本当においしく感じられた。野菜を育てる側になってみて、どれだけ大変かを知ることができたおかげで、野菜を好きになれたのかもしれない。

米だって同じだと私は思う。古い米だろうと何だろう

と、農家さんが一生懸命作った米だということに変わりはない。

「農家さんが一生懸命作った米がまずい訳がない。それを分かっているからそんなことが言えるんだ。」

ニュースでインタビューを受けて、味に不安があるなどと言っていた人に対して、父が言った言葉だ。私はその横で黙って父の話を聞いていたが、確かにその通りだと思った。畑仕事を手伝わせたのも、農家さんの大変さや思いを知ってもらったためだったらしい。そんな父を私は改めて、すごい人だと感じた。

私が通っていた小学校では、春に田植え、秋に稲刈りの体験があった。先日、妹も田植え体験をしたそうで、その日はいつもより白米がおいしく感じられたのか、三杯もおかわりをしていた。そんな姿を見て、私は改めて農業の大変さを知るのは、今の日本人々に最も必要なことであると感じた。それを分かっていたいれば、「まずい」や「臭いが気になる」などと食べてもいけない、何も知らない人が言うことはなくなるだろう。

社会の学習で大正時代に起きた米騒動について学んだが、日本では平成にも米騒動が起きたそうだ。平成の米騒動では、大冷夏による不作が原因で米不足が深刻になり、価格が大きく高騰したらしい。そこで政府は、外国

から米の緊急輸入を進め、大量のインディカ米という米が市場に出回った。しかし、全く違う種の米を今までと同じように炊いたとしても上手く炊ける訳がないことも考えずに多くの人々が「まずい」と言って輸入米を買わなくなっていった。結局、輸入米のうちおよそ九十八万トンが売れ残った。苦しい状況を助けてもらったのにも関わらず、おいしく食べる工夫もせずに文句を言う、そんな過去を知って、日本はもっと「食育」を充実させ、食べ物に対する考えを根本から正すべきであると考えた。

「古古米」や「古古古米」が放出され、政府が米騒動の解消に向けて大きく動き始めた今、私たちがするべきことは何だろうか。マスコミが報道するのは米に対しての不安の声ばかりを編集で切り取ったものがほとんどで正直信用できるものではないと考える。大事なものは米自体ではなく、農家さんが一生懸命作った米をよりおいしく食べるための工夫をするべきである私達ではないだろうか。まずは、どんなに古い米だろうと、どんなに高い米だろうと、食べることができると、いうことに感謝したい。ただの中学生の一意見とは思われないが「食育」について一番理解しているのはおそらく日本の子どもだと考える。純粹に食べ物をおいしく食べて思いきり笑うことのできる子に、大人は学べることが山ほどあると思

う。日本が食べ物を大切にして、世界からも一目置かれるような国になってほしいと考えている。



私の家族

平方中三年 漆 山 菜 夢

私の家族は、他のお家と少し違うところがあります。それは、兄弟の人数です。私の家族は、男の子が六人、女の子が七人と、十三人兄弟で生活しています。初めて話す子には必ず驚かれます。そしてよく言われることが「大変そうだね。」「兄弟が多いと何もできなさそう。」といったこともよく言われます。確かに、大変なこともたくさんあるけど、その分幸せなこともたくさんあります。私は大家族の中で一番幸せな家族と自信持って言えることができます。それは、お兄ちゃん、お姉ちゃん、妹、弟みんな友達のように仲が良く、遊ぶときも誰かしらを誘ってよく遊びに行きます。もちろん、父と母とも仲が良いです。ママとパパはよく休日や長い休みの期間に必ず旅行へ連れて行ってくれます。私の家族はみんな、行事ごとが大好きなので、毎年ハロウィンパーティーや、クリスマスパーティー、子どもの日、七夕などたくさんさんの行事の日には、いつも美味しい料理や、パーティー、ゲームなどしています。行事の他にも、お家でお祭りをしたりします。わたあめや、たこ焼き、ポテト、ヨーヨーす

くいなど、本当のお祭り屋さんのような屋台を開いてくれます。学校から帰って来ると、お祭り屋さんでできていたりなどママとパパがいつも楽しませてくれます。それは、ママとパパが毎日、家事にお仕事をして頑張ってくれているからできているんだと私は思います。習い事も、好きな事をさせてくれて、否定はせず、いつも応援して背中を押してくれるママとパパはスーパーマンです。相談も乗ってくれて、家族を第一に考えてくれて感謝しきれないくらい感謝しています。いつも楽しませてくれる分、私達ももっと楽しめたいと、毎日、お手伝いや妹、弟のお世話、母の日や父の日、パパとママの誕生日にはサプライズをして楽しんでもらえるように考えています。ある日、ママが健康診断を受けに病院へ行きました。その結果、頭に動脈瘤ができていました。とても大きくなっていて、手術をしなければなりませんでした。私は、家族が帰ってきて、いつも通り、家族と夜ご飯を食べていると、お姉ちゃんから話があるとわれ、ご飯中に家族を呼び出しました。私は正直、サプライズだと思いい、ドキドキしていました。「最後まで聞いてね。」「ママは手術をすることになったの。」私の目からポロポロと涙が溢れ出しました。私はそのとき、深い悲しみを経験をしました。いつも通り、「おはよう。」「いってき

ます。」と話したあの朝、いつも同じ元気なママでした。それから、家族みんなで料理や家事をしたりなど、今まで以上にお手伝いをするようになりました。いつ思い出しても、あの時のお姉ちゃんの言葉を思い出すと涙が止まりません。そして、迎えた手術の日。学校でも不安と緊張が止まらず、ずっとソワソワしていました。学校から走って帰り、お姉ちゃんに「ママは？」「手術は成功したの？」と真っ先に聞きました。すると、「成功したよ。」と言われ、嬉しさと安心に涙が止まらず、ふいてもふいても止まりませんでした。そして、ママが退院し、お家へ帰って来ました。いつものママでした。嬉しくて嬉しくて言葉が出ませんでした。私は、何より、家庭を全力で支えていたことに感謝を伝えたかったです。みんなでもっと大変な家事を今まで一人でやっていたと思うと、胸が痛くなりました。この経験をjして、改めて家族という一つの大きな存在を知ることができ、ママとパパの今までの努力や苦勞にも気が付けました。私は、今までよりもっとお手伝いをしようと家族で決めました。これからも、感謝の気持ちを忘れず、家族という素晴らしいものを築きあげていきたいと思いました。

今を大切に

北中三年 佐藤 芙紀

みなさんは今の世界は便利だと思いますか。スマホはいつのまにか生活必需品となり、人工知能AIの普及はすさまじい。私は、こんな機械化社会を逆に不便と感じます。

私は中学三年生になって、受験の受け方や、日程など、色々調べるようになりました。今年から受験の申し込みは、ネットになるそうです。合格発表もネット、受験において、たくさんのことがネットで行われるようになりました。たしかに、紙に書いて、届けに行くよりも、打ち込んでしまった方が速く、正確なのかもしれません。しかし、ネットには危険性がぬぐいとれません。個人情報報の漏洩など、一歩間違えれば何が起こるかわかりません。しかし、危険社会を作っているのは、ネットだけではありません。

私たちの未来の職ですら、危険な状態です。二〇四〇年問題を知っていますか。二〇四〇年には、人工知能AIに人間の知能が追い越されるといわれるという問題です。それによって、今ある職業の約五〇パーセントがAIでまかな

えると言われています。自動運転が可能になった今、タクシーの運転手さんやバスの運転手さんたちの仕事はいらなくなるのです。私たち人間が生み出したロボットやらネットやらなんやらは、私たちを危険社会へと導き、職を奪っていきます。それは本当に便利なものと言えますか。

私は、新しいものを生みだすものよりも、今という今を大切にし、人間が、動物たちが本当に心から「暮らしやすい」と言える社会が必要だと考えます。そのために、エコ活動やゴミの削減など、小さなことから始めて、一つずつ課題解決して行く必要があります。これからの社会をになう私たちが、真剣に取り組む、もっともって社会問題に触れる機会を増やしていくことも大切です。私は、そんな今の社会や今の自分をも大切にして、自分が大人になった時、社会をになえる人になりたいです。

自分に「ある」ものを数える

北中三年 尾 又 鈴 夏

みなさんは「小さい」ことが試合で勝つことができない原因になると思いますか？私はそうとは思いません。しかし、それに気づくことができたのは中学校に上がったからでした。

私は小学一年生から父の影響で剣道を始めました。最初の方はまだ基本の練習だったため、少し遊びに近いような形でした。だから、私はとても剣道が好きでした。しかし、学年が上がるごとに面をつけ上の学年の先輩方と稽古をさせてもらったり、試合に行くなど本格的に剣道を始め、いつしか私の中で剣道というものはとてもつまらないものになりました。中でも私が一番嫌いだったのが試合です。毎週土日にお弁当をつくってもらいながらも試合に負けて泣き、本当に嫌な時間でした。このころの口癖は「小さい」から負けた。「小さく」なかったら必ず勝てたです。昔から体が小さく相手に押しつぶされることが何回もありました。当時の私にとって「小さい」はコンプレックスだったのです。

しかし、私には同い年で幼馴染の子が居ました。その

子はチームのキャプテンであり私と同様に体が小さい中、いつも試合で勝つことができるあの存在でした。そんなある日、私はその子に試合で負けた後「小さいから負けた。」を言いました。それに対してその子は「小さいからこそできることがある。」と言いました。その言葉を聞いた時私は今までなぜ「小さい」を言い訳に使ってきたのだろうと自分に腹立たしくなりました。その子は「小さい」を自分の強みにしていたのです。そこから私は「小さい」なりの戦い方を自分で模索して自分の戦い方を見つけ試合にも勝てるようになっていきました。そして部活の副キャプテンにも選ばれることができました。

このことから私は、自分に「ない」ものを数えるのではなく「ある」ものを数えることができるようになりました。「小さい」とは自分の強みであり、使える手札の一つでもあったのです。

今年私は、中学三年生となり最後の大会があります。私は最後まで「小さい」を通し切り、悔いのないように精一杯がんばろうと思います。これからはどんなときも自分自身を一度見直して、自分の強みを探し前へ進んでいきたいです。

まほうのじゅもん

優秀作品

増林小四年 百村帆夏

「ありがとう」
って言うと

心がぽかぽか
あったかくなる

「ありがとう」
って言われると
心がぽかぽか
あったかくなる

「ありがとう」は
心がぽかぽか
あったかくなる
まほうのじゅもんだね

命は一つだけ

新方小四年 原 悠人

命は一つしかない
だからこそ命を大切に

命は一番大事
生きているうちに
好きなことをたくさんしよう

命は世界と同じ
いつかはこわれてしまう
いくつあっても大事なものは
ちゃんと大事にしよう

かた手とりよう手

蒲生南小四年 吉田 幸秀

ゲームをするのはりよう手

あくしゅするのはかた手

はくしゅするのはりよう手

アイスを食べるのはかた手

でも人をきずつけるのは

なにもいらない

でもそのかわり

人が助け合うのにも

なにもいらない

そうやって助け合う一つの命

そうやってわらったりないたりする

一度きりの命

かた手とりよう手

あるならば

あの子をすくう

大切なアイテム

それができる

かた手とりよう手

色々な心がある

蒲生南小四年 大山 あかり

物にも心はある

人にも心はある

動物にも心はある

自分にも心はある

世界にも心はある

世界みんな心を一つにすれば

大きな心になる

「たった一つのサッカーボール」

優秀作品

弥栄小五年 渡 邊 日陽汰

たった一つのサッカーボール

ある静かな夜にまくらもとに届いた

僕の名前が入った特別なボール

他の誰でもない僕のもとに届いた

その日から、僕の親友になった

雨の日も、晴れの日も僕の近くにいてくれた

嬉しい時も、悲しい時も近くで見守ってくれた

ボールだけが知る僕の顔

サッカーボールは自分だけのもの

これからもたくさんの景色と一緒にみたい

学校

弥栄小五年 深澤 朋佳

私の教室は三階だ

今日はだれが一番に来てるかな

私は何番目かな

階段を上ってろうかを歩いてわくわくドキ

ドキする気持ち

今日はだれとお話しできるかな

どんな勉強が始まるかな

先生はどんなお話してくれるのかな

私の好きな給食でるかな

毎日学校わくわくドキドキ

「命は大切」

蒲生南小五年 倉持 美花

いのちはたくさん
みんなのいのち一つだけ
みんなのいのちはたから物
自分だけの大切なたからもの
なくなってしまうのは、いなくなる
たいせつな命
自然も
魚も
動物も
植物も
人間も
みんなみんな
いのちを持っている
大切な
大切な命

笑顔の輪

弥栄小五年 松田 穂花

一人が笑顔になると
もう一人が笑顔になる
それを見て誰かも笑顔になる
それを続けていくと
とても大きい笑顔の輪ができる
その輪がもっと
おおきくなっていくと
世界中が笑顔でいっぱいになる
将来 笑顔がいっぱいの
世界になったらいいな

地球の笑顔

南越谷小五年 岡野 紗 英

窓をあけたら 家やビルが見える
地球は今 緑が少ない
地球はとても悲しんでいる
ずっと昔は 緑にあふれていた
人間がそれを 変えてしまった
地球にすむけんりを もらっているなら
わたしたちだって 感謝しなくちゃ
緑をふやすことくらい
小さな感謝でいい それだけでも地球は
少しずつほえんでくれる
その君の 小さな努力で
地球が笑ってくれるから
そしたら わたしたちも
一緒に笑うことが できるから

たった一つの命

弥栄小五年 奥山 結 彩

たった一つの命
命があるから
笑ったり
泣いたり
怒ったり
みんな
命があるからできること
逆に
命がなかったらできないこと
私たちは命を大切に
今日も
明日も
来年も
大切な命とともに
人生を歩んでいく

優しい

優秀作品

弥栄小六年 井場 來花

誰かの優しいになってる
明日みんなが、世界が
優しいであふれますように

優しいってなんだろう。

一人二つ配られるおやつを一つあげること？

誰にでも変わらない態度でいること？

友達に何かあったら話を聞くこと？

わざと勝負で負けてあげること？

勉強が分からない人に教えてあげること？

分からない答えをこっそり答えること？

優しいって何だろう。

自分では優しい行動でも

他の人からしたら迷惑。

自分からしたら迷惑でも

他の人からしたら優しい行動

よくとればみんなが気遣いができて

優しい。

みんなが知らぬ間に優しいを発信してる

優しいってなんだろう。

みんながみんな優しさを求めている

あなたも知らぬ間に



日本の未来

桜井小六年 大沼悠悟

外国人が増えるのはこわい？
外国人が悪いわけじゃない
マナーが悪い人を減らしたい
大切な命を奪ってほしくない
政治の対応 考えてほしい
お米のこと
どうしてこうなったのか
信頼できる政治をしてほしい
税金をちゃんとしたところに使ってほしい
外国にあげるお金は
金額をよく考えてほしい
いろいろなやり方があるはず
安心して歩ける日本になってほしい
よく考えたいし
よく考えてほしい

過去と未来と現在と

川柳小六年 澤花英

「過去」いろんなことがあったかな
時に笑って
時に泣いて
たくさんたくさんあったかな
「未来」未来のことは分からない
時に笑って
時に泣いて いるのかな
分からないのも いいかもね
希望をもてる そんな気がする
「現在」ひたすらずっと生きている
時に笑って
時に泣いて
ただひたすらに生きている
過去は変えられないけれど
未来のことは 変えられる
過去も 未来も 現在も
きつと大切な 時間

わたしの知らないこと

蒲生南小六年 福岡 沙笑

戦争とはー。

人が悲しむ？つらい思いをする？

戦争とはー。

大切ななにかをなくす？ こわれる？

わたしはそれを知らない

すべて本や人から教えてもらったこと。

見たこともないし関わったこともない

でも 見たり関わったりしているよう

わたしは思う きっとそうなんだ

戦争はー。

人が悲しくなる。つらい思いをする。

戦争はー。

大切ななにかをなくす。こわれる。

わたしは そんな世の中はいやだ

すべて本当にあったこと。

でも 戦争をしていい事はない。

だれかが 悲しい思いをするだけ。

だれかが 大切ななにかをうしなう。

ただそれしかないー

だれだって楽しくくらしたいし

だれだって笑顔でいたい きっとそうだ

だから わたしは思う

わたしは戦争を知らないが、

本や人から教えてもらったことで

人はー。

自由に生きてつらい思いをすることのない

平和にくらすことがきたらなと。

今も 昔も 続いている

「戦争」がなくなったら、

くるしい思いをする人がいなくなったら、

きっと

「平和」で「楽しい」世の中になるのかな。

縁の下の力持ちって誰？

川柳小六年 田 口 凜梨花

わたしのことを

かげで支えてくれているのって誰だろう

家族は

一緒に笑って

一緒に泣いて

そして

時にしかられて

わたしはそれが「愛情」なのだと思う

友達

一緒に遊んで

一緒に貴重な時間を過ごして

そして

時にけんかして

わたしはそれが「友情」なのだと思う

世界には縁の下の力持ちがたくさんいる
何気なく幸せに平和な日常を送っているのも

地域の人、ボランティアの人、身近な人

たくさんの方に支えられ

それが大きな力になっている

よかった

本当によかった

すてきな仲間がいて



自分

新方小六年 田口詩織

自分がつまずいているのは
前を向いている証拠

自分が本気で悩むのは
真剣に向き合っている証拠

自分が負けて悔しいのは
まだ戦える自分がいるのを知っているから

今、本気でつまずいたり
悩んだり、悔しくなったりしたとしても

その感情は、希望の光



「あなた」だし「私」

弥栄小六年 小谷 はなめ

私は私

あなたはあなた

どれだけ私を真似ても

あなたは私になれない

どれだけあなたを真似ても

私はあなたになれない

どれだけ私を真似ても

あなたはあなた

どれだけあなたを真似ても

私は私

何を着ても、

何を食べても、

何を見ても、

「あなた」だし「私」

言うかもね

「こんなの、私じゃない」

言われるかもね

「こんなの、あなたじゃない」

ううん、みんな全部が、

「あたし」だし「私」

わたしはそう思います



「考えてみて」

弥栄小六年 清水紗文

いじめってなんであるのかな。

考えてみた。

その人のことが嫌いだから？

その人がムカつくから？

どんな理由があってもいじめは絶対してはいけない。

相手を傷つけて、

泣かせて、

いいことなんて一つもない。

いじめている人も大人になったら後悔する。

たとえあやまっても

そのモヤモヤは全て晴れるわけではない。

だから引き返せるうちに引き返して

いじめなんてカッコ悪い。

でも、

私にはいじめられた人がどんな気持ちなのか

全てはわからない。

いじめている人がどんな気持ちなのか全てはわからない。

だからね、

みんなも少しは考えてみて
いじめについて。



さくらの色彩

優秀作品

光陽中一年 島岡史花

さくらの色は はじまりを告げる

新しい道への希望を 光のつゆを

そのつぼみにたたえ こぼれんばかりに

花開く

はるの光にてらされて

ふわふわやわらかく

清らかにかがやく

さくらの色は おわりをささやく

今までの道の終着点を おもいでを

あわい色にし

散ってゆく

だれかにふみつぶされて

ひそかにすてられる

それでもくちてうもれてゆくまで

あわいやさしいあの色が

こころの底で 清らかにかがやく



明日の色

新栄中一年 橋本伊織

みんなそれぞれ
その日見ている色はちがう

誰かと同じ色の日は
絶対がない
どこにもない

毎日違う色だから
今日も明日も考える
起きたら何色になってるかな



夢への道のり

新栄中一年 柴田 凧 都

練習する

試合に勝つ

自信をつける

練習する

試合に負ける

悔しさと後悔が残る

壁に当たる

練習する

壁を超えた！

また負けた

それでも努力する

それは勝ちたいから

そうして僕は強くなる

また壁に当たる

また負ける

泣く

それでも

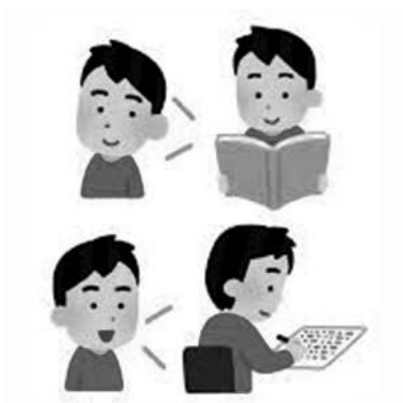
「まだ前を向こう」

「夢を叶えるために」

そして勝ちたいから

その「勝つ」を原動力に

頑張り続けて試合に勝って夢を叶えたい



物価高

新栄中一年 高橋 直大

プリンを見て思う 小さくなったな

クッキーを見て思う 小さくなったな

パンを見て思う 小さくなったな

コンビニおにぎりを見て思う 小さくなったな

ぼくが大きくなったからかな

日常

優秀作品

新栄中二年 藪 井 駿 太

いつも通りの日

友達と遊んだ日

友達とけんかした日

先生に怒られた日

徹夜して勉強した日

一日中寝た日

そんな何気ない日が

積み重なって

できたんだ

あの頃みたいに

泣き虫じゃない

今の自分が

現代短歌 北陽集

北陽中二年 濱田 成美

この思い 一音にのせ 響かせる
唯一無二の きらめく音を



現代短歌 北陽集

北陽中二年 上神谷 杏夢

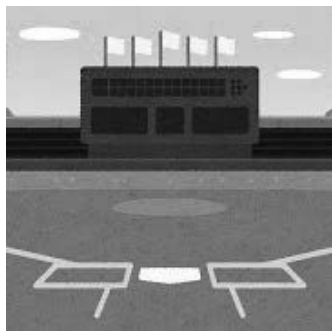
燦然たる 友の声援 背負いつつ
励んで跳んだ あの自己ベスト



現代短歌 北陽集

北陽中二年 浅子 真澄

騒がしい サヨナラ場面 野球場
バックスクリーン 飛び込むボール



無題

栄進中二年 平良 果凛

波の声 花火の音に
大きな花下 広い海
かき消され



「生きているということ」

優秀作品

平方中三年 小林 ひかり

「無」

そして生まれる

宇宙が

銀河が

地球が

生命が

やがて命が進化する

何百年と

何千年と

何万年と

何億年と

「無」から始まり、多くの歴史を紡いで

「人」が生まれる。

私たちは生きている

胸に手を当てると、ドクドクというように

私たちは生きている

誰かが奏でた音楽

初めてきく、我が子の産声

果てしなく続く

空、海、草原、そして宇宙

これらに感動するように

帰り際の友達との「またね。」

太陽が沈んだ後の、空の名残

暗闇と静寂に吞まれてしまいそうな夜

これらに寂しさを覚えるように

家族とご飯を食べる、あの時間

友達と笑い合った何気ない、あの会話

これらに幸せを感じるように

私たちは生きている

「死」を恐れるように。

生きているということ

それは心臓が動いていることだけじゃない
あらゆる出来事に「心」が振り回されること

喜び、悲しみ、怒り、驚き、不安、嫌悪…

「心」は神様がくれた、大切な宝物

私は「人」として生まれてきたことに、
誇りをもって生きていきたい。



将来の夢

平方中三年 吉 積 怜 南

人は、将来の夢を持っている。

ただし、全ての人とは限らない。

人は、将来の夢があると、その夢に向かって走りだす。
夢を持っていない人は、夢を探しだす。

だけど、夢は探しだすものではなく、出会うものだと思う。

探しだしたものは、道端に落としてしまうかもしれない。

出会ったものは、自然と自分についてきてくれる。

人は、将来の夢と出会い、その夢と人生を
前進しながら進むことができる。

上り坂と下り坂

平方中三年 松本 栞奈

楽しいこと、悲しいこと

どちらも無い人生を平らな地面だとすると

いつか生きる意味をなくして

止まってしまふ

楽しいことを上り坂、悲しいことを下り坂

交互に起きる人生なら坂で勢いが増し

止まらずに進みつつづけることができる

今が苦しくても、その悲しみの分

大きく上がることができる

仲間と共に困難を乗り越えれば

絶対明るい未来がある

そう思えた方が

前に進んでいけるかもしれない

自然といつまでも一緒に

平方中三年 松下 夏葵

今 私の住んでいる地域では

春には ヒラヒラヒラ

美しい桜が舞い散っている

夏には ミーンミンミン

元気にセミが合唱している

秋には カサカサパリパリ

落ち葉の赤いじゅうたんが敷かれている

冬には シャリシャリシャリ

植物が冷たい霜をまとっている。

私が大人になって帰ってきたとき

自然が奏でる音はまだ聞こえるだろうか

静かで寂しい場所になっていないだろうか

私はこの音が好きだ

いつでもいつまでもこの音に会うために

自然と共存できる世界をつくっていかう

佳作一覧

《作文の部門》小学四年生

氏名	題	名	学校名・学年
今岡 紗絵	すてきな言葉で心すつきり	越ヶ谷小四年	越ヶ谷小四年
大谷 すみか	ヘレン・ケラーのすばらしさ	越ヶ谷小四年	越ヶ谷小四年
中村 あおい	きずつきたいじわる	越ヶ谷小四年	越ヶ谷小四年
平野 陽一	ぼくの考えとみんなの考え	越ヶ谷小四年	越ヶ谷小四年
柳 珠里	人には一人一人の道がある	越ヶ谷小四年	越ヶ谷小四年
川越 丈翔	みんな一緒、みんな友達	新方小四年	新方小四年
加藤 里望	たった一つの命	桜井小四年	桜井小四年
木野 優璃	外国人でも日本にきていいよ	桜井小四年	桜井小四年
石坂 春陽	やさしい気もちをわすれない	萩島小四年	萩島小四年
萩原 千弦	戦争で困っている人達	萩島小四年	萩島小四年
古川 幸乃	せんそうはなぜおこる	萩島小四年	萩島小四年
松原 峻	スポーツマンシップ	萩島小四年	萩島小四年
山本 侑依	いじめについて	萩島小四年	萩島小四年
福田 蓮夏	「わたしの未来のゆめ」	出羽小四年	出羽小四年
大串 柚月	一つの思いやりで	大相模小四年	大相模小四年
肝付 凜	自分の未来の幸せのために	大相模小四年	大相模小四年
小森 谷斗輝	友達と仲良くすごすため	大相模小四年	大相模小四年
須藤 瑞希	心の中のもやもや	大相模小四年	大相模小四年
山口 瑠奏	区別と差別のちがい	大相模小四年	大相模小四年
石川 惺奈	話し方では決まらない	川柳小四年	川柳小四年

伊藤 黎	スマートフォンの正しい使い方	川柳小四年	川柳小四年
長友 杏來	男らしさ 女らしさとは	川柳小四年	川柳小四年
橋口 律太	男女スポーツ	川柳小四年	川柳小四年
前山 光里	自分らしさ	川柳小四年	川柳小四年
村木 孝太朗	電車	川柳小四年	川柳小四年
渡邊 颯樹	見た目じゃなくて	川柳小四年	川柳小四年
渡辺 唯葉	ゆずり合い	川柳小四年	川柳小四年
伊藤 万尋	とく意なこと苦手なことはだれにでもある	南越谷小四年	南越谷小四年
大山 純怜	自分の思っている事	南越谷小四年	南越谷小四年
斉藤 愛実	未来に向けて考えること	南越谷小四年	南越谷小四年
陳 毅	ぼくのゆめはプロ野球選手	南越谷小四年	南越谷小四年
大友 美都	深刻ないじめ	東越谷小四年	東越谷小四年
神代 百花	みんながいやなこと、よろこぶこと	東越谷小四年	東越谷小四年
須賀 有香	言葉の大切さ	東越谷小四年	東越谷小四年
柴田 乃遙	一人一人の意しき	大沢北小四年	大沢北小四年
石原 実来	私達の平和なくらしと戦争	大袋北小四年	大袋北小四年
谷山 明美	自分の意見は言っている	大袋北小四年	大袋北小四年
藤曲 小百合	「ヘッドネーション」	大袋北小四年	大袋北小四年
金子 奈菜未	気持ちよくじゅぎょうをはじめる	北越谷小四年	北越谷小四年
金子 裕太朗	たのしいはた係	北越谷小四年	北越谷小四年
須釜 大翔	「生き物の仕事について」	北越谷小四年	北越谷小四年
永山 実季	まわりにめいわくがかかる行動	北越谷小四年	北越谷小四年

根岸 杏	むずかしかった米当番	北越谷小四年
間宮 太智	生き物係のそうじ、エサあげエサやり	北越谷小四年
榎本奈々花	止めよう地球温暖化	平方小四年
九ノ里帆華	ゴミがないかんきょうの未来へ	平方小四年
小林 美結	今一番めざしていること	平方小四年
鈴木 蘭禾	私の命	平方小四年
柴崎 柚	女の子なのに	弥栄小四年
杓野 達希	「みんなちがってみんないい」	大間野小四年
藤澤 涼太	海にゴミをすてないで！	大間野小四年
横田衣万里	いろんな人との交流	大間野小四年
鈴木 愛莉	自分とちがう人	宮本小四年
鈴木 七絆	なかよし世界	宮本小四年
佐藤 彩咲	動物は人間と同じ	鷺後小四年
杉山 遙人	よい言葉と悪い言葉	鷺後小四年
戸塚 遥菜	わたしの将来の夢	鷺後小四年
細井 絢音	大切な友達	鷺後小四年
松野 芽	お母さんとお父さんの一言	明正小四年
岩知道ゆずき	大切な友達	桜井南小四年
平林 咲南	みんなで助け合い	桜井南小四年
古市 茉梨	「そうなんだ」	花田小四年
宇田川航生	かなえないしようにのゆめ	蒲生小四年
富田 奏	私のゆめ	蒲生小四年

《作文の部門》小学五年生		
竹内 友香	ぼくとわたし、男性と女性	越ヶ谷小五年
大矢 詩帆	「楽しく生きるために」	大沢小五年
浅井 海織	私の相棒	新方小五年
染谷 樹菜	いじめは気持ちの問題	新方小五年
塚本 海翔	メリットがない	新方小五年
濱野 菜摘	けんか	新方小五年
菊池 幸月	「病気の家族について」	桜井小五年
嘉齊 美乃	協力する大切さ	桜井小五年
佐藤あやめ	白杖体験を通して	桜井小五年
佐藤 叶和	車イス生活	桜井小五年
濱田真由莉	「一票を入られる責任」	桜井小五年
淀野 咲茉	みんながいたから	桜井小五年
伊東 直輝	相手の立場になってみると	大袋小五年
稲嶺 拓海	明日に向かって	大袋小五年
土谷 唯夏	マイナスをプラスに	大袋小五年
十鳥孝太郎	ぼくのお姉ちゃん	大袋小五年
藤原 樹菜	運命と奇跡	大袋小五年
鈴木 煌	ぼくの将来の夢に向けて	荻島小五年
棚井 遥希	ぼくの将来の夢	荻島小五年
西村 楓佳	未来に向かってがんばる気持ち	荻島小五年
松沢琥太郎	「努力は報われる」	荻島小五年

一ノ瀬陽希	みんなが幸せにくらすために	出羽小五年
岡田 蒼生	パリアフリーについて	大相模小五年
小川 琥白	忘れてはいけない医療現場があったこと	大相模小五年
須田 心寧	戦争による人権侵害	大相模小五年
松原 美月	人の気持ちを考えることの大切さ	大相模小五年
豊田 桜彩	体そうの努力	川柳小五年
中島 優子	身近に起きる差別	川柳小五年
長谷川クロエ	将来の夢	川柳小五年
村松 朔也	世界平和を願う	川柳小五年
室井 環那	その人の本当のこと	川柳小五年
今井 友菜	未来のまちのためにできること	南越谷小五年
佐藤 龍皇	画面の向こうにも心がある	南越谷小五年
西田さくら	地球温暖化とは？	南越谷小五年
江原 忠恒	「人権を守るために」	東越谷小五年
樋口 玲菜	「自分らしく」	東越谷小五年
山口 留依	大切な家族	東越谷小五年
大木 晴太	障がい者が生きやすい社会に	大沢北小五年
中村 夢咲	アフリカの子ども達	大沢北小五年
高橋里結子	外国人が住みやすい地域へ	大袋北小五年
櫛村 燈真	「自分の幸せと他の人の幸せ」	蒲生南小五年
奥村 璃花	理想に近づくために	北越谷小五年
長澤 佑馬	ぼくのみぢかなちいきの人達	弥栄小五年

飯塚 優斗	人の見た目ではんだんしない	宮本小五年
坂本 莉奈	私の将来の夢	宮本小五年
佐藤 壬結	わたしががんばっていること	宮本小五年
高崎 隼斗	いじめの悲しさ	宮本小五年
本間 晴翔	将来の夢	宮本小五年
間藤 絢風	戦争をなくすために	宮本小五年
米田陽茉莉	親にあこがれて	宮本小五年
久保田さくら	今がんばっていること	鷺後小五年
濱中 結愛	「平和って何だろう。」	鷺後小五年
原田 結菜	親との時間	千間台小五年
青山 佐代	「無視をしたら心がぎずつく」	桜井南小五年
石山まどか	「本当のやさしさ」	桜井南小五年
奥津 小智	母の大変さ	桜井南小五年
上谷 優仁	家族のすてきなところ	桜井南小五年
川田 侑人	しょうがいのある人のためにできること	桜井南小五年
佐藤あさひ	ぜつめつきぐしゅたち	桜井南小五年
早坂 祐乃	わたしの友だち	桜井南小五年
細田 瑞貴	男と女	桜井南小五年
安部なな海	今がんばっていること	花田小五年
岩上 千愛	世界をきれいにするために	花田小五年
川俣 美結	音楽委員会について	花田小五年

《作文の部門》 小学六年生

福田	遥姫	いじめをなくすために	越々谷小六年
内田	陽菜	「理解が深まるには」	大沢小六年
中山	桃佳	「戦争と人権」	大沢小六年
川上	玲佳	青い空を未来へ	新方小六年
神田	紅葉	ネコの雪丸とイヌの小太郎	新方小六年
永井	愛香里	保育士を目指して	新方小六年
春日	一花	平和な世界に	桜井小六年
清水	笑瑠	言葉ってすごい	桜井小六年
白鳥	湊	「友達のそん在」	桜井小六年
鈴木	花音	くらしやすい社会へ	桜井小六年
武内	英嗣	あいさつをする理由	桜井小六年
長嶋	純羽	外国人がまわりにいたとしても	桜井小六年
永洞	愛美	「足の悪い人が転んだ」	桜井小六年
中村	心咲	個性と多様性について	桜井小六年
小林	柚	自分の夢を叶えるために	大袋小六年
佐藤	楓花	やさしく、よりそって	荻島小六年
堀越	咲来	障がい者の人権	荻島小六年
渡邊	望子	言葉の持つ力	出羽小六年
石井	陽南梨	様々な視点から見て	大相模小六年
大西	葉奈	「ふつう」のない社会に	大相模小六年
藤井	康大	素直になれない	大相模小六年

山下	葉奈	高れい者を支える	大相模小六年
伊藤	綾海	命の大切さと私のしょうらいの夢	南越谷小六年
大西	陽花	「SDGs」について	南越谷小六年
柿沼	妃佳里	未来のだれかとわたしへ	南越谷小六年
根本	結梨	すてきな未来へ	南越谷小六年
前田	ちひろ	みんなにとどけ、私の絵本	南越谷小六年
茂木	裕美子	「あいさつ」はパワー	南越谷小六年
石川	楠央	戦争と差別について	東越谷小六年
岡本	芽依	男と女、そして「その他」	東越谷小六年
落合	理彩	「ありがとう」はまほうの言葉	東越谷小六年
田中	輝	笑いあふれる世界	大沢北小六年
中山	明香	男女平等な社会	大沢北小六年
石川	咲恵	「まずは自分に言ってみよう」	大袋北小六年
江藤	和奏	小学生だからできること	大袋北小六年
垣内	悠乃	本当の言葉って何だろう	大袋北小六年
風間	菜央	つなげる	大袋北小六年
田中	咲花	障がいをこえて	大袋北小六年
長戸	彩夏	性的マイノリティと私	大袋北小六年
増山	小百合	嫌なことは嫌だつていいのに…	大袋北小六年
山本	杏奈	人に優しく	大袋北小六年
水足	柚月	女性の権利	蒲生南小六年
宮本	奈々	笑顔の理由	蒲生南小六年

折笠 耕一	誰もが安心して過ごせる社会のために	大袋東小六年
星野菜津美	人間関係を大切に	平方小六年
中川 沙恵	障がいのある人がよりよい生活をおくるために	大間野小六年
中津 駿	がんばること	宮本小六年
木村美以奈	「私の夢」	西方小六年
橋本 彩希	ありのままの自分で	西方小六年
堀切 実桜	みんなちがってみんないい	西方小六年
八城 栞歩	性同一性障害について	西方小六年
加藤那々実	見つける	鷺後小六年
加藤 永琉	男女差別と自分たち	鷺後小六年
中島 彩良	人気小説家になるために	明正小六年
相沢 奏斗	戦争のない世界へ	桜井南小六年
稲福 琉愛	将来のためにがんばっていること	桜井南小六年
小平真友美	「平和について考えること」	桜井南小六年
齋藤 真央	「毎日のありがたさ」	桜井南小六年
鈴木 花歩	じゅう医としてかがやくために	桜井南小六年
中村茉莉咲	優しい地域の人	桜井南小六年
浅間 花恋	役に立てることは	花田小六年
林 咲太朗	将来の夢	花田小六年
百木 杏	私の将来の夢	城ノ上小六年
小川 柚菜	自分の意見を持つ	蒲生小六年
清水愛梨奈	大人に訴えたいこと	蒲生小六年

皆川 零音	「外国人差別」	蒲生小六年
-------	---------	-------

《詩の部門》 小学四年生		
氏 名	題	名
秋山 大地	友達	新方小四年
新井優里那	わたしのしょうらいのゆめ	蒲生南小四年
野原 咲音	みんなはみんなわたしはわたし	蒲生南小四年
馬場 航希	色々なことがある算数	蒲生南小四年
平山 翔和	ドラマーの道	蒲生南小四年
本多 咲来	しょう来のゆめ	蒲生南小四年
水野 飛琉	ともだちをたいせつに	蒲生南小四年
山下 春真	心が晴れれば笑顔が咲く	蒲生南小四年
尾崎 桂太	世界の未来	平方小四年

《詩の部門》 小学五年生		
氏 名	題	名
金森航太郎	人間	学校名 学年
川上真由夏	差別のない世界	新方小五年
佐伯 歩来	春	新方小五年
堀江 優奈	みんな同じじゃつまらない	新方小五年
高月 紗柎	新しい人生	増林小五年

船橋 玄	ぼくの夢は…	南越谷小五年
清水 彩月	将来の夢	弥栄小五年
中見川 怜	将来の夢	弥栄小五年
荒金 隼士	笑う	蒲生小五年

《詩の部門》 小学六年生

氏 名	題	名	学校名・学年
新木田悠太	人の感情		新方小六年
鈴木 美結	大切な人ありがとうを		新方小六年
増田 彩希	生まれてよかったと思えたなら		荻島小六年
吉岡 華乃	「自分の色」		荻島小六年
鈴木 紗綾	空気の色		増林小六年
花崎 唯	チャレンジの大切さ		川柳小六年
深井 理衣	未来のパティシエール		川柳小六年
古谷 美咲	私らしく		川柳小六年
高津 惟愛	重ねる努力		南越谷小六年
菅原 蓮	みんな同じ人間だから		蒲生南小六年
河西 大地	楽円		北越谷小六年
河西 広翔	「I LOVE ダンジョン」		北越谷小六年
佐々木琉央	植物とのたのしみ		北越谷小六年
玉井 楓真	友		北越谷小六年
富山桜次郎	たのしみは		北越谷小六年

原勢莊二朗	「半熟と完熟」	北越谷小六年
星山 美奈	たのしみは	北越谷小六年
松田 零司	晩ご飯	北越谷小六年
山崎 康登	夢を見る時	北越谷小六年
山本 羽純	お父さんのてぶくろ	北越谷小六年
家村 美羽	進む道	弥栄小六年

《作文の部門》 中学一年生

氏名	題	名	学校名・学年
大澤 頼宏	承認欲求が生むものなくすもの	東中一年	東中一年
亀沢 篤仁	あなたがつなげる	東中一年	東中一年
清水 柑那	みんなの協力で日本を守る	東中一年	東中一年
富沢みなみ	自分が持っている良さとは	東中一年	東中一年
山崎 香凛	友達のあたたかさ	東中一年	東中一年
山下 奏美	私の夢	東中一年	東中一年
加藤 帆夏	誰かを支える物語を	北中一年	北中一年
清水 和花	みんなの笑顔を作る	北中一年	北中一年
藤枝真奈実	私たちの行動で	北中一年	北中一年
河野 彩希	夢を叶えるために	富士中一年	富士中一年
神山 結衣	自分の立場で	栄進中一年	栄進中一年
皆川 奏太	「優しさあふれる学校生活」	栄進中一年	栄進中一年
高木 瑞夏	夢を追う	光陽中一年	光陽中一年
高木 千晴	今頑張っていること	平方中一年	平方中一年
田中 愛彩	たくさんの命を大切に	平方中一年	平方中一年
藤吉 湊介	バスケットから学んだこと	平方中一年	平方中一年
増田 芽依	支えてくれる人の大切さ	平方中一年	平方中一年
伊藤 康耀	不得意は個性の一つ	大袋中一年	大袋中一年
日暮 優衣	『平和』とは。	新栄中一年	新栄中一年
石田 渉	将来の夢	大相模中一年	大相模中一年

外賀 桜祐	強敵がいるからこそその夢や笑顔	大相模中一年
野見 龍臣	将来の夢	大相模中一年

《作文の部門》 中学二年生

氏名	題	名	学校名・学年
栗山 結生	いつでも言葉を大切に	中央中二年	中央中二年
後藤 優羽	私の今を歩む	東中二年	東中二年
武澤 柚和	「言葉」の善し悪し	東中二年	東中二年
星野 心結	環境問題	東中二年	東中二年
吉田 さら	「平和」について	東中二年	東中二年
岩崎 果音	言葉の重み	西中二年	西中二年
内田 圭翔	コメ問題	西中二年	西中二年
大和 杏寧	大人に訴えたいこと	西中二年	西中二年
川越亜桜葉	将来のために	西中二年	西中二年
久保 実愛	「言葉」から生まれるもの	西中二年	西中二年
佐藤 薫	頑張れるようになったこと	西中二年	西中二年
鈴木 維依	「叶えたいこと」	西中二年	西中二年
鈴木 瑠太	大人にうったえたいこと	西中二年	西中二年
田村誠乃介	何度間違えても	西中二年	西中二年
土井 涼楓	未来の世界	西中二年	西中二年
中川美穂子	なぜ大人は簡単に嘘をつくのか	西中二年	西中二年
濱畑 瑠菜	略語	西中二年	西中二年

平石	萌叶	チャンスをキヤッチ	西 中二年
堀越	莉桜	あせらずに、一歩ずつゆつくりと	西 中二年
小笠原	紬	五年後の未来	平方中二年
関根	沙織	気持ちを考える	平方中二年
中島	孝太	将来のために今頑張っていること	平方中二年
綿貫	妃華	これから頑張ること	平方中二年
伊草	涼乃	興味本位の陸上部	武蔵野中二年
石川	莉緒	展覧会	武蔵野中二年
貝賀	奏空	スキー教室で学んだこと	武蔵野中二年
小瀧	夏維	自然の美しさ	武蔵野中二年
小森	奏斗	白鳥の正体	武蔵野中二年
鈴木	莉子	大人	武蔵野中二年
関吉	優斗	大切な使命感	武蔵野中二年
高橋	侑士	あきらめないこと	武蔵野中二年
都丸	龍馬	山登り	武蔵野中二年
富永	結咲	洋楽	武蔵野中二年
内藤	万尋	私の一步	武蔵野中二年
原	梨紗	自然の織りなす絶景に心を打たれ	武蔵野中二年
松浦	創介	憧れのあの人	武蔵野中二年
三好	深月	歪んだペットボトル	武蔵野中二年
矢作	美羽	自然の大切さ	武蔵野中二年
飯島	千晴	ソーシャルスキルの必要性	大袋中二年

氏 名	題	名
甚内 里緒	その一言で	南 中三年
鈴木 芙優	自分	南 中三年
戸田 凪咲	「考える」ということ	南 中三年
那須 潤哉	「ハーフ」	南 中三年
湯本 椋大	周りをよく見てみる	南 中三年
柿野 瑞季	「苦しいことから逃げない心」	北 中三年
菊地 惺来	夢をかなえるために	北 中三年
横田 晴菜	将来の私は	北 中三年
大澤 陸斗	卒業までの時間と思い出	栄進中三年

《作文の部門》 中学三年生

後藤 小雪	SNSの向こう側には	大袋中二年
小林孝太郎	SNSの使い方	大袋中二年
広瀬 唯愛	自分らしさ	大袋中二年
高橋 理吉	見えない差別に気づいた時	新栄中二年
田中 晴隆	勉強できるうれしさ	新栄中二年
今泉 彩心	後輩のお手本	大相模中二年
今城ひなた	夢のあり方	大相模中二年
上林 優奈	まわりの理解の大切さ	千間台中二年
佐藤 唯菜	将来の夢	大相模中二年
花木 真優	感覚過敏くメガネと同じようにく	大相模中二年

片岸 凜	きつと、気づいていないだけ	栄進中三年
平柳 玲奈	音楽のおもしろさ	栄進中三年
工藤 大地	私とテニス	光陽中三年
佐藤 宏樹	自立した生き方	光陽中三年
谷崎 美暉	チャレンジ	光陽中三年
堀切 結衣	チームワーク	光陽中三年
朝倉 花心	平和と向き合うこととは	平方中三年
飯森 夕唯	「美しい海を守るために」	平方中三年
小林 紫乃	知らない	平方中三年
鶴丸 愛來	私の原動力	平方中三年
中川 梅乃	「地球でくらす私たち」	平方中三年
本田 彩結	SNSと私たち	平方中三年
梶野由梨佳	自分の将来に向けて	新栄中三年
北村帆菜実	多様性の社会とは	新栄中三年
原田未依菜	私の将来の夢	新栄中三年
緒方 心美	どんな大人になりたいのか	大相模中三年
橘高 芽依夢		大相模中三年
木村 貫路	夢へ向かう努力	大相模中三年
戸井田美桜	未来について考えること	大相模中三年
森田 涼子	自分たちにはできないことを	大相模中三年

《詩の部門》 中学一年生		
氏 名	題	名
今井亮太郎	ぼくたちの希望	北中一年
高橋 一平	夕陽と田	栄進中一年
日高 結芽	幸せって何だろう	新栄中一年
村田 諒輔	努力の表す結果	新栄中一年

《詩の部門》 中学二年生		
氏 名	題	名
青山 翼	現代短歌	北陽中二年
新井琉稀斗	現代短歌	北陽中二年
岩淵凜杏椰	現代短歌	北陽中二年
打越 詠士	現代短歌	北陽中二年
戸張 涉	現代短歌	北陽中二年
兵藤 咲希	現代短歌	北陽中二年
清水 一樹	無題	栄進中二年
町田 快斗	おきる	新栄中二年

《詩の部門》 中学三年生

氏 名	題	名
蘆田 壮祐	日常の幸せ	新栄中三年
古門 蒼空	「努力」	新栄中三年
戸ヶ崎莉緒	花	新栄中三年
中村 圭吾	自分の未来はどうだろう	新栄中三年
吉田ちひろ	私に	新栄中三年

☆作品を選考されたのは

青少年育成越谷市民会議役員・理事の方々です。

(敬称略・順不同)

団 体 名	氏 名
越谷市子ども会育成連絡協議会	飯 島 孝 子
越谷市ボーイスカウト各団連絡協議会	大久保 亨
越谷市青少年育成推進委員協議会	毒 島 美重子
越谷市青少年指導員連絡協議会	石 塚 忠 男
越 谷 市 自 治 会 連 合 会	川 村 耕 治
越 谷 市 ス ポ ー ツ 少 年 団	山 口 実
越 谷 商 工 会 議 所 青 年 部	横 井 雄一郎
越谷市ガールスカウト連絡協議会	湯 田 ミノリ
越 谷 市 青 少 年 相 談 員 協 議 会	山 崎 理 恵
越 谷 市 P T A 連 合 会	山 室 舞
越 谷 市 レ ク リ エ ー シ ョ ン 協 会	志 村 紀 子
越 谷 市 ス ポ ー ツ 協 会	富 澤 勤
越 谷 青 年 会 議 所	厚 川 雄 太

(令和7年8月現在)

各種相談窓口案内（青少年・保護者の悩みごと相談）

《 市内相談機関 》

越谷市青少年相談室（月・火・水・金：9時～16時）・・・048-964-0272

越谷市教育センター（月～金：9時～19時）（土：9時～16時40分）

（電話相談）・・・048-962-9300

・・・048-962-8601

（子ども専用）・・・048-962-8500

越谷市家庭児童相談室（月～金：9時～16時）・・・048-963-9319

越谷警察署生活安全課少年相談・・・048-964-0110(代)

埼玉県越谷児童相談所（月～金：8時30分～18時15分）・・・048-975-4152

《 県内相談機関 》

埼玉県警察少年サポートセンター（月～金：8時30分～16時15分）

・少年相談（非行、いじめ、犯罪被害等）（保護者用）

・・・048-865-4152

・ヤングテレフォンコーナー（少年専用）

・・・048-861-1152

埼玉県男女共同参画推進センター（with You さいたま）

（月～水曜日、金・土曜日：9時30分～20時30分、日曜、祝・休日：9時30分～17時）

・年齢・性別（性自認）・相談内容を限定せず、相談受付

・・・048-600-3800

埼玉県精神保健福祉センター「こころの電話」（月～金：9時～17時）

・・・048-723-1447

埼玉いのちの電話（毎日：24時間）

・・・048-645-4343

埼玉いのちの電話フリーダイヤル（毎月10日8時～11日8時まで/毎日16時～21時まで）

・・・0120-783-556

さいたまチャイルドライン（18歳までの子ども専用）（毎日：16時～21時）

・・・0120-99-7777

埼玉県立総合教育センター「電話相談」（毎日：24時間）

（18歳までの子ども用）・・・0120-86-3192

（保護者用）

・・・048-556-0874

《メール相談》

・・・soudan@spec.ed.jp

発 行	令和7年11月
編 集	越谷市 越谷市教育委員会 青少年育成越谷市民会議
事務局	越谷市子ども家庭部青少年課 電話 048-963-9308

毎月第三日曜日は
「家庭の日」

～みんなで築こう 明るい家庭～

青少年育成越谷市民会議統一テーマ

あいさつは 心をつなぐ
“愛”言葉